

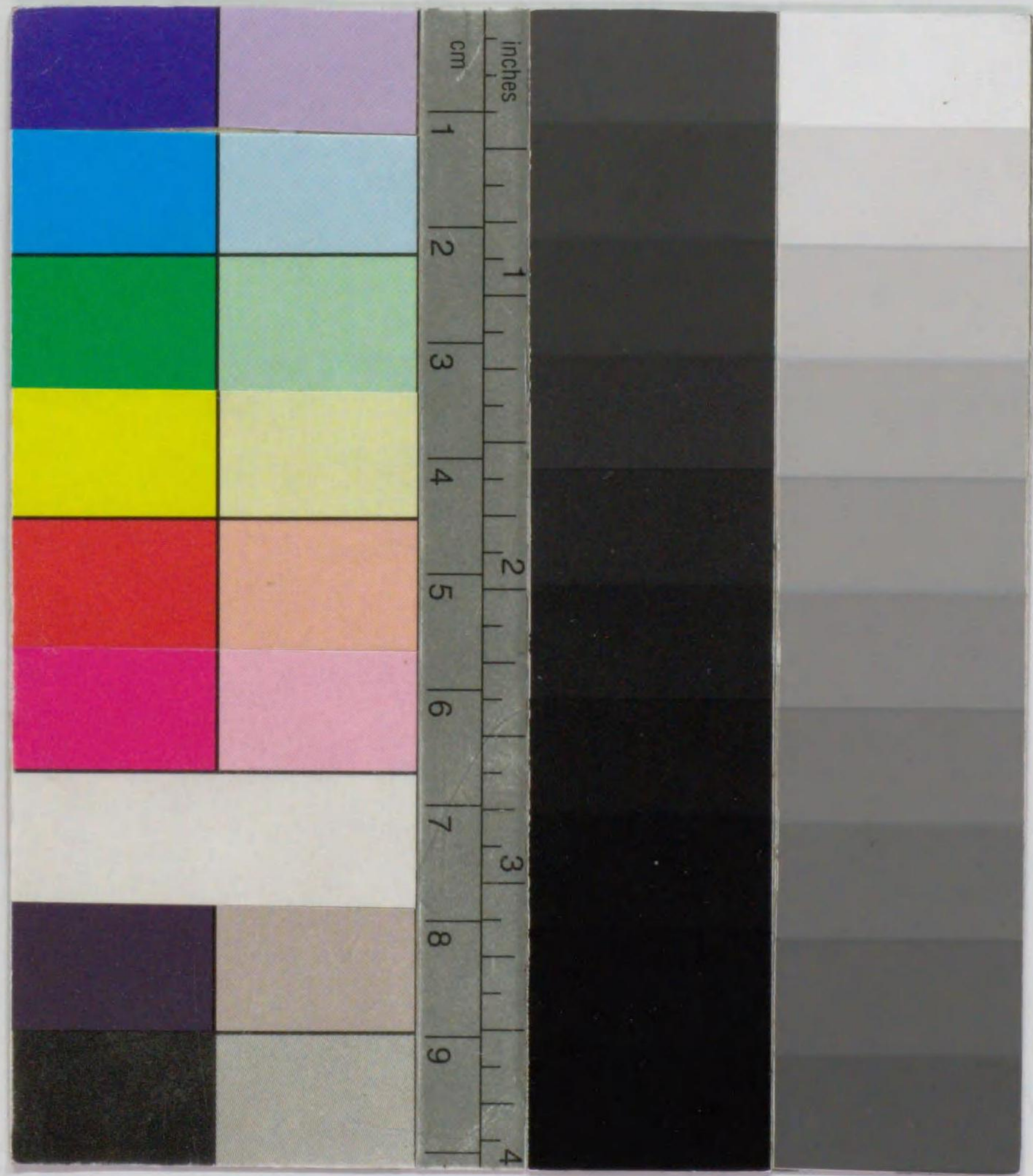
569
61

569-61



1200501517097

口
複
写



28. 8. 13

附本

第七卷 世界大衆文學全集

巖窟王

下卷

黑岩淚香





眼にうやくづ近に抱介の身我が女いし美めとい、てし地心ため憂の眼に國天、き遠に境の幻夢を尉大は藥蓋てし果
照參頁三七四).....たれば

569-61

目次

一四四	心得ました	一〇
一四七	空前の奇観	三
一四八	公證人	七
一四九	婚姻政略	二〇
一五〇	運の神、福の神	二四
一五一	愈々土曜日	二八
一五二	掌中から何か紙切	三
一五三	荊の路、針の席	三
一五四	食堂	七
一五五	罪深い或る品物	三
一五六	この伯爵は大變者	四〇
一五七	乞食	四
一五八	年金とは幾等	四
一五九	妻の室に飛んで行つた	五
一六〇	二ヶ條の宣告	五
一六一	濃い覆面の一婦人	七

一九九	曲	者	(四)	一八六
一九八	曲	者	(三)	一八二
一九七	曲	者	(二)	一七九
一九六	曲	者	(一)	一七五
一九五	もう一ヶ月ぐらゐ			一七一
一九四	その實、本統の父			一六八
一九三	蛭峰家		(十三)	一六四
一九二	蛭峰家		(十二)	一六〇
一九一	蛭峰家		(十一)	一五七
一九〇	蛭峰家		(十)	一五三
八八九	蛭峰家		(九)	一五〇
八八八	蛭峰家		(八)	一四六
八八七	蛭峰家		(七)	一四二
八八六	決闘の條件			一三九
八八五	一城の主の姫君			一三五
八八四	歌牌が出来ました			一三一
八八三	賣國奴の一頂			一二八
八八二	言葉は明々白々			一二四
八八一	未熟な男で無い			一二〇

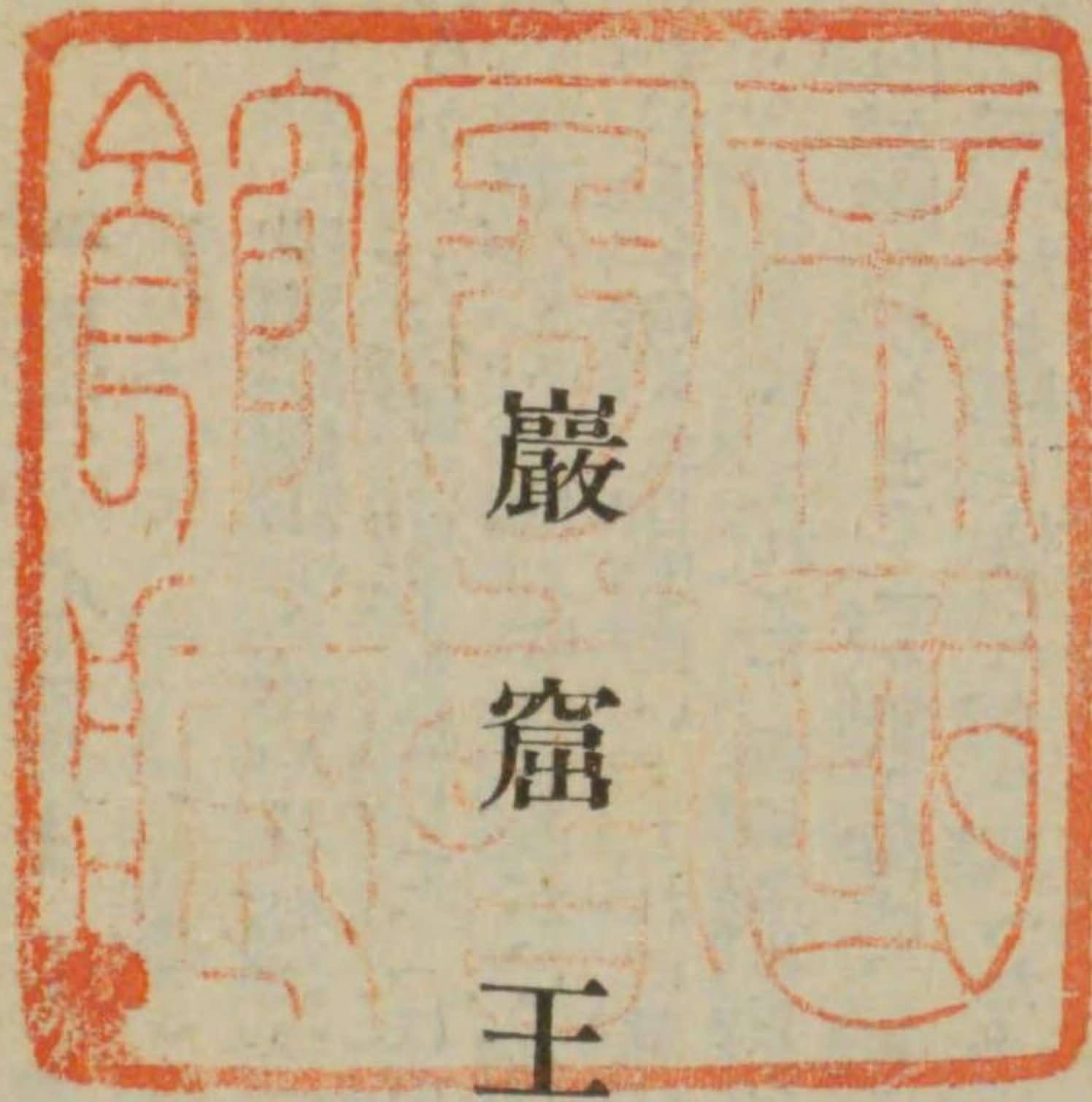
一八〇	蛭峰家		(六)	二一七
一七九	蛭峰家		(五)	二一三
一七八	蛭峰家		(四)	二一一
一七七	蛭峰家		(三)	二〇七
一七六	蛭峰家		(二)	二〇四
一七五	蛭峰家		(一)	二〇三
一七四	氣味悪く聞える節			二〇〇
一七三	盆栽架			九七
一七二	二十年前の彼は			九三
一七一	死生の疑			九〇
一七〇	肝腎の記念の筋			八七
一六九	その記念が鮮です			八三
一六八	偽の動物			八〇
一六七	特務巡查			七七
一六六	警視總監から			七四
一六五	油断の出来ぬ強敵が			七一
一六四	紋の片割			六八
一六三	聞かせて下さい			六四
一六二	證據が有ります			六一

二〇〇	一冊の姉妹書	一九五
二〇一	大活劇の幕開	一九五
二〇二	議場空前の光景	二〇〇
二〇三	總身の剛ばつたやうに	二〇四
二〇四	委員會 (一)	二〇七
二〇五	委員會 (二)	二一〇
二〇六	委員會 (三)	二一四
二〇七	委員會 (四)	二一八
二〇八	翌日の午後	二二三
二〇九	彼の仕業	二三五
二一〇	伯爵だ、伯爵だ	二三九
二一一	母への孝行	二四三
二一二	眞に濟々と	二四六
二一三	母の情	二四九
二一四	お相手になりませう	二四二
二一五	命と命の取替	二四五
二一六	友太郎とお露 (一)	二四九
二一七	友太郎とお露 (二)	二五二
二一八	友太郎とお露 (三)	二五六

二一九	友太郎とお露 (四)	二六〇
二二〇	友太郎とお露 (五)	二六四
二二一	死の前夜 (一)	二六七
二二二	死の前夜 (二)	二七一
二二三	死の前夜 (三)	二七四
二二四	決闘場 (一)	二七八
二二五	決闘場 (二)	二八二
二二六	決闘場 (三)	二八五
二二七	一家離散の時	二八九
二二八	父將軍は何處へ行つた	二九三
二二九	我が家から落人	二九六
二三〇	將軍と伯爵 (一)	三〇〇
二三一	將軍と伯爵 (二)	三〇三
二三二	將軍と伯爵 (三)	三〇六
二三三	又も蛭峰家 (一)	三一〇
二三四	又も蛭峰家 (二)	三一四
二三五	又も蛭峰家 (三)	三一七
二三六	段倉家 (一)	三二一
二三七	段倉家 (二)	三二四

二七五	二七四	二七三	二七二	二七一	二七〇	二六九	二六八	二六七	二六六	二六五	二六四	二六三	二六二	二六一	二六〇	二五九	二五八	二五七
結	結	結	告	斷	斷	斷	斷	裁	裁	裁	裁	裁	裁	死	獅	獅	貧	富
				末	末	末	末							刑	子	子	と	と
				魔	魔	魔	魔	判	判	判	判	判	判	毒	穴	穴		
(三)	(二)	(一)	別	(四)	(三)	(二)	(一)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	か	(二)	(一)	譽	恥
.....
四四二	四三八	四三六	四三四	四三二	四二九	四二五	四二二	四一八	四一四	四一	四〇八	四〇四	四〇二	三九八	三九四	三九一	三九〇	三八八

二五六	二五五	二五四	二五三	二五二	二五一	二五〇	二四九	二四八	二四七	二四六	二四五	二四四	二四三	二四二	二四一	二四〇	二三九	二三八
十月	大尉	大尉	段倉	段倉	段倉	華	華	華	華	誰	落	落	落	落	段	段	段	段
五日	と	と	と	と	と	子	子	子	子	の	人	人	人	人	倉	倉	倉	倉
まで	伯爵	伯爵	笑	笑	笑	子	子	子	子	身	人	人	人	人	家	家	家	家
(三)	(二)	(二)	(二)	(二)	(一)	(四)	(三)	(二)	(一)	が	(四)	(三)	(二)	(一)	(六)	(五)	(四)	(三)
.....
三八七	三八四	三八一	三七八	三七四	三七一	三六七	三六四	三六〇	三五七	三五四	三五〇	三四七	三四四	三四二	三四一	三三八	三三六	三三三



下卷

二八四	二八三	二八二	二八一	二八〇	二七九	二七八	二七七	二七六
大	結	結	結	結	結	結	結	結

團	末	末	末	末	末	末	末	末
圓	(七)	(十)	(九)	(八)	(七)	(六)	(五)	(四)

.....
四七〇	四六七	四六四	四六一	四五七	四五四	四五一	四四八	四四五

巖窟王 下卷

一四六 心得ました

入つて来た巖窟島伯爵は、二人が抱合つて涙に呉れて居るやうな状を見て、「お、御兩所は泣いて居られるか。」大侯爵は息子を放して、「はい、久々の對面に、嬉し涙が先に立ちました。」小侯爵も猶豫せず、「泣くまいと思ふについ涙が、」伯爵は笑しげに、「いや涙の出るほど嬉れしいとは羨ましい譯ですが兎も角もお目出度い。これに就けても先づお二人ともこの地へ逗留の手筈を定めればなりませんまい。」と言ひ、これより親切な忠告の口調を以て宿屋のことから、馬車の買入れや、衣服を注文する仕立屋のことまで一々語り聞け、更に小侯爵に向つて當座の小使に用達てると稱して、先刻大侯爵に與へたと同じほどの金を與へた。

兩個が猶豫も無く伯爵の言葉を承知したのは無論である、最後に伯爵は、「お二人へも、これから交際なさるに就いても人に向つて正直に、親子が久振りに出合つたの、或は息子の方が幼い頃から敵に攫はれて居たの有のまゝの事實を言ひますと、却つて人が作り話のやうに感ずるかも知れませんか。矢張り世間有觸れたやうに、息子をこの國の或る地方に在る高等學校に入れて置いて置いてこの度丁度

卒業したから、露國へ出張の途次この巴里へ立寄つて呼寄せたのだと斯ふ仰有るが好からうと思ひます。」侯爵「如何にもお説の通りです、それにまた實際は近々露國へ行きたいと思つて居ますからさう言ふも満更の偽りでは有りません。」と妙に露國行のことへ力を入れて答へるは、他日萬が一この土地を逃出さねばならぬやうな場合が有つても幾等かこの口實が役に立つかも知れぬと遠く慮かつての事だらう、息子の方はさうでない。「阿父さんが露國へお立ちなされても私だけは矢張りこの地に何時までも居て。」一年二萬圓の手當で贅澤を盡くしたいのだ、伯爵は父に代り「さうですとも貴方をこの巴里の交際場へ入れ、先刻も申す通り成らう事ならしかる可き縁談までも出来るやうにさせたいと言ふのが父上の望みですもの、ねえ侯爵。」侯爵「さうです、さうです。」伯爵「二人の名譽を以て交際場へ入るのは譯も無いことです、必ず遠からぬ中に招待状の雨が降るやうにもなりませんけれど、こゝに差當り私が晩餐會へお招きして、歴々の方へお引合せ致しませう。」この引合には多分何かの目的が潜んで居るに違ひ無いと二人は察した、何の目的にもせよ、早く達するところまで達して、自分等の立つて居る今の足場が何れほど危険か何れほど安全かを見届けたい、侯爵「有難くお招きに與りませう。」小侯爵「その晩餐會は何時でせうか。」侯爵「いや詳しい事は招待状に認めて明日お宿へ差出しますが明後土曜日の午後六時からです、これより侯爵が取引なさる有名な段倉銀行の頭取男爵段倉喜平次君夫妻も來客の中にあります、取分けこの方へは懇意をお結び成さるが得策でせう。」侯爵「心得ました。」小侯爵「私もですか。」伯爵「勿論です。」小侯爵「心得ました。」

若し伯が、この土曜日の晩餐會を以て兼て目論む大仕事の序開らきとする積りならば斯うまで準備に手を盡すも無理は無い、或はこの上にも猶ほ幾様の準備が有るかも知れぬ、それは扱て置き、兩人は先づこれで用事も盡きたと見て立掛けたが、侯爵の方はまた何か思ひ出して、「當夜の衣服は何う致しませう。」伯爵「貴方は軍服に限りませう、多分はお國の家扶から届ける行李の中に佐官の服や勳章なども有りませうから成る可く正式に成さるが宜しい。」軍服ならばこの人の剛ない姿勢に最も似合ふ筈だから、贖物と分る恐れが無い、小侯爵「私は。」伯爵「貴方は書生上りのことゆゑ、餘り華美には及びません、成る可く小意氣にさうして上品に、如何にも大家の若殿だと感心せらるれば好いのです。」六かしい忠告だけれど、素より永太郎の柄に在るのだ。侯爵「心得ました。」小侯爵「心得ました。」

これで兩人は辭し去つた、伯爵は直に窓の所へ行き、その立去る状を見たが、全く親子のやうに兩個手に手を引合つて密接して歩んで居る、伯爵は笑つて呟いた、「あのやうに揃いも揃つた兩個が、眞の父子で無いのが残念だ。兩個とも牢から出されて間も無い身で、魂生まで同じことだのに。」

一四七 空前の奇觀

この翌日は金曜日である、大仕事の序開きと思はれる土曜日の晩餐會は直ぐ明日に推寄せたのだ。

若し伯爵が晩餐會に就いて何か準備を要すとならば、この日の中に運ばねば成らぬだらう。

準備は大底調つて居る。たゞ伯爵の氣に掛るは、場所が吹上小路であるがために、若しや、肝腎の蛭峰が、自分の舊惡を思ひ出し恐れて出席を斷りはせぬかとの懸念である、既に蛭峰の妻からは無論參上と言ふ返辭を得て居るけれど、猶も念のため蛭峰自身から直接に固い返辭を聞いて置かねば成らぬ、これがために伯爵は先づ蛭峰の邸を指して家を出た。

併し伯爵はこの外にも多少用事を以て居る、その一は蛭峰の家の後街に當る大尉森江眞太郎の一家を訪ふことである、伯爵は何時でもこの邊へ來れば森江の許へ立寄らずには歸り得ぬ、全く森江一家をこの世においての唯一つの善人の家と思ひ大尉眞太郎を我が兒とも言ふほどに寵しんで、嬉しさにも悲しさにも總て彼の顔を見たいのだ。それを見れば嬉しさは益々度を増し悲しさは忽ち消えると云ふほどの狀である。これがためにこの日も蛭峰の家よりも前に先づ眞太郎の家に立寄つた。

* * * * *

若し蛭峰の家へ先に立寄つたならば大變な様事を見ることが出来る所で有つた、蛭峰の家には彼が伯爵へも話した通り今猶ほその父の野々内彈正が活きて居て、中風のため、全身不隨とは言へ心だけは確かであつて奥庭の隠居所に籠つて居る。丁度伯爵が森江の家に近い頃、この隠居所へ入つて來たのは蛭峰の先妻の娘、彼の華子である。多分は今日も垣根越に眞太郎と何か話でも仕て居て祖

父に薬を勧める刻限となつたため分れてこゝへ来たのであらう、顔には猶だ心配の色が残つて居る。この姿を見て病人は、「おゝ待つて居た。」と言ふやうに、嬉しくその眼を光らせた、全身中で動くのはたゞ眼ばかりとは憐れむ可き病で有る。

先づ薬を吞ませた上、静かに祖父の顔に顔を寄せ、「祖父さん、大變なことになりましたよ、愈毛脛安雄さんの歸朝の日は極つたと言ふことです、今朝阿父さんから私へその話が有りまして――さうして。」と言掛けて祖父の顔を見るに、一々聞取つて合點して居ると見え、眼を張開いて居る。

「さうしてねえ、何うしても婚禮の證書を以てこゝへ来るのでせう、何うしたら好いでせうねえ。」には阿父さんと阿母さんがその證書を以てこゝへ来るのでせう、併し華子は猶も語を續ぎ、「今も眞太郎聞うたとて返事の出来ぬ病人へ、何の甲斐が有るものぞ、眞太郎さんの言ふには、この方は眞に人間以さんに逢ひその事を相談しましたけれど、あの方も途方に暮れて、最うこの上は自分が父のやうに頼みとする巖窟島伯爵へ相談して見るばかりだと言ひました、巖窟島伯爵とは、それ先日私がお話し申したあの阿母さんと重吉とを救つて下さつた方ですよ、眞太郎さんの言ふには、この方は眞に人間以上とも言ふ程の力が有り、何事をでも自分の意のままに振替ることが出来、それにこの家の阿父さんからも尊敬を受けて居るから、何うか工風が有らうも知れぬと、このやうに言ふのです、若し伯爵の力に行かねば、その上は最後の非常手段に訴へるのだと言ひました、非常手段とは何事だか知りませんが、けれどあのやうに熱心な方ですから私は、自殺でもする氣では有るまいかとほんに悲しくなりました。

は、え、祖父さん、先日、私と毛脛安雄と婚禮の出来ぬやうに遮つて遣ると受合つて下さつたが、おゝ遮ると言つたとしてこのお身體で、何を成さる事も出来ず、祖父さん、祖父さん、今でも何か工風が有りませうか。」祖父「有るよ。」

「有るよ。」と口で言ふことは出来ぬ、目で言つた。抑もこの野々内彈正の目で言ふ言葉を聞取ることの出来るのは華子と、父の蛭峰と、永年彈正に仕へて居る一人の老僕との三人である、蛭峰夫人の如きは數年この部屋へは来るけれど、目の言葉に對しては聾同様である、少しも解することは出来ぬ、また解しようともせぬのだ。華子「では今直ぐ遮り止めて下さいますか、今で無くば婚禮證書へ署名させられた後では何とすることも出来ませんが。」彈正「然り。」華子「それでは直に阿父さんをこゝへ連れて来て戴きませうか。」祖父「然り。」

「然り」と言ふ時には、静かに兩の目を閉ちて安心の狀を示すのだ、「否」と言ふ時には忙し／＼瞬發するのだ、その外に右の目のみを閉ちると、左の目のみを閉ちると都合四個の符牒が有る、と言へたゞ四個だけの符牒で、何うして婚禮を推留めて破談にさせると言ふやうな込入つた掛引が出来るだらう、覺束なさの限りである、けれど華子は覺束ないとは思はぬか、聊か力を得た容子でこゝを立去り、直ちに父蛭峰を連れて来た。

蛭峰はいと嚴重な顔をして彈正の枕頭に座し、「何か華子の婚禮のことに付き、私へお話がありますか。」彈正「然り。」と答へて次に「否。」と答へた。蛭峰は半華子に向ひ、「それ『然り』と

「否」とを混同なざるほどだから、最うお心も確かで無い、何事もお耳に入れぬが好いだらう。」早父の干渉を跳退けて居る。彈正の眼は鋭く開き、殆ど叱り付けるやうに蛭峰の顔を射た、その意味は能く分つて居るけれど蛭峰は分らぬ風で、「あゝ、お可愛さうに、一日々々お心が混同すると見える。」何たる不孝な男だらう、華子は父に向ひ、「いえ、さうではありませんよ。『然り』と『否』と重ねて仰有るは、婚禮のことに話があり、婚禮で無いことに就いても話があるとお知らせです、今までも度々なさる符牒です、ね、祖父さん。」彈正「然り、然り。」蛭峰「さう澤山の話が一時に出るものか、強ひてすれば、御病氣に障るに極つて居る。」彈正は異様な眼で室の隅をちつと眺めた、華子はその意を察し、「あゝ室の隅に在る字引を持つて来るのですか。」と言ひ直に立つて、手輕な一冊の字引を持つて来た、さうして、ABCの頭字を順に指示すと、Nの字に到つて、「然り」と目を閉ぢた、Nの字で始まる言葉は千萬無量の數である、成程、それを一々に搜して居ては、逆も澤山の話は出来ぬけれど、華子は氣轉を利かせ、自分の口で母音の五字を徐々と繰返すと、Oの字に到つてまた眼の言葉が有つた、今度は更と字引のNOの部で順に一字づゝ指さして行くとDOLLYの語に及んで留つたこれは公證人と言ふ心なのだ。華子「では公證人を呼んで来るのですか。」彈正「然り」蛭峰は驚いた。「公證人とは遺言か何か作るで無くては用事の無い人ですが、貴方は遺言でも作りたいのですか。」彈正の眼「勿論然り。」全身不隨、口さへも利けぬ人が、遺言状を作るとは空前の奇觀である。

一四八 公證人

全身不隨とは言へ、野々内彈正は確に遺言状を作る資格が有る。何故ならばこの人は息子蛭峰の家に隠居して居るけれど、蛭峰の厄介に成つて居るのでは無く自分で獨立の財産を持つて居るのだ、死ぬる前に遺言状を作り、この財産の始末を附けて置くが當然である。

財産の高は如何ほどであるかは蛭峰も知らぬ、けれど少とや些とで無いことは分つて居る、昔は共和黨の幾部分が、殆どこの人の財産を運動費の重なる出所と仰いで居たことも有るのだから、通例世間で財産家と言ふは、居る財産よりは多いかも知れぬ、若しこの人が遺言状を作らずに死ぬる日には父と言ひ子と言ふ縁で、自然にその財産が蛭峰の物になるのだ、今が今まで蛭峰は内々當にして居た。

ところが今こゝで故々遺言を作りたいたとは、蛭峰より外の者へその財産を遺したいと言ふ意味に極つて居る、蛭峰は驚いて、加勢のために我が妻を呼びに行つた。

その後で華子は祖父彈正の眼に迫立てられ老僕を公證人の許へ迎へに出した引違ひて蛭峰は妻と共にこゝへ来た、妻は最と神妙に彈正の顔を窺き、優しい聲で、「阿父さん、阿父さん。」と日頃餘り用ひたことの無い親身の呼方を用ひ、「貴方が遺言を作ると仰有るなら華子を相続人になさるお積

りでせう、幾等華子が貴方の御介抱を引け受て居るとは言へ、少しは公平と言ふことを考へて下さいませ、華子は既に母御から遺された財産が、婚資に餘る程有つてその上に米良田の祖父さんも祖母さんも有りだけの財産を華子へ遺すことに極めて有ります。最う華子の身には多過ぎる程の遺産が附いて居ます、一切積れば百萬と言ふ高に成ります、その上にまた貴方の遺産を加へては必ず多過ぎて決して華子の幸福にはなりませんよ。」と自分の慾心を露出しにして最無遠慮に口説き立てた。「ねえ祖父さん、貴方は華子を相續人に成さるのでせう。」彈正の眼は、「否」さうでは無いとの意を示した。さうで無い、華子で無い、それなら誰だらう、蛭峰夫人は驚くと同時に喜んで、「お、祖父さん、華子で無くて私の子重吉を相續人にして下さるのですか、あ、それでは公證人をお呼び成さるも御無理では無い、いゝえさうですとも、華子とても重吉とても、同様に貴方の孫で、殊に重吉の方は男、後々財産次第で何れ程の出世も出来るかも知れません、それに彼は可愛さうに未だ誰からも遺産などは受けて居ません、貴方が彼を相續人にして下されば——」彈正の眼は先刻から引切無しに隣を睨み附けた、けれど夫人は中々めげぬ、「あゝ矢張り祖父さんは、最うお心まで衰へて、能く物事がお分り成さらぬのだ、御覽よ華子、あのやうに目を大きく成さるのは符牒には無いだらう、しか

りとか否とか言ふ符牒を間違へてあのやうにお睨み成さるのだらうよ。」隣れむ可き老父に對しかゝる言葉を加へるとは實に鬼のするやうな仕業だけれど、この夫人の後々の所業を見れば、これくらゐの鬼々しさは怪しむに足らぬのだ。

かゝるところへ老僕に迎へられて、近所の公證人が入つて来た、蛭峰は遠たゞしくこれに向ひ、「いや御苦勞では有りますが、御覽の通り遺言を作る可き本人が全身不隨で、聲を出すことも出来ず、無論自分の思ふところを正當に言現す手段が無いのですから、この有様をお見届けの上、一家の不幸を醸さぬやうに願ひます。」とは遺言を作る資格の無い癡疾の人と見做して立去り呉れとの謎であるけれど、この公證人は、来る路々で詳しく老僕から話を聞き、眼の言葉と華子嬢の通譯とで、如何なる問答も出来ることを知つて居る、そのみかば斯る空前の遺言状を自分か引受けて作つた上その顛末を法律雑誌にでも寄書すれば自分の盛名は頓に揚り、巴里第一の公證人に數へられることも出来る、一方ならぬ熱心を以てこゝへ来たゆゑ、容易に蛭峰の手に乗らぬ。「いや本人の容體などはお使の方から能く聞きました、兎も角も、何等かの手段を以て思想を現すことの出来る人なら、御存知の通り遺言状を作る権利が在つて、それを公證人たる者が無視することが出来ません。」勿論蛭峰は二十有幾年來自分が法律を取扱ふ職に居て、今は全國に一人の大檢事と言ふ地位まで占むるだけに、「御存じの通り。」と言はれても仕方が無い、「いゝえ知りません。」と言ふことは出来ぬ、公證人は猶も熱心に、「確か本人が眼で發する言葉を、いや合圖を、孫娘の方が正當に通譯することが

出来るやうに聞きましたから、私は第一にその眼の合圖が果して正當に當人の意志を現して居るかを試験し、第二に孫娘の通譯方が果して正當で有るかを見届け、その上で自分の職務を行ふ可きだと思ひます、勿論非常に責任の重い譯ですから、實は唯今道寄りして同業の一人を立合人に頼んで来ました。成程一人の同業者をまで立會はせてすることなら最はや遮る口實は無い、蛭峰はいと不興げに口を、噤むところへ、丁度一人の同業と言ふのがまた遣つて来た。

一四九 婚姻 政略

頓てこの二人の公證人は、華子に向ひ、野々内彈正が何のやうな方法にて話するかを問うた、華子の返辭は、公證人の來る道で老僕から聞いたところ、と同じことである、少しも疑ふところ無いけれど念のため直々彈正の顔の前に行き、「貴方は『然り』と言ふ意を現すには眼をお閉ぢになりませんか。」彈正「然り。」公證人「否と言ふ時には何うなされますか。」彈正は斯くすると「如くに目を瞬いた、果してこの符牒が間違ひ無しに行はれるで有らうか、公證人は試みに猶ほ二三のことを問うて見たが、少しも間違ふところは無い。「貴方は遺言を作りたいと思ひですか。」彈正「然り。」公證人「それを作るに就いて、貴方の意志の通譯人に華子嬢を用ひて差支ないと思ひますか。」彈正「然り。」

最早や躊躇するところは無い、公證人は更に蛭峰に向ひ、「このやうな次第ならば吾々は職務として、この當人の依頼に應ぜねば成りません。」言ひ渡した。蛭峰も最早や仕方が無い、不勝無性に屈してしまつた。これより愈々華子の通譯で、遺言に書入れ可き彈正の望みを問糺した、勿論容易には運ばなんだ、或は先刻華子の用ひた方法の通り字引を用ひたり、數字「一」より「零」まで記して置いて、一々指示して財産の高を問うたり、一通りの手數では無かつたが、併し驚く可きである。この無口無聲の病者が、終に自分の希望だけを可成精密に公證人へ知らせることが出来た。

その結果を摘んで言へば、彈正の財産は株券で九十萬圓ある、さうして、四朱の保證利子が附いてゐる、全體なら華子へ譲る可きだけけれど、華子の婚禮が不承知ゆゑ譲ることは出来ぬ、若しこの縁談を破り、更に華子の氣に入つた所天を持たせたならば更めて相續人に定むるか、さう無きに於いてはこの九十萬圓は共和黨の俱樂部へ寄附すると言ふのである、兎に角も彈正はこの遺言を以つて華子への約束を守つたのだ、華子と毛脛安雄との婚禮を妨げようと勤めたのだ、流石は昔共和黨の首領とも言はれた剛のもの、所爲である、併し果してこの遺言の旨意が、彼の縁談を破るまでに蛭峰の心を動かさし得るであらうか。

これを聞終つた時の蛭峰の立腹は一通りで無かつた、それも無理は無い、この一家一族に在る九十萬圓の大身代が唯この一舉で方無しに成つてしまふのだから、彼は叫んだ、「私は争ひます、争ひます、若しこの財産を貧民院に寄附するとも言ふならば、眞逆に貧民の幸福を奪ふには忍びません

から喜んで服しも致しますけれど共和黨の資本に成ると有つては争はずに居られませんか。「中々旨い口實を用ひる、成程、これも流石である、大検事を勤むるの口である、誰も一言の批評を加へることが出来ぬ、唯一人先刻公證人を迎へに行つた彼の老僕が、一同の静まり返つた仲に嘲つた。「争ふとて争ふ道はありません、蓮様と毛脛安雄さんとやらの縁談を取消しさへせばそれで好いのだ、安雄と言ふのは、昔彈正様の敵で有つて誰かに殺されたとか、河へ溺れて死んだとか言ふ毛脛將軍の息子だから、彈正様はこの縁談をお喜び成さらぬは尤もだ。」

如何にもこの言葉の通りである、この縁談を破りさへせば九十萬は矢張りこの一家一族より外へ出ぬのだ、蛭峰夫人は所天を諫めた。「この縁談を取消さうでは有りませんか、何も九十萬圓を捨て、まで、安雄さんを婿夫にせねば成らぬ筈は無いです有ませんか。」この夫人の心では、兎に角もこの九十萬圓を保存して置けば遅かれ早かれ自分の息子重吉のものに成るのだと見込んで居る、併し蛭峰は中々應じうさな氣色は無い。

彼の本來の性質から考へて見れば、九十萬圓を取留めるためには一も二も無くこの縁談を取消しさうに思はれるけれど、實はこの縁談は九十萬圓にも代へられぬ意味があるのだ、それを何故かと言へば、世に能く例の有る婚姻政略と言ふもので、自分の一家へ大なる光を添へたいのだ、毛脛の家は代々國王黨で、殊に安雄の父が共和黨に殺されたがため朝廷では毛脛將軍を眞に勤王隨一の人で有つたかの如く見做して居る、これに反して蛭峰は自分一代の俄への勤王黨で有るがため、縦し朝廷

の信任が深いやうでも動ともすれば物足らぬ所がある、殊に自分と出世を競ふ同僚者などからは、機さへれば蛭峰は共和黨の家筋だなど風聴せられる、若しも今自分の家が婚禮で以て勤王隨一の家柄と結び附けば、自分は大事事たるのみか大宰相にも成れるのだ。今までとても既にその心があつて米良田家の令嬢禮子を我が妻にしたけれど禮子は華子を生落したばかりでこの世に無い人と爲つた。若しもその後更に何等かの手段を以て他の勤王の家柄に結び付き、朝廷に於ける自分の名譽と勢力とを揚げて置いたなら、今既に、いや幾年前に、大宰相に成つて居るところなのだ、斯様な深い仔細が有るため、中々九十萬圓のためにもこの縁談を取消すことは出来ぬ、彼は斷乎として言ひ切つた。「何のやうな事情がありとても安雄と華子は夫婦です。」と、さうして席を蹴つて立去つた妻も續いて去つたが恰度この時その家の客間には巖窟島伯爵が來て居た。

それは扱て置き後に華子は絶望して、「何うしませう祖父さん、貴方が折角心を盡して下さつても水の泡です。」と泣いた、彈正の眼は「否、否。」と瞬きした。華子「おや否と有仰れば、猶だこの外に工風はおありですか。」彈正「然り。」華子「その工風は確に功能がありませうか。」彈正「然り、然り。」年は既に八十に達し、身は不隨の病に罹りながら、猶ほ自分の息子蛭峰の如き豪者と健闘するとは、この人の名が歴史の上に今以て輝いて居るのも偶然で無い、併したゞその工風と言ふのが何のやうな工夫だらう、果して、その「然り」と言ふ通り「確に功能が有る」だらうか、また見るものゝ一つと言ふ可きだ。

一五〇 運の神、福の神

これより二時間の後、二人の公證人は野々内彈正の遺言状を正式に作り終つて、この家より辭し去つた。

それは扱て置き彈正の所爲を怒つて、憤々として自分の居間に引上げた蛭峰は、續いて入來る我が妻より客間の巖窟島伯爵が待つて居ると聞き、苦い顔をして漸く怒りを押鎮め、妻と共に客間に出た、けれども夫婦とも腹の中は彈正の遺言状に對する無念が滿ちて居るため、自ら言葉かその方へ反れた、最初に口を開いたのは妻の方で、その言葉は、「伯爵、まあお聞き下さい、人の家には思はぬ不幸の有る者では有りませんか、私共では今日一日に九十萬圓の財産を損失致しましたよ。」と言ふので有つた、伯爵はこのやうなことを聞きに來たのでは無く、明夜の晩餐會に蛭峰を缺席させぬために、言はゞ約束へ釘を打ちに來たのだけれど、何しろこの家の内事を聞くことは何よりも有難いところである、實は内事を聞くために兼て探りの人を入込ませて有る程の次第である、今はそれが、直接に夫婦の口から自分の耳へ聞き取ることが出来るのだから、逸すべからざる好機會と言ふものだ。「おや、九十萬圓、それはまた大變な御損失です、通常の身代なら一時に消滅もする程でせうに。」囁る言葉に夫人は勢ひを得て喋々と遺言状の一條を語り出で、最後に及びて、「けれど蛭峰もあまり

頑固では有りませんか、それでも自分の言條を通し、何うしても華子を毛脛安雄の妻にすると言ひ切りました。今時にこのやうな人が有りませうか、九十萬圓の損をして自分の言葉を守ると言ふやうな——」伯爵はこゝぞと思ひ只管歎服の色を示して、「いや言葉を守ると言ふことは人間の最上の美德です、毛脛氏へ娘を遣ると約束したから、九十萬圓の損失を忍んでもその約束を守るのは如何にも蛭峰さんの本領でせう、この本領がお有り成さればこそ大檢事と言ふ重い職責が盡されるのです、全く佛蘭西の司法權が獨立の美名を保ち能くその威信を繋いで居るのもこのやうな方が有るためです。」蛭峰はこの褒め言葉に初めて顔を柔げ、「いや自慢では有りませんが、生れて曾て言葉を喰んだことの無いのは私でせう。」嘘ばかり言つて居る。伯爵「おゝそれでは最う、明夜の晩餐會のお約束も私から念を押すは却つて無禮に當りますね、實は今日そのために參つたのですけれど。」と巧に利きどころを見て釘を打つた、蛭峰「無論です、一旦お約束を申した上は、何事を捨置いても出席します、したが矢張エリシー街のお邸ですね。」夫人は傍より、「あれ貴方、田舎の別莊に於てと言ふことが昨日の招待状に在つたでは有りませんか。」言葉を重ねると言ふ人が、場所を忘れて居たと有つては聊か極りが悪い、忙がしさに紛れ能くは讀まなんだで有らう。蛭峰「おゝさうさう、田舎の御別莊、それならば猶ほ結構です、この頃は煩はしい俗務ばかりで、一夕何處か静かなところで、清い談話に耳を洗ひたいと思つて居ました、確か御別莊は——」伯爵「はい別莊はオーチウルです、さうして時刻は六時から。」オーチウルと聞いて、極めて微だけれど何だか蛭峰の顔に雲が懸るか

思はれるやうに見えた、蛭峰「オチウルの——」伯爵「吹上小路です。」蛭峰「え、吹上小路。」果して彼の眉間は蹙んだ。伯爵「はい、吹上小路二十八番邸。」蛭峰「え、二十八番邸。」と、驚かぬやうに見せて、驚き叫んだ、この時の蛭峰の顔は實に何とも譬へやうが無い、本統に陽へ釘でも打たれるかと思はれるばかりで有つた、併し悶えたとして既に晩い、夫人はその仔細を知らぬから、「それ先日、私と重吉とが馬車で伯爵に救はれたところですよ。」蛭峰は前額に脂汗を垂らして居る、伯爵「いや、お出下さると分つて安心しました。」蛭峰「行きますよ、はい行きますよ。」血を吐く想ひとはこのことだらう。

凡そ三十分ほど経て後に伯爵はこゝを出て、門に待たせて有る馬車に乗つたが、腹の中は可笑さに堪へぬと見え、動ともすればその顔が頬の邊から頰れさうに見えた、併し頓て氣を取直した容子で、「お、蛭峰が九十萬圓の損をしたとは、此方の思ひ設けぬところだ、猶だ今日は時間が有るから段倉にも少しばかり損をさせて遣らうか、彼は先日來西班牙の公債を煽り立て六百萬圓ほど買占めて居ると言ふから、二割方相場を下げた遣れば百萬圓以上の損だ、何うせ彼の身代は元も子も無いまでに仕て遣るから今急ぐにも及ばぬけれど少しづつ番狂はせを喰はせるも面白い。」と呟いた、さうして衣袋から財布を取り出しその中を調べて、「あゝ電信技師に若しこれだけの金が有れば二エーケルや三エーケルの田地を買ひ、その上、郵便貯金をして利子で生涯を安樂に暮らすことが出来るから、さうだ何のやうな技師でも免職されるを厭はぬ、必ず買収に應ずるだらう。」斯う言つて、更に馬車を何

處へか知らぬけれど急がせた。

多分はその結果だらうこの日の暮れる前に相場市場恐慌の波が立つて、西班牙公債は叩き落すほど下落した、買方の大將と言ふ段倉男爵は血眼になつて買煽つた。夜七時頃に段倉の邸へ馳せ着けたは例の内閣官房長出部嶺である、彼は段倉夫人に逢つて遠しく、「直に貴方は男爵に西班牙公債を賣飛ばさせねばいけません、明朝になれば反古同様な價に下落します。」夫人は色を失つて、「そのやうな電報が。」出部嶺「はい、生憎私より先き宰相の手に渡つたものですから、宰相が日頃の相場好きで直に市場の手下の者へ洩らしました、私今その讀粕を見て飛んで來ましたが今度こそ幾度買煽つても追附きません、今夜の八時までに賣飛ばさねば、その中に新聞紙が號外を出しますよ。」果して八時までに段倉が買集めて居た凡そ八百萬からの公債を、二割餘の損で唯一聲に賣飛ばした。間も無く、新聞紙の號外が町々に呼立てられた。「西班牙王の逃亡、バーセロナ町には大いなる一揆軍起る」と、これを讀んだ第二流の相場師は孰れも段倉の機敏に驚き、「このやうなことが新聞よりも先に分り、買方が咄嗟の間に賣つて廻つて、繰の損失で逃れるのだもの、何うせ我々は叶ふ筈が無い。」と孰れも殆ど舌を卷いた、段倉自身は凡そ二百萬圓の損失に不機嫌で有つたけれど大難を小難で逃れたとて妻に謝して、「我が運の神よ福の神よ。」とて只管に褒めそやしたが、翌朝になつて見るとこの運の神が大なる不運不幸な神で有つた、新聞紙は澄したもので、「昨夜の號外はその筋の電信の誤譯に出でたり。」と一行で取消して、世に言ふお茶を濁すために政府の事務の疎漏なのを

攻撃して有る。西班牙公債の相場は元の値よりも更に二割方上に登つた、定めし伯爵は手を拍つて笑つただらう。

これだけが土曜日の晩餐會の前に在つたことなども概略である。

一五一 愈々土曜日

愈々土曜日の夕、晩餐會の時が来た、場所は様々の因縁の有る吹上小路二十八番邸、嗚呼この會を眞に巖冠島伯爵の大仕事の序開きとすれば、何のやうに始まつて何のやうに終るだらう。

昔ドアンチン公爵は國王路易十四世の目障りになると言ふために一夜の中に大木の林を切平げ芝生の庭に造り替へてしまつたとの話がある、古來土木の工事でこれほど早く行つた仕事は無い、併し伯爵はこの二十八番邸に手入を加へた早さも殆どそれに匹敵する、門口から玄關から庭木から室々の造作まで唯三日ばかりの間に悉く取替へて誰が見ても今までの二十八番邸とは認め得ぬ程にした、書齋も出來た、發裁室も出來た、球突場も出來た、凡そ贅澤な紳士の別荘として、一點の非難も加へるところが無い、併し唯二箇所だけ少しも手を付けぬところがある、それは昔H・M男爵夫人と言ふ素性の知れぬ未亡人が寢間として居た一室から裏庭へ降りる階段までの總體と、蛭峰の手で私生兒を埋めたと言ふ裏庭のその部分とである、いや實はこの二箇所へも手を附けた、着けたけれども少しも變更を加へぬのだ、昔緋の戸帷の掛つて居るところへ、その通りの日の戸帷を掛け、昔芝生の茂つて居たところへその通りの芝草を植ゑるなど、若し昔この寢間とこの庭とを知つて居た人が今このところへ来たならば、その頃のことを思ひ出すには居られぬやうに拵へたのだ。

序に記して置くが、これ等の仕事一切を任せられて監督したのは家扶の春田路良助である、彼は伯爵から渡された明細の差圖書を以て三日前にこゝへ来た、それだからその前々日に侯爵皮春博人と小侯爵皮春永太郎とがエリシー街の伯爵の本邸で父子の對面を遂げた時も、彼は伯爵の許に居んだ、今以て彼の父子のことを知らぬ、のみならず顔さへも見たことは無いのだ、それからこの別邸へ來て以來、伯爵の差圖書と首つ引をするやうにして綿密に監督し、到頭豫定の時間通りに豫定の仕事を仕上げてその晩餐他に就ての一切の準備も調へ了つて、さうして伯爵のおいでを待つて居た。

午後の五時半に伯爵はこゝへ來た、さうして彼を従へて一切の設備を見廻つた、實に彼が伯爵に對する犬が飼主に對するよりも猶ほ忠順である、伯爵の見廻る間、若しやこゝが悪いとか彼所が不可とか小言を言はれはせぬかと眞に戦々競々の状態であつた、頓つ總體を見終つて伯爵が、「あゝ能く出來た。」と下した一語に彼は初めて重荷を取卸されたやうに、ほつと安心の息を吐いた。

六時近くなると、玄關に荒々しい馬の蹶音が聞えた、伯爵が直ぐに出迎へて見ると來客の一人森江大尉である、大尉は打解けた言葉で、「伯爵、先日、貴方に戴いたこの馬は天下の逸物ですよ、今來る道で、一時間に六哩も走ると言ふ段倉男爵夫妻の馬車を追抜き、續いて官房長出部嶺の馬をも抜き

ました、出部嶺は總理大臣が急使に用ふると言ふ名馬を借りてみますけれどこの馬のやうな軽足は出ないのです。」と満面に嬉しさを湛へて居る、抑もこの馬に就ても一場の奇談がある、餘計ながらこれれも序ゆゑこゝに記して置くが、この時より一週間ほど前に催された競馬俱樂部秋季競走に誰の持馬とも知れぬ馬が出た。番組には「鬼小僧」と言ふ名が附いて居たけれど、何處の牧場で産し、何のやうな快速力を持つて居るか、巴里中の博勞にさへ一人も知る者が無い、見物は勿論審判者までも怪しんで居る中、愈々出場と爲ると、十六七の男裝した女では無いかと疑はれる華奢な騎手がこれに乗り、名高い駿馬のみの一列を追抜いて、金牌を初めとし、當日第一等の名譽ある大賞品を占斷した、満場の驚きは言ふまでも無かつたが、見物の中に一人、最も尊敬せられる某貴婦人が居て、深く鼻眞の心を起され特に「鬼小僧の騎手に逢いたい」と所望された、けれど騎手は馬と共に播消すが如く姿を隠し、更に尋ねる由も無かつた、ところがその夜、その貴婦人が邸へ歸られて見ると、彼の馬の得た金牌が呈上品としてその許に届いて居た、實に合點の行かぬさうして面白い事柄なので、その後この話が上流社會の一佳話として口から口に傳はつた、けれど翌日になると大抵の人がこの事は目下名高い巖窟島伯爵の好誼だらうと言嘯すことになつた、伯爵で無くて誰がこのやうな名馬を持ち得た賞牌を惜氣も無く人に與へなどするものか、殊に一人、確に伯爵の仕業と見破り得た者がある、それは外でも無い彼の野西武之助なんだ、彼は初めて鬼小僧の名を聞いた時、忽ち羅馬の山賊を思ひ起し伯爵の馬と氣付き、さうして更に華奢の乗手の顔を見てその身が戒食節の終後の夜に美人と思つて馬車に同乗し、胸の邊りへ短銃を差附けられたその少年であることを知つたのだ、この一條の事件のためにも伯爵の名が高く爲つたのは勿論であるが更に本當のことを言へばこの武之助の推量さへも未だ事實を悉して居ぬ實は巖窟島伯爵は自分の大仕事の運動のために駿足の馬を幾頭も要するので、鬼小僧へ馬の周旋を命じて有る、即ちこの馬も彼が伯爵へ遣ひ物として寄越したのが、恰度競馬の前日にこの巴里へ着いたため、彼は幸ひに駿足なことを事實の上に證明して伯爵の目にとまらせやうと思ひ假に「鬼小僧」と名をつけて競馬には出したのだ、伯爵自身はその時まで知らなんだのだ、併しこのやうにして得たものを喜んで我が物としては鬼小僧の出過ぎた振舞を獎勵するやうにも當るから、金牌はこの馬の勝利を喜ばれた貴婦人に贈り、馬は兼て駿足の得難いことを嘆じて居る森江に大尉遣つてしまつた。

一五二 掌中から何か紙切

森江は答へた。「はい、蛭峰氏には遭ひませんでした。」肝腎のこの會へ蛭峰が来なくば大變である」と巖窟島伯爵は氣遣うた、併し能く思へば昨日あの通り釘を打つて置いたのだから來ぬ筈は決して無

森江「併し伯爵、猶だ約束の時間より五分ほど早いではありませんか、刻限に借と来ますよ、たゞ私だけは馬の駿足を試したくもあり、且つまた誰も来ぬ間に貴方へお話し申したいことがあつてそれでこの通り急いで来たのです。」伯爵「え、私へ話したいとは。」森江「なに、私の妹とあの夫江馬仁吉が、毎日のやうに貴方のことばかり言ひ暮してゐますから、何うかこの後ともお暇のある毎に必ず尋ねてお遣り下さるやうに願ひたいのです。」これ伯爵に取つては願うたり叶うたりと言ふものである、伯爵は江馬仁吉夫婦の家をこの世に唯一つの清浄な家庭と爲し今まで折さへあれば尋ねて居るが上に、猶この後もさう仕たいのである、伯爵の顔には嬉しげな笑が見えた。「そのことなら私の方で望むところだとお傳へ下さい。」

言葉の纒に終るところへまた二頭の馬車が着いた、これは出部嶺と砂出伯とである、二人が馬より下るが否やまた着いたのは段倉夫婦の馬車である、これには伯爵が一旦買取つて直に返した彼の色の馬が二頭が附いて居る、この馬が止まると見るが否や出部嶺は直にその窓に近づき手を出して段倉夫人をこれに縋らせた、夫人は縋りつゝ誰にも知らさず自分の掌中から何か紙切のやうなものを出部嶺の手に握らせたその技の早いことは全く誰の目にも留らなんだがたゞ巖窟島伯爵はの炯眼のみは見て取られた。伯爵は、竊に點首した。「あの早いところを見ると二人の間に永く仕慣れて居ることと見える、現在夫の目の前で仇し男と平氣で密書の遺取するとは、さうだ、このやうな不義の樂しみが持つて生れた彼の夫人の癖かも知れぬ。」夫人に續いて段倉男爵も馬車から出た、彼の顔色は毎も赤味ばしつて活々としてゐるのに今日に限つて殆ど土のやうである、その仔細は問ふに及ばぬ、昨夜から今日へ掛けて、運の神、將た福の神たる自分の妻のために株式市場で二百萬圓からの損を蒙らされたためである、實際の損は二百萬圓でも、彼の西班牙公債を賣らずに居たなら確に二百萬圓儲かるところであつたのだから、その取逃した儲けを加へると四百萬圓の損である、何れほど豪い相場師でも一朝に四百萬圓の損は顔色に現さぬ譯には行かぬ、況して段倉の如き既に充分の地位が出来て、公債と言ふやうな手堅い物の買占にのみ着手し最早や相場師と言はれぬほどに手を締めて確實に遣つて居る者の身に取つては、殆ど回腹の道の無い大打撃である。

伯爵は、氣味能く思ふ心を隠して、を迎へた。さうしてこれよりこの人々に、發裁室から美術室などを示したが、全く伯爵の富の度には誰も驚かぬことは出来ぬ、壁に掛けた一枚の畫と雖も、床に飾つた一塊の置物と雖も、皆それれく有名な來歴が有つて、或は朝廷が所望したけれど持主が手放さなんだとか、或は餘り高價のために博物館が買入れ得なんだと言ふ如き品のみである。一應これ等を見終つて、客室へ歸つた時、取次の聲として、「皮春侯爵及び皮春小侯爵がお見え成りました。」と、聞え、聲と共に金色燦然たる勳章四五箇を胸に飾つた、剛ない老軍人と紅顔の一美少年とが入つて来た。

伊太利の古い貴族名鑑を見た人ならんには皮春と言ふ一族が何れ程に舊家であるかは無論知つて居る、一同はこの名を聞いただけで早多少尊敬の念を生じた、中には段倉は伯爵に向ひ、「皮春とは

伊太利の皇族から出た家柄だと言ひますが財産は何うですわね。」と問うた、伯爵は聊か嘲るやうに、「伊太利の貴族には貧乏が附物では有りませんが、歳人は纔に五十萬圓ですもの。」歳入五十萬圓の貧乏とは驚く可しだ、大金満家と自信して居る段倉自身よりも富んで居る、段倉は胸に思つた。「ふむ、この伯爵が、斯う嘲るやうに言ふところを見ると、必ず財産に於いてこの伯爵と雄を争ふほどの敵なんだな。」とさうしてまた問うた。「何のためにこの巴里へ来たのでせう。」伯爵「生意氣に金を使ひに来たなど、言つて居ます、なあに親代々の儉約家ですもの、使ふと言つたとて、幾等使ひますものか、併し彼の財産上のは私より貴方が能く知つて居ませう、一昨夜私が逢つた時、段倉銀行を指定されて居るが、確實だらうかなど、聞きました、それから私は今夜貴方のために彼を招いたのです。」傍に居た段倉夫人は浮氣な性分の常と見え、「あの小侯爵と言ふ方は大層美しい方ですわね。」伯爵「はい、彼はこの國の學校で先日まで修業して居たのですから爺より幾等か金を使ふ道も知つて居ませう。何でも巴里で妻を捜すのださうです。」段倉夫人「あれ先あ、小侯爵より餘つほど男が好くは有りませんか。」小侯爵とは自分の娘夕蟬の婿として見立てゝある野西武之助のことである。早や武之助よりこの永太郎に乗替へたい心を起したのかも知れぬ、伯爵は腹の中で満足に堪へぬ「兎に角も小侯爵の肩書だけで、諸所の令嬢達に目を付けられませうから、一月と経たぬうちに令夫人の候補者が一ダース位は出来ませう。」と煽り立てるやうに言つた。この時またも取次の聲が聞えた。「蛭峰氏及び令夫人がお見えになりました。」

一五三 荊の路、針の蓆

全く蛭峰とその妻の馬車が着いた、客一同は玄關の方を見た、この時その馬車より出る蛭峰の顔は先刻段倉の青かつたよりも更に青い、殆ど幽霊のやうに見える、あゝ彼は二十年目に我が舊惡の地を踏むのである、人に疑はれないと思ふだけ益々心が萎縮けるのだらう。

巖窟島伯爵は、この状を見て思つた。「このやうなところになると、男より女の方が餘つほど圖々しい、女は未だ顔色さへも變んぜずに甘く瞞かして居る」女とは誰を言ふのか、讀者には略見當が附いて居やう、兎も角もこれで客の數が揃つた、段倉夫婦、蛭峰夫婦、皮春侯爵父子、砂田、出部嶺、森江これに主人伯爵を合せて十人の晚餐會である、何しろ伯爵の催しだから定めし馳走の獻立もまた非凡だらうと、一同は竊に食堂の開くを待ちつゝ思ひひくに、或は窓より庭を窺き、或は打群れて雑談などする間に、伯爵は一寸次の室に退き家扶春田路を呼び寄せた、さうして彼に向ひ、何氣も無き小聲で、「食堂の用意は好いのか。」春日路「はい、お客の數はお揃ひに成つたでせうか。」伯爵「揃つたか揃はぬか自分で數えて見よ、己を疎いて九人だと言つて置いたぢや無いか。」言葉に應じて春日路はそつと座敷を窺いたが、忽ち顔の色を變へて、「あ、あの夫人、あの夫人。」と打驚いて身を退いた、伯爵「何だ、あの夫人とは。何をそのやうに驚くのだ。」春日路は猶も驚きの靜まらぬ聲で、「あ



の大層華美に着飾つて、柱の傍に立つて居るあの若作りの夫人です、あれが昔この家に居た妊娠の未亡人です、私がこの家の庭から掘出して育てたと先日お話し申しました辨太郎の母親です。」と、段倉の妻を指さした、けれど伯爵は驚かぬ、充分さうと知つた上にたゞ念のため春田路に見させたのだ。「餘計なことを言はずに先づ一々數へて見よ。」春田路は再び首を出して再び驚かされた。「おや、蛭峰も彼處に居ます。」と言ひまた更めて見直した上、「彼は確に私の短剣に仆れましたのに、その後で蘇生したのでせうか。」伯爵「春田路、ユルシカ人の復讐は、肋骨の六枚目と七枚目の間を刺すに極つて居るのに、その方は手練の足らぬため外のところを刺したのだらう、それだから彼が牛返つたのだ、それともその方が刺したと思つたのは、或は疲れ寢の夢で有つたのかも知れぬ、さあ、早く數えぬか。」

春田路は三度首を出して數えたが、最後の九人目に到り、今度は殆ど尻餅を搗かぬだかりに飛び退つた。「人間業では有りません、天運です、天運です。」伯爵「その方は何を言ふのか。」春田路「辨、辨太郎が彼處に居ます。」伯爵「小侯爵皮春永太郎君を辨太郎など、無禮なことを言ふな、客數が満ちて居れば、早く食堂を開くやうに差圖せよ。」

二十年前の同じ家に、同じ密夫と同じ密婦、而もこの間に出来たる同じ私生兒の辨太郎までこゝに揃ふとは春田路の目に天運の循環と見えるのも無理は無い、けれど彼は伯爵に對して犬よりも柔順である、食堂を開けと言ふ嚴かな命令に返す言葉も無く縮み込みそのまゝ引下つた、後に伯爵は再び客の間に出了たが、これより五分間ばかりを経るとまたも春田路が闕のところへ現れた、彼は必死の想ひで自分の心を制して居ると見え、確では有るけれど少しも餘韻の無い聲で、「食堂が開けました。」と報じて去つた。伯爵はその躬親ら直ちに蛭峰夫人の手を引き、「さあ皆様、食堂へ参りませう。」といひ特に蛭峰に向つては、「さあ蛭峰さん、貴方が段倉夫人の手を引いてお上げ成さい。」蛭峰は身震ひしたけれど、無言でその言葉に従つた。あゝ當年のH・N夫人、同じ密夫のその人に手を引かれて食堂に歩み入るとは、引く人、引る人、共に何のやうな想ひがするだらう、荆の道、針の席とは、このやうなもので有るまいか。

一五四 食堂

食堂に入りても矢張り蛭峰と段倉夫人とを並べて据らせ、さうして巖窟島伯爵は絶えず二人の顔色を讀むことの出来るやうに、その前に座を占めた。

勿論食堂の贅澤は言ふに及ばぬ、何一つ來客を驚かさぬは無いほどであつた、その中で一例を記せば、獻立の中に露國のオルガと伊太利のフサロ湖より外では得られぬ魚があつた、露國の方には世界の食物通を以て自任する砂田伯が看破し伊太利の方には皮春侯爵が心付き、何うしてそのやうな遠國から取寄せたかと客一同の大疑問とは成つたが伯爵は直に給仕長を呼び、二つの大樽を客の前に擔ぎ

出させた樽の中には猶だ雙方の魚が雙方の湖水の特種なる藻と共に活々として泳いでゐる、伯爵は説明した。「一個の樽に八人の人夫が係ります、露國の方からは十二晝夜、伊太利の方からは四晝夜、二時間毎に人夫を取替へ晝夜の別無く急がせて取寄せました、幾等この魚が強くて樽の水では二週間以上生きて居ることは出来ません。」客一同は返事が出なうだ、たゞ九人の客のためにさうまで手を盡す贅澤は歴史の上にも曾て無い、更に伯爵が、「なにこれは皆様のために故々取寄せた譯では無く、常に私は自分の膳に上る品を世界の各地から取寄せて居るのです。」と言譯するに及んで食物道樂の砂田伯は垂涎萬丈と言ふ景狀で、「そればかりは羨ましい。」と嘆じた。

必然の結果として話は伯爵の贅澤を褒立てる一點に集まつた。「いや若しも伯爵の命令がその下僕に行はれるやうに裁判所の命令が快速に行はれたならば、私は世の中に罪人と云ふものの一人も無いことにしてお目に掛けますけれど。」と言つたのは蛭峰である。「このお屋敷の工事などもドアンチン公爵以來の早さでせう、何でも三日か四日の間に修繕を成さつたと思はれます。」これは出部嶺の口から出た。砂田伯「何から何まで嘆服の外は無い、實は私もこの家を、數年前に持主の米良田伯が賣物に出したと聞いた時、買ふ積りで見に來ましたが、餘り荒れて居て化物でも出るか或は古い犯罪でも潜んで居るか疑はれるほどでしたから匆々立去りました。」偶然にも舊い犯罪との語が出たので蛭峰の顔は異様に曇つた。

「おや、この邸の持主は米良田伯でありましたか。」と問うたのは森江大尉である、米良田伯ならば自分と思ひ思はれて居る蛭峰華子嬢の母方の祖父に當ると知つて居るから何と無く聞いて見たいと見える。伯爵「いや一切家扶の者が買取りの手續きを済したので、私は誰か持主だか今までも知りませんでしたが、扱ては米良田伯でしたか。」と蛭峰に向つて問うた、蛭峰は詮方無く、「はい、實は米良田伯が私の娘華子の婚資の一部分に充てようとして私へ托してありましたが、私も更に公證人へ托して置きましたから、誰か買取つたのか知りませんでした、併し華子の婚禮も愈々近く成りましたので、私は買手の有つたのを喜んで居たのです。」今度は森江大尉が顔色を變へた。華子の婚禮が近づいたとの一語に、全く口さへ開けぬことになつた。

砂田伯は猶も犯罪論を繰返して、「確に私は幽霊の出る家だらうと思ひました、若し大檢事の岳父の持家で無かつたならば誰とてもこの家に犯罪の有つたのを疑ひますまい、それを何うも、斯うまで陽氣な家を作り替へてしまふとは益々伯爵の手腕が分るでは有りませんか、ねえ、蛭峰君。」犯罪論は全く伯爵の手際を引立たせるための下染であつた、蛭峰は返事は出ぬ、彼の夫人がこれに答へて、「さうですとも、伯爵のお手が障れば犯罪の場所でも幽霊の家でも直に極樂園のやうになります。」話の中に晚餐も終り、更に席を他へ移す可き時とは成つた。伯爵は今の話の口緒を把らへて、「いや私も買取つてから初めて見た時は、犯罪だか幽霊だか孰れにしても深い因縁の籠つて居る家だらうと言ふやうな氣が致しました、その中にも一個、貴婦人の寢室にでも用ひたかと思はれる室がありますね、緋の帳が垂れて居まして、何と凄く無いやうな感じを起させます、餘り不思議ですか

ら私は、他の人もその室を見れば同じ感じがするだらうかと思ひ、元のまゝにして手を着けずに置いてありますが、今夜は皆様にその室を見て頂きませう。」と言ひ更に蛭峰に向ひ、「貴方はこの家を托されて居たとしても御自分で見たことはありますまい、犯罪には始終直接なざる御職業ゆゑ、その室を見たとても吾々のやうに、異様に神経を騒がせるやうなことはありませんまいけれど、先づ一緒に御覽下さい、いや段倉夫人も共々に、さあ皆さん行きませう。」一同は伯爵の後に随つて座を立つた、たゞ蛭峰と段倉夫人は宛もその席に釘付けにせられた状態である、異様に恐れを帯びた眼で互に問ふ如く顔と顔とを見合せた。

一五五 罪の深い或る品物

顔見合せた段倉夫人と蛭峰との心持は何のやうだらう。眞逆に伯爵は自分の舊悪を知つて故と自分をその舊悪の室へ連れて行くとは思はれぬけれど、家中の室を悉く見違へるほどに作り直しながら、たゞその舊悪の室のみ殊更に昔のまゝに存してあるとは、偶然にしては餘り異様だ、夫人の方は終に細語いた、「餘り妙ではありませんか。」實に妙だ、併し蛭峰の方は氣が確だ、「恐れる状態を示して疑ひを招くは愚の至りです。何事がありますものか、さあ行きませう。」とて大膽に夫人の手をとり、この室を出た。

室の外にはなほ伯爵が待つて居て、恭々しくこの二人を遣過して後に立つた、伯爵の顔には笑が浮んで居る。この笑を二人はたゞ伯爵の愛嬌としか思はなんだが、若しも愛嬌の外になほ意味のあることを看破し得たなら、二人とも身震ひするところだつたかも知れぬ、雖て一同は彼の室へ集つたが、たゞ段倉男爵だけは彼の皮春侯爵を連れて喫煙室に入った。その仔細は彼れ早やこの侯爵を驚くべき金満家と見て、特別の懇意を結び資本を引出さうといふ目算なのだ。その説くところは侯爵の領地だらうと思はれる伊太利のフロレンスからレグホン港へまで鐵道を敷く計畫である。「この鐵道を布けば株だけでも餘程儲かります。」といふのが彼の聲で、「私は金を儲けることは面倒で嫌ひです。」と答へるのが侯爵の聲だ、侯爵は伯爵の差圖を能く呑み込んで中々旨く掛引して居る。言葉も行ひも最早や金といふことの必要を感じぬ程の大金持ちらしい。段倉は益々勉めるばかりだ。

此方の室では客一同が、「成程、陰氣な室ですなえ。」とか、「室總體に何だか歴史的の趣味があります。」とか、甘く伯爵に合榘を打つて居るが、たゞ蛭峰と段倉夫人のみは無言である。無言も道理や餘りの事で聲が出ぬのだ。室の中にたゞ茫乎と一個の燈火が點つて居る。これが昔、蛭峰とH・N夫人の姿を照した蘭燈である。置かれた場所までも同じことだ、さうして壁には、何の飾氣もないが二個の繪額が掛つて居る。これも昔のをその儘だ。伯爵はこの額を指して、「この室の中で何のやうな事があつたか、それを見て居たのはこの額の中の人物のみでせう。御覽なさい、この人物の顔か何だか、「隠したとて俺が知つて居るぞ」といふやうに見えるではありませんか。」と、特に段倉夫人の

方に向つていうた。夫人は蛭峰と共に知らずく透巡して闕の外に出た。こゝに至つては、「恐れる
状を示して疑ひを招くは愚の至りです。」との約束もその功が消えたと見える。

伯爵も身を轉じて外に出た。「併し皆さん、室の中の陰気なのはこの裏梯子に及びません。時々こ
こから忍び男でも出入したやうに見えるではありませんか。」忍び男と聞いて、今度は段倉夫人のみか
蛭峰の顔まで變つた。出部嶺や砂田伯などは何事とも知らぬけれどたゞ伯爵の言葉に釣込まれ、「左
様さ、何うしても忍び男の出入道です。」と砂田伯がいへば、「さうすると今の室には何々夫人といふ
が閉ち籠つて居たやうに思はれます。」と出部嶺はいうた。伯爵はまた段倉夫人に向ひ、「貴女は何と
お思ひです。若しも忍び男が夜の夜中に、罪の深い或る品物を小脇に挟み、神に隠すことは出来ずと
も人目にだけは見られまいと、大事を取つて一段づゝこの梯子を降つたと想像すれば、何だかその状
が目に見えるやうではありませんか、今もその忍び男がこの邊に居るやうな氣が致します。」
夫人は聞くに堪へ得で、重く蛭峰の腕に仆れ掛つた。面色は土の如しである。氣絶ではないけれど
殆ど氣絶の際に達したのだ。第一に驚いたのが出部嶺である。「段倉夫人、何うかなされましたか。」
夫人は必死の想ひで身を引起し、「いゝえ、少しも、少しも。」と元氣を示した、蛭峰は矯めるやう
に伯爵に向ひ、「貴方が餘り氣味の悪い想像話をなさるものですから——」伯爵は詫入るやうに、「こ
れは全く濟みませんでした。いや段倉夫人、何もこの梯子を忍び男のみが上つたといふではなく定め
し醫者達の看護婦なども上つたでせう。生れたばかりの可愛い罪のない赤兒もこの梯子から抱卸され
たでせう。」赤兒の一語は、纒に残つて居た一縷の生氣を段倉夫人から奪つてしまつた。夫人は全く
氣絶した。

一五六 この伯爵は大變者

段倉夫人は全く氣絶した。何故の氣絶だらう。その仔細を知る者は蛭峰と夫人自身とを除いては嚴
窟島伯爵の外にない。

伯爵は直に蛭峰夫人の傍に寄り小聲で、「先日差上げた氣附薬をお持ちではありませんか。」と問
うた。氣附薬とは即ち毒薬である。極く少し用ふれば直に人を活し、聊か餘計に用ふれば、忽ち人
を殺すとは伯爵が曾てこの夫人に説明して與へたところである。女の身として宴會の場所にまでかゝ
る危険な最劇薬を持つて出るとは、餘り尋常のことではないのだから、若しも伯爵が、「貴女は先日
の毒薬をお持ちではありませんか。」と問うたなら、夫人は直に、「否」と拒むところだつたらう。たゞ
「氣附薬を」と、しかも小聲で聞いたから、「はい持つて居ます。」と答へた。併しこの答へも聊か
極り悪げであつた。若し小聲でなく、人に聞える聲だつたら矢張り、「否」と答へたかも知れぬ。伯爵
はかゝる際疾い忙しい際にさへもこの蛭峰夫人がどれほど彼の毒薬を珍重して居るかを試験し、胸
の中に領いて直にその小さい瓶を受取り、その薬を盃の中にたゞ一滴落して、瓶は直に蛭峰夫人に

還し、薬は氣絶して居る段倉夫人の口に注いだ。

その效目は驚くべしだ、段倉夫人は直に呼吸を吹返した、けれど恐れはなほその心中に徘徊して居ると見え、「お、恐ろしい、恐ろしい、何だか夢のやうに。」と叫んだ、若しもこの半ばは正氣、半ばは夢のやうな状態で昔の事を口走りでもせられては大變だと驚き懼れたは蛭峰である。彼は遽だしく夫人の肩を揺ぶつて、「段倉夫人、夢ではありませんよ、氣を確に、貴女の良人段倉男爵もおいで、すから。」と引立てた、引立るのは實は豫防である。夫人はなほも震へる聲で、「さうでしたか、私は又昔の——」あゝ昔の事を語られて耐るものか、蛭峰は必死である。直にこの夫人を何處か人の居ぬところへ連れて行かねば安心ならぬ、頓智に長けた彼は叫んだ。「新しい空氣、空氣、早く新鮮な空氣を呼吸させて上げねば。」この口實で夫人を庭へ連れて出る積りである。併し巖倉島伯爵の頓智は更にその上を越した。「新鮮な空氣ならば蛭峰さん直に貴方がそのまゝ庭へ抱いて行つてお上げなさい、この裏梯子を下れば直に庭ですから。」蛭峰はこの語に従ふ一方である。餘方なしに踰る夫人の肩を扶け、數々の困難ある彼の裏梯子を降つて行つた。

これを奇觀といはずば何をか奇觀といはう、二十年間の密夫と密婦、今は全くの他人でありながら手を引き引かれて又もその昔降つた梯子を昔の通りに下るとはよし天の酉劑にしてもかうまで奇妙に行くものでない。伯爵の心の中の満足は何のやうだらう。直に伯爵は續いてその梯子を降つた。他の客も亦降つた。中に砂田伯爵は、笑談でこの騒ぎの熱を消すのが客たる者の義務でこれを交際術の奥の

手とでも思つたと見え、いと快活な聲で、「いやう、蛭峰君かさうして降りて行くところは、今伯爵の話された忍び男の役に能く符まるぜ、出部嶺君さうではないか。」と打笑つた。この聲が蛭峰の耳へは何のやうに響いたことやら。

愈々一同が裏庭には出た、この時は早や蛭峰が夫人の耳へ何事をか細語いたと見え、夫人は確に足踏みしめて立つて居る。「誠に皆様をお騒がせ申しました。」と立派に挨拶をさへ述べた。これだけで最早や伯爵が今夜のこの宴會の目的は充分に達した筈であるけれど、まだ一つ聊か達せぬところが残つて居る。若しこれだけで止めては佛作つて魂を入れぬやうなものである。伯爵はその魂を入れる積りで私かに折を待つて居ると、客一同は代る／＼段倉夫人の前に行き勧めるやうな世辭なぞを述べ始めたがその中にまた砂田伯爵は「いや夫人が神經をお動かしたのには道理ですよ、如何にもこの家には一方ならぬ陰氣なところがあつて、この庭さへも、表庭の陽氣な状に引替へ、何となく陰鬱です。かういつては主人公へは失禮か知れませんけれど、男子でさへも少し胃の重い時には自然と物凄く感じなどが起ります。」全く夫人になり替つてその氣絶を辯解するやうな言葉だから夫人も有難さうに眼を上げて謝意を表した。蛭峰も心の中で、成程交際家といふものは皆く何人にも跋を合せて八方を取繕ふものであると感服したけれど、その感服は僅の間であつた。直に伯爵がその尾に就てこゝぞと魂を入れに掛つた。「いや全く砂田伯爵のお説の通りです。殊にこの庭のこの邊は何方よりも私が神經を動かします。實を申せば先日改築のため、今私の立つて居るこの木の下を掘りまし

たところ、恐ろしい犯罪の證據が現れました。」犯罪の證據といふ如き非常な言葉は何の場合にも人の注意を引かずには止まぬ、一同は我知らず伯爵の立つて居るところに目を注いだ。伯爵「この土の二尺ほど底から一個の箱が現れ、何うでせう、その中から生れたばかりの小兒だらうと思はれる小さい骨が出たのです。」一同は身を震はせた、伯爵「こゝは墓地では無いのですから必然犯罪の證據です、多分は活埋にしたのかも知れません。」段倉夫人は再び氣附薬の厄介になりさうに見えて全く蛭峰の手に再び踰越し掛つた。けれど客一同は伯爵の足許に目を注いで夫人の状には氣が附かぬ、その間に蛭峰は夫人の手を確と握つて注意を與へ且つ夫人に細語き告げた。「この伯爵は大變者です、明一日篤と貴女に話さねばなりません。」夫人「さうですか、何處で。」蛭峰「司法省の官房へおいで下さい、官房ならば誰も怪しみませんから、極めて無難に話が出来ます。」司法省の官房を、密夫密婦の密會の場所に用ふるには、餘りといへば大膽である。官規も何もあつたものではない。

一五七 乞食

何か蛭峰は、巖窟島伯爵の所爲に付いて思ひ當つたことでもあるに違ひない。さなくばこの伯爵を「大變者」といふ筈もなくまた段倉夫人に司法省の官房へ来て下さいと請ふ筈もない。知らず彼は何事も思ひ當つただらう。さうして段倉夫人に密會して何事を相談する積りだらう。

兎に角も彼はこれより全く無言の人となつたこの席の終るまで多くは人の蔭に身を置き、何氣なく見せ掛けながらも深く物思ひに沈んで居た。そのうちに夜も次第に更け一同の歡は未だ盡きたといふではないけれど散會の時刻になつた。彼は自分の妻及び段倉夫人と三人にて自分の馬車に乗り、段倉は皮春侯爵と同乗した。その外の人達は銘々の乗つて來た馬車に乗り、皮春永太郎は父と共に乗つて來た馬車へ唯一人乗つた。

勿論孰れも無事に歸り着いたに極つて居るが獨り皮春英太郎のみはさほど無事でもなかつた、彼は宴會の間、なるべく注意して口敷を利かず、偶々利けば必ず人に感心せられるやうな事のみをいつて居たため、客一同から多少の尊敬を得て、成程侯爵の息子ぞと思はれるまでに至り、その上に又、凡そ交際の景状や人々の氣質なども分り、若しこの次にこのやうな席へでも出れば一入巧みに掛引が出来るとの案もほゞ胸の中に定まつたから大に満足してこの邸を緩々と歩み出で、馬車を自分の後に從へて一丁程も歩んだのは最早や馬車にも乗飽きたといふ人のやうに見えた。馳つて一つの曲り角まで來て馬車に乗らうとすると誰やら背後から肩を叩いものがある、振向いて見ると馬車の燈火に散らりと光るその者の顔と姿が確に乞食らしく見えた。彼は氣にも留めぬやうでそのまゝ乗つてしまつたが、乞食は追纏るやうにして、「これ辨太郎、辨太郎。」と呼掛けた。辨太郎とは誰も知らぬ本名だのに、抑もこの乞食は何者だらう。小侯爵は馬車の隅に小さくなつたが、早くも馭者が聞咎め、「なに、俺の名は辨太郎といふものぢやないわ、これ乞食の癖にこの夜深にまご／＼して居ると巡査に捕まつて

窃盗の罪に落されるぞ。」乞食は燈の前に自分の穢い顔を突き出し、恰も馬車の中なる辨太郎にこの顔を見ろといふやうに仕向けつゝ馭者に向ひ、「おゝお前さんの姿が私の知つて居る辨太郎といふ馭者に能く似て居たから呼んだのだが——と旨く満し、更に、「なに私の乗つて居る旦那に用事があるのだよ、ねえ旦那、このやうな風をして居るけれど乞食ぢやない、今から二週間程前にこの旦那から少し探し物を頼まれ、その結果を報告したいのだよ。旦那、旦那、今夜私の報告をお聞きなさらすとも宜いのですか、え旦那、それとも明日お宿へ伺ひませうか。」妙に事情を作つていふは一通りの相手でない、今夜こゝで追拂へば仇を復すぞとの意が、馭者には分らぬけれど小侯爵には能く分る、小侯爵は止むを得ず調子を合せて、「おゝお前だつたか、幾等私立探偵會社の役員にもせよ、乞食の風をして俺の馬車へ近づかれては困るぢやないか、報告なら今夜聞かう。」といひ、ひらりと馬車から降りたのは詮方盡きての事とはいへ此方も中々の氣轉である。さうして乞食を暗い道傍まで連れて行き小聲ながらも少し腹立しい調子で、「俺に何の用事がある。」乞食「用事の次第は緩々話すが、先づ俺と一緒に馬車へ乗せて呉れ、今馭者のいふ通りこのやうな穢い状でまごごして居ては巡査に捕まる恐がある。巴里の市中まで行つて卸して貰はう。」乞食らしくなく横柄である。小侯爵は無言で衣嚢を捜し始めた。乞食「なに、話の濟まぬ中に小使錢を貰はうとはいはぬ、お前が馬車に乗れば俺だつて馬車に乗りたぢやない、か同ジッロンの牢の中で一緒に臭い飯を食つて居たのだから。」かうなつては何うしても出世して居る方が弱味で、小侯爵は又詮方なく馬車に歸り、馭者には然るべき口實を設けて不相應な小使錢を與へ、酒でも呑んで他の乗合馬車にでも乗つて歸れといひ、その喜んで立去る状を見届けた上、更に彼の乞食と共に今の馬車に乗つた。乞食は勝誇るやうな語調で「おゝ、流石に辨太郎だよ、幼い時には俺を叔父さん〜と呼んだ事もある。」小侯爵「誰がお前を叔父さんなどいふものか。」乞食「そのやうな事は何うでも好いわ、まあ争ふまい、え辨、少しの間に大層出世したなあ、お前が出世すれば俺もお蔭で樂が出来るやうなものだから、なに俺はお前の出世を妨げようとはいはぬよ、これ辨、辨、何でそのやうに恐い顔をする。お前、この毛太郎次が、お前に嫌がられるやうな悪人でない事は能く知つて居るぢやないか。」扱てはこの乞食が昔の尾長屋の主人である。

一五八 年金とは幾等

尾長屋の主人毛太郎次が珠玉商人を殺した事から、その終に捕はれて終身の獄に投ぜられたまでは春田路の物語に依り讀者の既に知るところである。しかも今こゝに現れて來たところを見れば、彼は何うかして脱牢したので。

小侯爵は彼に向ひ、「お前は牢破りの罪のある暗い身で、俺を劫らうとは餘り大膽ぢやないか。」毛「これ辨や、お前だつて前科者の癖に、何うしてだか貴族の仲間へ潛り込んで居るではないか、洗ひ立てすれば俺もお前も五分々々だから互に舊い事は言ひつこなしにして、牢の中でも折々話合つた事

のある通り、互に助け合はうではないか。」何うしても毛太郎次の方が一段上だ、小侯爵は黙つた、併し黙り切ではない、一方の手で窃に腰の衣囊の短銃を探つて居る。毛太郎次はそれと察し手早く隠し持つた庖丁を取出し、「野暮は止せといふ事よ、俺だつて素手で來て居るのではないのだから。」とてその刃を小侯爵の目の前へ閃かせた。さうして廳で物凄く、「ほムムム。」と笑つてその庖丁を衣囊に收めた。

もう小侯爵は彼の意に従ふ一方である。口の中に、「悪人。」と呟いて、更に、「何うすれば好いだ。」と問うた。毛太郎次「それはお前の収入次第さ、お前の収入が少しなら俺も少しで我慢するし、お前が多く取れば俺も多く貰はねば成らぬ。」宛で株主のやうな事をいつて居る、「併し辨、お前は何うしてかう出世した。牢を出てから未だ一月と経たぬぢやないか、本統に感心だよ、何でも俺は昔からさう思つて居た、この兒は智慧が逞しいから、人並外れた事をするだらう、とそれにしてもこれ辨、何うして出世した、話し聞かせ。」小侯爵「本統の父に廻り合つたのさ。」毛太郎次「あ、父に、さういふお前は常にさういつて居たなあ、何處かに本統の父が居るに違ひないから、何うか尋ね出して子を捨てた罪を散々に思ひ知らせて遣りたいと、併しお前をかう貴族社會へ入れて呉れるやうなら満更憎くもないだらう。誰だ、誰だ、その父といふのは。」小侯爵「伊太利の皮春侯爵だよ。」毛「大層立派な父だなあ、それでもう、お前の身は生涯食はぐりのない事に極つたから、俺に生涯の年金を呉れ、俺ももう取る年だから、仕事をせずに生涯を樂に暮したい。」小侯爵「年金をとて何時勘當されるかも知れぬ、お前のやうな者が、この通り馬車と合乗すると分れば直にも勘當せられるよ。」毛「だから年金を呉れといふのだ。呉れさへすれば、決して合乗などの所望はせぬ、お前が勘當せられれば俺も口が乾揚るから、なるだけお前のためを計るよ、え辨、お前が勘當させられたらその日限りに止めるといふ約束で俺に年金を拂つて呉れ、俺はもう眞實悪事が厭になつた。」小侯爵「年金とは幾何。」毛「さうさ月に四十圓といつて小侯爵の顔を見、その驚かぬ状を見認めて、「さうさ四十圓あれば何うかかうか暮しは附くが、實は五十圓も欲しいよ、五十圓か六十圓もあれば。」と段々顔を見上げて、「俺は樂隱居の眞似をして毎朝顔を剃つてよ、垢の附かぬ着物を着て、日の暮から大通りの珈琲店へ行き新聞でも讀んで、苦なしに目を送るのだ、俺はもうその上の慾はない。さうするには少し又臨時の費用も掛るから月に七十圓と思つて呉れ。」四十圓か店頭七十圓になつた。小侯爵はこの上の梯子登りを恐れるから直に財布を探つて八十圓取出し、「さあこれが最初の一ヶ月分だ。」毛太郎次「八十圓か有難い、今の内はこれで足りる。」小侯爵「足りても足りなくてもその上は知らないよ、來月から毎月初めに俺の宿へ來れば執事から拂ひ渡す事に仕て置く。」毛「え、執事、大層お前は貴族らしくなつたなあ、だけれど辨や、執事とはお前の雇人ぢやないか、俺はお前と取引するのだよ、雇人には用事はないよ。」小侯爵「では俺の手から直々遣らう。」毛「さうして呉れ、その中に又口でもあれば何處かの貴族の家へ執事とか家扶とかいふやうなものに住み込ませて呉れ。」これで先づ用は濟んだといふやうに彼は馬車の外を見廻したが、早や巴里の町へ入つて居る。「お

— 51 —

や辨、その帽子を俺に貸せ。」といひ小侯爵の頭から帽子を取り、更に馭者臺に在る馭者の外套を手早く着て、「それでは來月また逢はう。」小侯爵「これくそれを持つて行つては困る。」毛「なに、帽子と外套かなければ俺は巡査に怪しまれるよ、お前は風に帽子を取られたといへばそれで済む、馭者の外套は新しく買つて遣れ。」言ひ捨て、彼毛太郎次はひらりと馬車を降り早や暗に姿を隠した。後小侯爵は深く感じたやうに、「あゝ、この世の中には、邪魔者のない本統の幸福といふものはないと見える。」呟いて且つ嘆息した。

一五九 妻の室に飛んで行つた

小侯爵の馬車よりも一時間ほど先に巴里へ歸り着いた馬車が二臺ある。その一臺は蛭峰の乗つた馬車で、これは先づ段倉の家の前に着き、中に相乗した、段倉夫人をその支關に下して置いて去つた。この支關にはこの馬車よりもなほ先に騎馬が歸つて來た出部嶺が待つて居て、馬車から降りる段倉夫人を扶け引いて家の中に入つた。

今一臺の馬車は段倉男爵の馬車で、これは矢張り相乗して居た皮春侯爵をその旅館へ送り届け、さうしてまへの馬車より少し遅れて段倉家に歸り着いた。出迎へる下僕どもには振向もせずこの馬車から降りた主人段倉は、何故だか異様に顔が曇つて居る。出迎へる下僕どもには振向もせ

ず直に自分の居室へ引込み、長椅子に倚つたまゝ手を組んで考へ始めた。「何うも一昨日から不思議に運が傾いて來た。伯爵の馳走は立派だつたが四百萬圓からの損失を考へると箸も取る氣もせなんだ。何だつて西班牙公債へあれも影響を及ぼすやうな馬鹿げた電報の間違ひがあつたのだらう。この損失は何うしても皮春侯爵の資本を引出し伊太利の鐵道株を動かすより外はない。大分今夜は侯爵の機嫌を取つて置いたから追々資本引出しの道も開けるだらうけれど、彼の侯爵に少しも山氣がないのだから始末が悪い、金は正金で持つて居るほど安心な事はありませんとばかりで、宛で金儲けを恐れるやうに逡巡する。併しなにあの息子と夕蟬とを縁組させるやうに仕向ければ四五百萬圓は取出せる事にならう。先づ細工は流々だ、息子の方から手懐けて行くと仕よう。」と呟き終るか終らぬに、下僕の一人が手紙のやうな物を持つて來て、「至急の書類だとして、唯今銀行の書記が持つて參りました。」といつて退いた。段倉は封を切つて讀むか否や、獨り腹立しげに絶叫した。「何だ、伊太利のマソフレダイ銀行が破産した。えゝ悪い時には悪い事ばかり續くものだ、これもその實は西班牙公債の影響かも知れぬ。あの銀行へは百萬圓以上の貸越になつて居る、又百萬圓の損失か、餘り甚い、餘り甚い、このやうな損失が引續いては、待て、富村銀行から取附に逢つたためと書いてある。富村銀行ならば伯爵に頼んでその取附を猶豫して貰へば好かつたのに、といつたところで今は後の祭りだ、情無いなあ、このやうな事ばかり續いては幾等俺の段倉銀行の信用が厚くても、遠からず世間から疑ひを受ける事になる。この不運といふも、總てその元は妻が餘計な口出しをするから出て來る

のだ。出部嶺のやうな口先の旨い奴に欺かれて、好し、一思ひに叱り懲りて呉れねば腹が癒へぬ。」
金錢の事より外に餘り立腹する事のないだけに、金錢の事といへば親身をも忘れる程に怒るのだ。直
ちに彼は妻の室に飛んで行つたが、こゝには妻と出部嶺が何か密々話して居る。多分は先刻伯爵別邸
で、馬車から下りる時手渡した密書にて出部嶺を呼寄せたものと見える。妻は驚いて、「おや、貴方は
今夜株式の方へお廻りがなかつたのですか。」段倉は大聲に、「この頃の亂高下に仲買は徹夜して居や
うけれど、一晝夜に四百萬圓の損をしたこの段倉はもう仲買などに用はない。」出部嶺は氣色を察し
て立上り、「いや夫人、段倉さん、今夜は失禮のみ致しました。また明日伺ひます。」といひ、こそこ
そと辭して去つたは、立場を失はぬうちに逃げて行く如くない掛引である。すると今まで出部嶺の膝
に居た一匹の狎兒が更にお世辭を呈するやうに段倉の膝へ來た。段倉は直に首の邊の皮を無慈悲に擱
んで、「もうこのやうな贅澤な物などは飼つて置かれぬ、ずつと暮し向を儉約して貰はねば。」とて室
の隅へ投附けた、八當りとはこの事だらう。幾等狎兒が贅澤でも幾百幾千萬の身代にこれ一匹が影
響をしまいのに、夫人はその身に弱みがあつても黙つては居られぬ、「又お極りをなさつては困りま
すよ、幾等貴方が株式で損をしたとて、狎兒が知つた事ですか、金のための御立腹なら、金のために
雇うてある銀行の方の書記や手代にお當りなさい。」段倉「書記や手代は月給以上に働いて居る。何
も俺に間違つた電報などを教へて四百萬圓の損は掛けぬ、和女は四百萬圓の金を何れ程の高だと思
ふ。金貨で積めばこの室へ入れ切れぬ程であるのに。」夫人は痛く夫を賤しむやうに尻目に掛けて、

一六〇 二ヶ條の宣告

「明けても暮ても金々と、だから私は銀行家の妻は厭だといつたのですよ、生れた里でも前の夫糊膏
男爵の家でも、家内の間で金といふ事は一言もいつた事がありません。」段倉「それはその筈さ、言
ひたくもいふだけの金のない家だもの。」と惡口雜言に入り掛けた。
夫の惡口雜言に妻も中々負けては居ぬ。「朝から晩まで金々と、私は金の音と貴方の聲とが何よ
りも嫌ひです。」聲が嫌ひとは無言で立去れといふ事である。
妻として夫に對し、これほどの侮辱が又とあらうか、若しも彼の偽電報を作爲した人の目的が段倉
を苦しめるためであつたとすれば、その目的は二重に達したといふものだ、彼に金錢の損失を掛けた
が上に、彼の夫婦仲を破つて一家の平和をも擾亂した。宛も石一つで鳥二羽を殺し得たやうなもの
である。段倉は眞赤になり「今まで和女から政治上の祕密を聞き、それで金儲けをした場合には必ず
二割五分を和女へ配當して來たのだ、私が百萬圓儲ければ和女も二十五萬圓の利益になつた。この
計算で今度の四百萬圓の損失に就き和女の財産から百萬圓は支出させねばならぬ、それが共同營業
の原理だから。」妻は冷かに笑つて、「そのやうな金があるものか。」と呟くやうにいつた。段倉「な
い、愈々ないとならば出部嶺へ注込んだのだ。彼に出させるが好い。」妻はなほも落着いて居る段倉

は殆ど燥るやうに、「和女は、知らぬは亭主ばかりなど、思つて居るだらうが、和女のした事で、私の知らぬ事は一個もない。夫婦になつて後の事は勿論、その前の事とても、知つては居ても營業と家の信用が大事だから、知らぬ顔で黙つて居るのだ。それがためにもう四年以來夫婦といふは上部ばかりで、別居同様にして居るではないか、知らぬ亭主は馬鹿のやうに見えるとかいふけれど、知つて知らぬ顔をして居ればこそ、出部嶺だとして私に頭が上らぬではないか、今も私が入つて来れば狐鼠々々と去つてしまふではないか、出部嶺のみか蛭峰とてもその通りだ、大檢事といふ豪い職には居るけれど私の前では誰の前よりも小さくなつて居る。」この言葉で見れば、營業のために妻の不しだらを黙許して居るのだ。このやうな人間が上流社會にあるだらうかと怪しむのは抑も野暮だ、この頃の佛蘭西の上流社會は大抵このやうなものであつた。併し夫人は蛭峰の名の出たのに殆ど顔色を失つて落着いた状は全く消え、「蛭峰さんが何ですか。」と叫んだ。

叫ばずには居られまい。今夜彼と二人で舊惡の場所に立ち、氣絶するまでに驚き恐れ今もなほその心が鎮まらず、明日、司法省の官房で彼に逢はうといふ約束を唯一個の頼みの綱として居るのだから、今度は段倉の方が冷かに笑つて、「何ですかなどと私に問ふより、和女の前の方糊菅男爵が何で死んだかを思ひ出して見るが好い、可哀さうに男爵は九ヶ月の旅から歸つて見ると最愛の妻が妊娠して六ヶ月に成つて居た。さうしてその相手が蛭峰と分り、悔しさに急に病氣が重つて血を吐いて死んだぢやないか。」夫人は返す言葉もない。たゞ、「餘りな疑ひです。」と再び叫び尻餅搦いて長椅子の上で沈んだ。

夫は勿論介抱もせぬ、たゞ宣告するように、「敢て濟んだ事を咎めるではない。兎も角も四百萬の損失は、出来るだけ和女の財産から取立て、なほ不足の分はこの後の配當で差引くから、さう思つて居るがよい、但しそれだけでは未だ足らぬから、娘夕蟬をも、誰か大身代を持つて居る人の息子に縁附ける。これも横合から口を容れて貰つては困る。」と二箇條を言ひ聞けて立去つた。扱てはたゞ舊惡を鳴らすのが目的ではなかつた。舊惡を責めてぐうの音も出ぬやうに凹ませて置いて、さうして二箇條を無理往生に押附けるためであつた。中々外交の掛け引が旨い、日頃の黙許も無理がなかつた。この翌日である。妻は約束の刻限までに蛭峰を司法省に尋ねる積りで、只管夫の外出を待つて居ると、夫の方は二箇條の中の一箇條、娘夕蟬の縁談に就て地歩を進める運動のため家を出た。さうして行く先は巖窟島伯爵の邸であつた。

一六一 濃い覆面の一婦人

夫段倉が伯爵が尋ねんとて家を出た後、果して妻張子は蛭峰を討はんために家を出た。雙方ともにこの物語の大なる波瀾を捲き起す紀元とはなつた。但し伯爵との面會は表面極めて平穩無事であつた。たゞその平穩無事の中に、一つの黒點が籠つて

居る。他日天一面に擴がる陰悪な雲とはなつたのだ。先づ夫の方より記して行かう。

段倉は伯爵家の接見室で十四五分待たされたその中に外から、法師姿の老人が入つて来て、段倉に黙禮したまはずつと奥へ通つてしまつた。扱ては餘程伯爵と懇親な老僧と見える。このような客があつて若し話が長ければまた出直して来ようと聊か考へ込むところへ、「いや、來客のために大にお待たせ申しました。」と嫌機能く伯爵は出て来た。段倉「はい、御來客のある事は唯今こゝを通られた老僧でも分つて居ます。」伯爵はいと軽く、「あゝあれですか、あれはなに、暮内法師とて伊太利では有名な方ですけれど、多年別懇の仲ですから幾等待たせても構ひません。」とはいうけれど、自ら言葉の中に長居は迷惑との意味が見える。段倉はそれと察し、「いや、私は事務家ですから極手取早く申しますが、昨夜お目に掛つた皮春侯爵の巴里滞在の眞の目的は何れて在るのでせう。」と前置もなく問出した。伯爵は故と賤しむやうに、「息子を交際社會へ出し、嫁を得させたいといふので、私へも頼むなどといはれましたけれど、何しろ吝嗇ともいふべき程の儉約家ですから、私は先づ嫁を捜すよりは金を使ふ事を稽古せよと言ひました。金さへ使へば随分嫁の候補者も出来ませうけれど、さうなくば——」段倉は短兵急に、「いや、貴方はさうお思ひでせうが、私の如き實業家は却つてその儉約なところを見込むのです。金を使はぬのがあの方の値打だと思ひます。」伯爵「さう仰有ると何だか貴方が嫁の候補者でも持つて居るやうに思はれますが。」段倉「その通りです。實は私はある方の氣質に感じましたから。」金力に感じましたとはいはぬ、「娘夕蟬を小侯爵の妻にしては何うかと思ひ、既に妻とも相談してその賛成をも得て居るのです。」伯爵は打笑つて、「成程貴方は手取早い、それでなくば第一流の實業家にはなれぬ筈です。」褒めるやうにいひ、應て又眉を蹙め、「いや、段倉さん、それはお止めなさい。貴方のやうな華美な方と、あの陰氣な侯爵とは肌の合ふ筈がありません。親類になつて長く附合へば必ず喧嘩する事になります。」伯爵はかう妨げる方が却て益々段倉の熱心を増す事を見抜いて居る。段倉「いや、肌の合はぬは私の心の持ちやうに在る事ですから、その點は御安心の上、なるべく侯爵父子の心の動くやうに貴方の御加勢を願ひたいのですよ。」伯爵「それは出来ません。今言ふ通り私はこの縁組を賛成しないのですから、はい、贊成の出来ぬ理由が二つあります。」段倉「二つとは。」伯爵「第一は今言ふ通り貴方と侯爵とは未だ懇意が浅い、従つて他日深く知合へば喧嘩する恐れがある。」段倉「その理由は理由になりません。」伯爵「第二には夕蟬嬢と野西次郎の息子武之助との間に縁談が始まつて居ると聞きます。野西父子も私の友人ですから。」段倉「成程、野西父子に對しても贊成が出来ぬ、この理由は分りました。併し伯爵、武之助と夕蟬とは當人同志が互に厭がつて居るのです。」伯爵「それにしても同じ事です。」段倉「のみならず、私は野西次郎が先年希臘へ援軍に行き、非常な大金を作つて歸國した事に就て聊か疑ひがあります。貴方は始終希臘から伊太利の邊にお住ひなされた容子ですから、多少その邊の事をお聞込みではありますまいか、いゝえ、これは私の外にも薄々怪しんで若しや彼野西は何か不義の金でも得て來たのではあるまいかなど、その頃噂した人もありました。果してそのやうな事ならば私は不義で出世し

た金持と縁者となる事は好みません。」不義を憎むやうな言葉が段倉の口から出るとは眞に口は調法である。勿論伯爵は野西次郎の大金を得た次第を能く知つて居る。實はこれを知るがために莫大の辛苦を費したのだ。けれどさうはいはぬ。「いや、私は能く知りませんが、ヤミナ州に在るヤミナ銀行へ聞合はせば分りませう。何でもあの頃ヤミナ銀行が軍用金を取扱つて居ましたから。」たゞこのヤミナ銀行へ聞合せといふ一語が、穩かな青天に一點現れる雲の種ともいふべきものであつた。一點の雲の種が、他日何のように擴がつて、何のやうな風雷を引起すかは誰とても豫想が出来ぬ。併し段倉はこの言葉を聞いて喜んだ、皮春侯爵との縁組に付き伯爵の賛成を得ぬのは、残念だけれど、若しやヤミナ銀行へ聞かせて野西との縁談を破る口實でも得ればその残念を埋合はすには足るのだ、彼はなほ一言二言話した上、全く手取早くヤミナ銀行へ聞合せの手紙を出すために伯爵に分れを告げて去つた。

* * * * *

これとほゞ同じ刻限である。濃い覆面に顔を隠した一婦人が司法省に出頭し、官房の戸を叩いた。取次の男は兼ねて長官の命でも含んで待つて居たかのように、「貴方は蛭峰大検事へ、裁判上の参考になる材料をお告げ申すために來た方ですか。」と問ひ、夫人が點頭か否や、直に戸を開いて内に入れた。

一六二 證據が有ります

若い時の悪事は、年取るに従つて次第に身を責める事になつて來る。蛭峰大検事と段倉夫人も、今は若い時の悪事のため、かくは苦しい思ひをしてまで密會せねばならぬ事になつたので、密會したては詮方があらうとは思はぬけれど、密會して相談せねば、心が落着かぬ、何となく不安心だ。罪深き男、罪深き女、人の罪を糺すといふ司法省の官房で、顔と顔を合せて立つた。聽て蛭峰大検事は用心らしく四邊を見廻した。勿論この室へ出入する人のないやうに、朝から口實を設けて手筈をしてある。取次が退けば誰も邪魔するものはない、しかも蛭峰は入口の戸に錠を卸し、念の上にも念を推してさうして夫人の前に立返つて座に就いた。今は昔の互に夢中であつた頃とは違ふ美しい他人同志の仲となつて、綺麗に附合つて居るだけに雙方聊か極りの悪い想ひもある。けれど夫人の方はその極りの悪いよりも昨夜の恐ろしさが先に立ち、震へるかと思はるゝ聲で口を開いた。「廻合せといふものでせうか、餘り不思議ではありませんか。言葉と共に帽子と覆面とを取脱した。時はさう暑くもないのに前額に汗が浮いて居る。蛭峰も青い顔で、「はい、廻合せとしては餘り不思議過ぎますよ、昔の事を悉く思ひ出さねばならぬやうな場合に立つたのですもの、眞に貴女のお辛かつたはお察し申します。」夫人「顔色を替へてはならぬ、素

振に現してはならぬと、必死の想で身を支へて居ましたけれど、つい氣絶する事になりました。誰か私の容子を怪しいと見て取つたでせうか。」蛭峰は考へて居る。夫人「眞逆に誰も、譯あつての氣絶などは思ひますまい、思ふ筈がないのです。けれど——」蛭峰「いや、それが怪しいのです。貴女が正氣に復つた時、巖窟島伯爵が貴女の顔を見た目の光を御覽なされたか。」巖窟島には屬魂心服して居る夫人である。「なに、あの方なれば、田舎から出て来たばかりで別に惡氣もなく、また交際場裡に永く居る人のやうに邪推などもなさるまいと思ひますが、若しや貴女の奥方に——」蛭峰「いやあの方ならばと、さう安心なさるのが間違ひではなからうかと私は思ひます。あの別荘を買取つたが巖窟島伯爵ではありませんか、賣別荘は澤山あるのに、何故に伯爵があつたの別荘を選んだのでせう。さうして私や貴女を彼處へ招いたも伯爵でせう。伯爵はエリシー街に本邸があるのに何故あの邊鄙なところへ故を招いたのでせう。」夫人「それだから私は廻合せだといふのです。廻合せが恐ろしいのです。」蛭峰は承知の出來ぬ面持で、「いや、廻合せなら恐れるに足りませんが、私は廻合せよりもつと恐ろしい事ではなからうかと氣遣ひしました。」夫人「え、もつと恐ろしいとは。」蛭峰「さあ其處です。實に私は餘り合點が行かぬから、昨夜も眠らずに明しました。第一、あの伯爵が私をあの別荘へ招いた時の素振から怪しいのですよ、私はオーチウルと聞いた時、出席を斷らうと思ひましたのに、旨く言葉を廻して斷ることの出來ぬやうに仕向けられました。私は自分の否と思ふことを斷り得なんだのは殆どこれが初めてです。實に巖窟島伯爵といふ人は掛引の旨い方ですよ、大變者ですよ。」夫人「それではあの伯爵が、貴方と私との昔の事を知つて居て。」蛭峰「さうです。若しや知つて居て、私と貴女とを窘めるやうな目的のためにしたのではないかと疑はねばならぬことになつて來ます。」夫人「それは。」蛭峰「あの室に限り昔のまゝに残しておいたり、また彼の裏梯子を説明した言葉など、何うしても偶然ではありません。」夫人「だから私は恐ろしい廻り合せだと思ひ、氣絶することになつたのです。これが廻合せでないとするれば、貴方は何で伯爵がそのやうな事をするといふ確なお心當りでもありませんか。」

滿更心當りのない筈はないだらう。三十年來、人に憎まれる檢事の職に居て、さうして自分の我意のため、野心のため、人情をも浮世の義理をも殆ど蹂躪つて來たのだから、併し彼は思ひ當らぬと見え、「はい、さう思つて色々考へ廻りましたが、何うしてもの方には心當りがないのです。何だか或る時は伯爵の顔を、昔見たことのないでもないやうな氣もしますけれど、確にそれは迷ひです。昔から私とは何等の關係もあつた人ではないのです。それで私は終に思ひ定めました。多分貴女のためだらうと。」夫人「え、私のため。」蛭峰「はい、何か貴女に對して戀の恨みとかいうやうな——」夫人はまた恐ろしげに身を震はせた。素よりこの夫人の越方には、人に戀の遺恨を受くべきやうな筋合は澤山あらう。二口や三口に止まりさうもない、併し夫人は斷言した。「いゝえ、決して私の方にはそのやうなことはありません。」

かうなつては更に分らぬ、雙方ともに少しの心當りもない、いや、あるか知らぬけれど思ひ出され

ぬ、夫人は暫くして宛も嘆願するやうな語調で、「ですが蛭峰さん、あの伯爵が遺旨とか遺恨とか持ったための仕業などとさう恐ろしく考へずに、私の言ふ通り單に廻合せと考へて、何とか私に安心させて下さるお言葉はありませんか、私は成るべく軽く考へて、何うか恐ろしくないやうにしたい、出来る事なら悉かり忘れてしまひたいと思ひますのに。」蛭峰はいと重々しく、「それは私も同感です。出来る事なら伯爵が故とこのやうな事をするなどは思はずに、たゞ偶然の廻合せと思つてしまひたいのですが、こゝにさう思へぬ一つの大きな證據があります。はい悲しい哉、伯爵が確に故意を以て我々を襲うて居るといふ争ふべからざる確證があるのです。一何のやうな確證だらう。夫人は益々顔の色を失ふのみである。いや夫人よりも實は蛭峰の方がなほ顔色を失うて居る。

一六三 聞かせて下さい

密夫と密婦との間に私生兒の出来たといふ事は、世間に例のない事でないかも知れぬ、けれどその私生兒は密夫と密婦の生涯の氣掛りとはなるに違ひない、況してその私生兒を、生れるか否や人知れず後庭に埋めるとは、これも例のない事ではなくとも、生涯不安心の種であらう。更に密夫密婦か、年経て後に、その兒を埋めた場所に立ち、足にその土を踏まねばならぬ事になるとは、これを偶然の廻合せとしても、恐ろしき限りである。又更に、若しこれが偶然の廻合せではなくて誰かの仕業だと分つたなら何うであらう。それこそ居ても立つても居られぬという程の心地がしよう。

今蛭峰大檢事は、即ちこれを偶然の廻り合せでないといふのだ、巖窟島伯爵の故意の仕業だといふのだ。果して故意の仕業ならば、誰も知るまいと思ふこの秘密を、伯爵に知られて居る事も無論である。さうと聞いて段倉夫人の戦くも無理はない、聞く夫人よりも話す蛭峰の方が更に顔色を失ふのも當り前といふべきだ、夫人は、人間の聲と思はれぬほどの術無い聲で又問返した。「え、その證據とは。」

蛭峰は壁に聞かれるをさへ恐れる程の容子で、ずっと夫人の顔に顔を寄せ、「夫人、私はこの恐ろしさを生涯自分の胸に疊み、自分獨りで苦しむという覺悟でしたが、今はお氣の毒ながら貴女に話さねばならぬ事になりました。話せば貴女のこの後に一寸の間も安心といふ事のないやうになります。それでも貴女は聞きますか。」眞に情無い場合とはなつた。夫人は灰の如く顔を白くし、「はい、聞きます。聞きます。聞かせて下さい。」蛭峰「では言ひませう。巖窟島伯爵が彼の木の蔭の芝生を掘つたら年経た赤兒の死體が出たと言つたでせう。」夫人「はい。」蛭峰「あの言葉が嘘ですよ、偽りですよ。」夫人「え、え、何と、それでは彼の兒を彼處へ埋めたではないのですか。」蛭峰「いや夫人、埋めた事は彼處へ埋めたのです。全く伯爵がこゝと足で踏んだその下へ埋めたのです。けれど伯爵が數日前に掘出したと言ふのは跡方も無い事です。數日前は扱て置き、數年前に、既にその死骸は彼のところには無い事になつて居ました。」夫人「では貴方が改葬でもして下さつたのですか。」

蛭峰は溜息を吐いた。さうして更に考へた末、「さあ改葬したのなら、今更さまでにも驚きませんが、改葬ではないのです。何うか夫人、氣を確にしてお聞き下さい、極くの初めから話しますが。」とて又々溜息を洩らした末、「彼の赤兒の生れた時、幸ひ貴女のお産はさう重くもありませんでしたけれど、その兒が聲も出さねば呼吸もせなんだでせう。それだから私も貴女も死體で生れたものと思ひ。これまでは澱みもなく言ひ來つたが、忽ち彼は聲さへも咽喉に詰るが如く喘ぎ始めた。

その仔細は分つて居る。決して赤兒が聲も呼吸もしなかつたものではない。當り前に活々して生れたのを、直に蛭峰が自身で取上げ、自分の手で絶息させたのだ、夫人が後産に苦しんで夢中の狀で居る間に、手早く捻り殺して聲も呼吸も出ぬ事にして、さうして漸く生氣の附いた夫人へは死體で生れたと思はせたのだ。さなくば彼このところまで話して來てかうまで言葉の苦しくなる筈はない。漸く彼は言葉を絞り出して、「直に有合せた箱へ入れ、私が自分の脇に挟み、裏庭へ降りて行つて埋めたでせう。ところが埋め終つて立たうとするとき、背後に人影が現れました。それは兼て私へ復讐を加へる積りで、附狙つて居たコルシカ人です。はつと思ふが否や、私は脾腹を刺され人事不省になつて仆れました。暫く經て後生氣に復り、今赤兒を埋めたところを見ると、土は埋め終つた時のまゝになつて居て、コルシカ人は早や立去つた後なんです。何しろ、彼は銳利を以て有名なコルシカ短劍で、さうして幼い時から稽古して居る特有の手續を以て刺したものですから、その割に出血も少く、私は創口に手を當てたまふ、何うやらかうやら身を引摺り、縁側のところまで行つて貴女の名を呼びました。常ならば中々聞える程の聲ではなかつたのですけれど、世間の變鎖まつた夜深といひ、殊に貴女が庭から私の戻りの遅いのを氣遣ひ、耳を澄して容子を聞いて居て下さつたところですから、その聲が貴女に聞えたと思へ。」夫人「はい、微だけれど聞運へることの出來ぬやうに聞えました。何でも貴方の身に大變な變事があつたに違ひないと、私は重い身體を無理に起し、這ふやうにして二階を降り、縁側まで行つて見ますと貴方がある有狀ゆゑ驚きました。何しろ一刻も捨置かれず、寢込んで居る老僕を起し、貴方の怪我は全く祕密でしかも名譽ある決闘のためだと言做し、出來ぬながら及ぶだけの手當をして夜の明けぬ中に吊臺に載せ。」蛭峰「さうして私の妻の許まで送り届けて下さつたのですが、妻も勿論決闘のためとしか思はず、若し事を公にして職務に障つてはならぬといふ私の口實を誠と思ひ、それらに介抱の末、二ヶ月を経て、私は凡そ元の身體に復り、暫く海濱へ行つて養生しました。その間も絶えず私の心に掛つたのは何事です。埋めた赤兒のことばかりです。」夫人「私とてもその通りです。」蛭峰「誰にも知られぬならば兎も角、確にコルシカ人に知られたに違ひないから、若しもそのコルシカ人が私の生返つたことを知れば、自分の復讐の仕損じを怒り、再び私に讐を始め、私の埋めた物を掘出して利用するに至るかも知れぬと、たゞそのみか心配に堪へませんでした。それ故、私は身體が堪へるやうになると直様、海濱から歸りました。歸つて聞くと貴女は段倉男爵に縁附いて居られました。それは兎も角、何よりも先に彼の埋めたものを掘出し、更にコルシカ人は勿論、何人も知らぬところへ改葬せねばならぬと思ひ、吹上小路のあの家を指して行き

た。常ならば中々聞える程の聲ではなかつたのですけれど、世間の變鎖まつた夜深といひ、殊に貴女が庭から私の戻りの遅いのを氣遣ひ、耳を澄して容子を聞いて居て下さつたところですから、その聲が貴女に聞えたと思へ。」夫人「はい、微だけれど聞運へることの出來ぬやうに聞えました。何でも貴方の身に大變な變事があつたに違ひないと、私は重い身體を無理に起し、這ふやうにして二階を降り、縁側まで行つて見ますと貴方がある有狀ゆゑ驚きました。何しろ一刻も捨置かれず、寢込んで居る老僕を起し、貴方の怪我は全く祕密でしかも名譽ある決闘のためだと言做し、出來ぬながら及ぶだけの手當をして夜の明けぬ中に吊臺に載せ。」蛭峰「さうして私の妻の許まで送り届けて下さつたのですが、妻も勿論決闘のためとしか思はず、若し事を公にして職務に障つてはならぬといふ私の口實を誠と思ひ、それらに介抱の末、二ヶ月を経て、私は凡そ元の身體に復り、暫く海濱へ行つて養生しました。その間も絶えず私の心に掛つたのは何事です。埋めた赤兒のことばかりです。」夫人「私とてもその通りです。」蛭峰「誰にも知られぬならば兎も角、確にコルシカ人に知られたに違ひないから、若しもそのコルシカ人が私の生返つたことを知れば、自分の復讐の仕損じを怒り、再び私に讐を始め、私の埋めた物を掘出して利用するに至るかも知れぬと、たゞそのみか心配に堪へませんでした。それ故、私は身體が堪へるやうになると直様、海濱から歸りました。歸つて聞くと貴女は段倉男爵に縁附いて居られました。それは兎も角、何よりも先に彼の埋めたものを掘出し、更にコルシカ人は勿論、何人も知らぬところへ改葬せねばならぬと思ひ、吹上小路のあの家を指して行き

ました。」

一六四 紋の片割

段倉夫人は蹙み附くやうに聞いた、「さうしてあの死骸を改葬して下さったのですか。」
蛭峰は思ひ出すさへ心の穏かならぬ容子である、頓には答へもせず、先づ前額の汗を拭いて、「さあ其處です。私は誰にも心附かれぬやうに、矢張り夜に入つてから吹上小路へ行きました。勿論あの家は、貴女が立去つて後には誰も住んだ人が無かつたゆゑ、何も彼も元のまゝに存して居ました。私は稍安心して、夜の十時過ぎではありましたが、兼て用意の鍬を持つて、丁度小兒を埋めたところと確に見覚えのある場所を掘返しました。ところが何うでせう。死骸が箱ぐるみ紛失して影も形も留めぬのです。」夫人は絶叫した。「え、え、私の兒の死骸が棺と共に紛失した、では改葬して下さらなかつたんですか。」蛭峰は遽て、夫人を制するやうにし、「いや、さうお驚きなすつてはいけません。高い聲を立てぬやうにして下さい、それから私は捜しました。若しや自分の思ひ違ひで間違つた場所を掘つたのではないかと、その近邊を二十坪も掘返し、なほ翌日に及んでは家の内をまで詮索しました。けれど赤兒の死骸はありません。全く誰か掘出して盗み去つたのに極つたのです。」夫人は再び驚いた。「え、誰か盗み去つたと仰りますか、それにしても昨夜伯爵が、箱から死骸

が出たと言はれたのは。」蛭峰「さあ、それが何より怪し點です。死骸が無いのに死骸が出たと言ふところを見れば、伯爵は偽りです。偽りだけれど、兎にも角にも私と貴女が赤兒を彼處へ埋めた事を知つて居るのは明白です。それを知つて居て故と彼のやうな事を言ひ特に二人を苦めたのです。」夫人は全く腰を抜かした状である。暫しが程は何の言葉も出ずにたゞ喘ぐのみであつたが、稍あつて自ら心を落着け、「外國から初めてこの國へ来た伯爵が、そのやうな事を知つて居るとは。」夫人「それはさうすれば伯爵が外國から初めてこの國へ来たと言ふさへ怪しいではありませんか。」夫人「それはさうです、けれど外國から初めて来たのでないにしても、誰一人知れぬ秘密をあの方が——何うも知つて居る筈がありません。若しや蛭峰さん、貴方の紛失したと思つたのが間違ひで、貴方の掘残したところに矢張りあの死骸があつたのではあますまいか、それを全く伯爵が数日前に掘當て、それで昨夜のやうな話をしたのではありますまいか。」
蛭峰は太い息を吐いた私若しもさう考へる事が出来るならば何も心配は無いのです。ならう事なら私もさう考へたい。けれど夫人、こゝに一つ、何うしてもさうでない事實があるのです。その死骸をば、私が掘るより前に箱ぐるみ掘り出して、持去つた者が確にあるのです。」夫人「それは。」蛭峰「かうです。私はその時、必定彼のコルシカ人が盗み去つたのだと思ひ、さうすれば近日再び私へ仇をなすため、その死骸を何處かへ持出すだらう。持出せば直に捕へて、その證據の湮滅するやうにせねばならぬと、私は人知れず八方に氣を配り、且つは及ぶだけ手を延ばして用心してゐました。恰度

この頃です、私は内閣から召されて書記官長に取立てられる沙汰を得ました。これこそは兼て望む出世の道で、遠からず大臣にもなれる緒口とは思ひましたけれど、折角出世したところで、この秘密を持出されては堪らぬから、矢張り口實を設けて、元の通り検事の職に据置いて貰ひました。全く私はこれのため大事の出世を取逃がしたのです。けれど検事の職にさへるれば、よしや曲者がその死骸を持出して來ても何うか出來ると、たゞ、かう思ふがために凡そ一年の間といふものは、夜の目も寝ぬほどに注意しました。ところが死骸を持出しては來ぬのです。抑も死骸といふものは、掘出してから一年置けば證據たる效力を失ひます。私は聊か安心し始めました。また氣が付きました。いや彼の赤兒は、私の埋めた時、或は死骸でなかつたかも知れぬ。死んだと見えまだ命が存してゐたかも知れぬ。」夫人「え、それでは貴方は私の兒を生埋にしたと仰有りますか。」蛭峰「いや生埋ではありませんが、死んだと思つて葬つたものが、意外に活返るなどいふ事は全くない例しでもありません。それで私は思ひました。若しやコルシカ人が、私を刺した後で、直にあの箱を掘出して持つて行き、何處かで開いて見ると中からまだ息のある赤兒が出た、とかうすれば、彼はその赤兒を何う取り扱ふだらう。河へでも投込むか、聊か慈悲の心があれば育兒院の前へでも捨てるか、多分このやうなことに違ひないと、それから急に育兒院の方を詮議し始めましたが、漸くに分りました。オーチウルの育兒院の前へ、その同じ夜の一時半頃に赤兒を捨てた者があります。」かう聞いては流石兒を思ふ親の情である。段倉夫人は乗出して、「お、私の兒が育兒院で育ちましたか。」蛭峰は、これには答へずに話を續け、「その兒は白い切で包んであつて、切の端には男爵の位に相當する紋章の附いてゐるのを二つに引割き紋が半分だけ残つてゐて、その下にはHの字があつたさうです。」夫人「そのHの字は私の名の張子の頭字です。私の手許に在つた風呂敷、その他の布切は總て男爵の紋とH・Nの字を附けてありましたから。」蛭峰「兎も角、育兒院ではその兒を保管して育ててゐましたが、六ヶ月の後に或る年取つた女が、その布切の半分、即ち紋の片割とNの字の附いたのを持つて來てそれを證據にその兒を引取つたさうです。」段倉夫人はこれまで聞いて殆ど狂氣の状態である。

一六五 油断の出來ぬ強敵が

産落したまゝ死んだ事とのみ思ひ、二十年來寢覺の悪く感ぜられたが我兒が、地の底から掘出されて生返り、育兒院へ入れられてさうして何者にか連去られたと分つては驚かずには居られぬ。段倉夫人は全く狂氣の状態である。「え、私の兒が、生きてゐて育兒院からそのやうな老婆に連去られたと言ひますが、その老婆は何者です。その兒を何處へ連れて行つたでせう。その兒は今生きてゐませうか、生きてゐるならもう立派な年頃にもなつてゐませうのに。」と、疊み懸けて問うた。

蛭峰「夫人、貴女の胸に在る疑ひは、總て私の胸に在る疑ひです。貴女は今初めて知つて初めてお

疑ひなさるけれど私は凡そ二十年目としてそれ等の疑問に攻められぬ事は無いのです。」夫人「では今以てその疑問が解けませんか。」蛭峰「はい、その老婆か何者か、何のためにその児を引取つたか、いや、多分は他日私へ仇を返すために違ひ無いと思ひますから、その後はその老婆の行方を探るために殆ど全力を盡しました。けれど私のその事を聞知つたのが既に老婆の去つてから半年の餘も後でありましたため、何等の手懸りも得ませんでした。それでもその老婆かその児を抱いてシヤロンの方へ行き、或る宿屋に一泊した事までは分りましたが、その後は少しも分りません。私が検事の職權を利用してさへこれですから最早や全く尋ねる道の絶えたものと言ふ外はありません。」夫人は絶望の聲を發した。「何にしても貴方は、生きながら私の児を埋めました。埋める前に能く注意して下さればこのやうな事にはならなうでせうに。」

尤も千萬な恨みである。蛭峰「いや、私はその過ちのために出世の機會をさへ取逃してゐるのですから許して戴かねばなりません。それよりも夫人、差當り巖窟島伯爵が、どうしてこの秘密を知つてゐるかを突留めるのが大切でです。彼のやうな人の手にこの秘密を握つてゐるとすれば、どのやうな事になるかも知れません。」かう言はれて見れば、成程その兒に就ての疑問よりも巖窟島伯爵に就ての疑問が差迫つてゐるやうにも思はれる。「さう仰有ると、昨夜の晩餐にも、巖窟島伯爵はあれほどの珍味を人に勧めながら自分では、話に紛らせ何一品喰べぬやうにしておいででした。若しや客一同を毒害するのではあるまいかと、私は一しきりこのやうに思ひました。」蛭峰「けれど毒害の目的で

無かつたことは我々がこの通り少しも健康を損ねるので分つてゐますが、扱て分らぬは、何うして伯爵があつた庭に赤兒の死骸のあつた事を知つてゐたかの一條です。私から洩れたでないは無論ですが、若しや貴方の方からでも。」夫人「何で私から洩れませう。」蛭峰「貴方は誰にもあの事を、覺らるやうな言葉を吐いた事はありませんか。」夫人「決して、決してありません。」蛭峰は考へて、「若しや貴方は日記帳でも書いては居なされませんか。」夫人「私は自分の身が恥かしい程ですから、有つた事でも早く忘れてしまひたいと思ひます。何で日記などを附けますものか、それこそ若い頃から手帳一冊持つた事も無いのは私でせう。」

蛭峰はまた考へて、「しかし秘密といふものはどのやうな事から洩れて出るか殆ど想像にも餘る程のものです。どうかすると寢言から洩れる事さへあります。貴女は若しや寢言をいふ癖でもおありではありませんか。」夫人は躊躇もせず、「寢言をいふどころか夢も見ません。私が宛で子供のやうに熟睡する事は、貴方が覺えておいででせう。」と言つたが、流石に恥かしいところがあると見え、言葉と共に顔を赧めた。蛭峰は、「さうでした。」と答へたけれどこれも心の咎めるやうな小聲であつた。暫くして彼はまた言つた。「貴女からでもなく私からでもない」とすれば、伯爵の彼の赤兒を掘出して行つたコルシカ人の方からこの秘密を聞いたものと思ふ一方です。さうすれば伯爵が何者であるかといふ事が益々疑はしい。よしやその秘密を聞いたにしても故々その家まで買取つて、吾々を其處へ招き、さうして暗に吾々を窺めるやうに、その秘密を仄めかすが、決して故無事ではありますま

い。」夫人も合點のいつたやうに「成程、たゞの廻り合せと思つたのは、私の間違ひでしたかねえ。」
蛭峰「はいたゞの廻り合せでは無いのですから、それで私が今特に貴女へこの密會を願つたのです。
夫人、どうかこの後は伯爵を、疑はしい人だと思つて氣をお付け下さい。かう思つて氣を附ければあ
の人のする事は疑ふ可き廉ばかりです。この後とも何か看破る事が出来るかも知れません。伯爵をま
たと無い人のやうに思つてゐた夫人の夢は醒めた。「はい、心得ました。」
蛭峰「私も今から彼が何者
かといふ事を詮索に取懸ります。なに、彼のやうに素性身分を曖昧にしてゐたとて、私が調べれ
ば分らぬといふ事はありません。」殆ど奮然として言ひ切つた。若しこの時の蛭峰の顔を伯爵に見せ
たならば、伯爵とても全く油斷の出来ぬ強敵が現はれたと思ふだらう。

一六六 警視總監から

蛭峰が巖窟島伯爵の身分を疑ふことになつたとは、伯爵に取つて容易ならぬ次第ではあるまいか、
定めし彼蛭峰は熱心に伯爵の本性を詮索するに違ひない。
けれど伯爵も、數年の辛苦を以て、工風に工風を重ね、準備に準備を盡して、たゞの一步たりとも
踏損じのないやうに大事に取つて懸つてゐる仕事だから、蛭峰の一回や二回の詮索に脆く敗北する筈
もなからう。

既に蛭峰が段倉夫人と密會したその日の夕刻である。伯爵は家令春田路を呼び、「未だ彼は歸つて
來ぬか。」と聞いた。彼とは誰の事か知らぬけれど春田路は合點してゐる、「はい、唯今歸りました。伯
今朝から司法省の門前を嚴重に見張つてゐましたところ、大檢事は朝の九時半に出勤しました。」伯
爵「すると間もなく濃い覆面に顔を隠した婦人が——」春田路はこの推量の當つたに驚いた容子で、
「はい、その通りです。十時頃に司法省の門に入り、大檢事の官房を尋ねて行きました。」伯爵「さ
うしてその面會は。」春田路「凡そ一時間半ほど續いたと申します。」伯爵「ふむ一時間半ほどか、中
申話が長かつたと見えるな、それから。」春田路「それから婦人は司法省を出てメリン街まで歩み、
其處から辻馬車に乗り、蛭峰氏の私邸へ行き。」伯爵「ふむ所天と密會して置いて、その妻に疑はれ
ぬため歸途に妻の許を訪問したのか、餘程そのやうな事には慣れてゐるな。」春田路「こゝでも一時
間ほどを経て、今度は徒歩のまゝで段倉家へ行つたといひます。」伯爵「行つたのではない、歸つた
のだ。して大檢事の方は。」春田路「午後の二時頃に退出して警視廳へ立ち寄り、一時間ほど經て私
邸へ歸りました。」伯爵は別に驚く容子もない、たゞ呟いた。「分つた、警視廳を便りにするならば
まだ組し易い。」
かういつて春田路を退けた後でまた獨り考へてゐたが、このところへ、恰度、野西武之助が尋ねて
來た。彼は母と共に伯爵の彼の土曜日の晩餐會を避けて海濱へ保養に行つたのだ。今は晩餐が終つた
から歸つて來たのだ。彼が第一の言葉は、「伯爵、四日の間海濱で母と二人が貴方のお噂ばかりして

りました。」と言ふのであつた。武之助の母の事は伯爵が心を動かさずには聞き得ぬところである。殊に自分がその人の口に噂されたと聞いては、どうやら顔の色まで變るやうに見えた。けれど勉めて何氣無く粧ひ、「さうでしたか。」と軽く言ひて、更に二言三言海濱の景色などを聞いたが、武之助は取急ぐ容子で「伯爵、私は家へも寄らずに直に此方へ参つたのです。實は母が一夕宴會を開いて貴方をお招き申したいと言ひ、その日限までも私と二人で取極めましたから、それを貴方へお知らせ申すために。」伯爵は聊か當惑の色が見えた。武之助「今度こそはお断りにはなりませんまい。若しも差支があるとしても仰有れば、確に貴方は私の母をお避けなさるのです。」伯爵「何で貴方の母御を避けますものか、世間一般から貴婦人の鑑ともいふ程に敬はれてゐる方ですもの、しかし——」武之助「それそのしかしが餘計ではありませんか。」伯爵「しかし、どのやうな方々をお招きです。」武之助「巴里中の名高い人を五六十人招きます。段倉男や蛭峰氏を初めとして。」蛭峰の名は伯爵の躊躇を掻消した。彼に逢ふ機會とさへあらば決して取逃してはならぬ。伯爵「参りませう、日は何時です。」武之助「貴方の土曜日の晩餐會に因み、矢張り土曜日と極めました。來る第三の土曜日です。」伯爵は手帳を出して直にその日を書とめた。

* * * * *

伯爵は蛭峰を狙ふやうに蛭峰も無論油断なく伯爵を狙つてゐる。この翌日である蛭峰の手許へ監視總監から左の報告が届いた。

巖窟島伯爵と稱する人の巴里に來りし以前の事を知る人は絶えて無し。たゞ目下この國に來遊中と聞く英國の柳田卿は數年前より彼を知れりと察せらる。また何事かに於て彼と競争し彼と互に敵意を抱けるに似たり。外に一人シリ島の有名なる老僧暮内法師は折々彼の邸へ出入せりと聞く、この人も目下多分巴里に滞在せるならん。この兩人の宿所は取調べ中なり。」

これに引續き、今度は兩人の宿所や日頃の動作などを詳しく記した第二の報告書が届いた。すると間もなく蛭峰の邸から一人の特務巡查が出てサルピス街なる暮内法師の寓を指して行つた。

一六七 特務巡查

蛭峰の家から出たこの特務巡查の尋ねて行く暮内法師とは抑も何者であらう。凡そ十年ほど前からサルピス街に極小さい一軒の家を借り、これを清淨な僧庵のやうに造作し、一人の番人に守らせて置いて、一年に二度三度づゝ伊太利からこゝへ來て、短きは一二週間、長い時

は四五十日も逗留して去る法師がある。これが暮内法師なのだ。在庵の時は餘念も無く讀經に身を委ね、外へ出る時は或は貧民を尋ねて恵みを施し或は臨終の病者を慰めて往生の安樂を得させるなど、慈悲善根のみ積んでゐるので、今は上流の歸向をさへ得て歴々の家へ招かれて行く事も多い。

特務巡査がこの家を訪れたのは夜の八時頃であつた。一度は面會を拒絶せられたけれど、達て番人を説附け、一通の手紙を取次がせた。これは警視總監から法師に宛てたものである。多分は手紙の力だらう。特務は間もなく、法師の室に通される事になつた。

法師は餘り明るくない硝燈の下で、毎もの通り經文を開いてゐたが、特務の席に就くと見るが否や急に明りを掻立て、火屋に被せてある黒い傘を引上げ、特務の顔にパツと光の射すやうにした。特務は遽で、「いや法師、私は、この頃眼病のため強い光を嫌ひます。どうか硝燈は元のまゝに。」

といひつゝ、青い眼鏡を取出して目を隠した。法師はその請ひに應じ、再び硝燈を暗くしつゝ、「警視總監のお手紙では何かお取調べのためとありますが、探偵の方が眼病では嘘を御不自由でせう。」聊か冷かすやうな語氣を帯びてゐるけれどさうとも氣附かぬ、「いや私は、目を以てするやうな低い探偵ではなく、多く耳を以てする地位ですから別に不自由ありません。今夕の用向もその通りで、實は巖窟島伯爵といふ方の素性を伺ひたいのです。豫て貴方がお知り合の事と、種々の方面から分つてゐますので。」法師「はい、私は彼の父と懇意にしましたため幼い頃から彼を知つてゐますが、い

幼い頃からとの一語は一方ならずこの特務を満足させた。

これより特務の間ひ出す言葉に對し法師の一々答へたところを擧ぐれば、巖窟島伯爵は地中海なるマルタ島の造船者左近といふ者の息子なる事、十八九の時より航海に身を委ね、印度に行きて鑛山を發見し、大いなる身代を作りたる事、その後は矢張り東方に在りて慈善と道樂とに身を委ね、多く東方諸國の國王に愛せられて數多の勳章を持てる事、さうしてその後伊太利にて貴族の株を買ひ伯爵となり、またその領地として地中海中の巖窟島を手に入れ自ら巖窟島伯爵と稱するに至つた事などであつた。特務は最後に問うた。「したがこの頃、彼の伯爵がオーチウルの吹上小路へ別荘を買つたのは何のためでせう。」法師はこの問を待受けてゐたらしい、「それは直々伯爵にお問ひなさる外はありますまい。私ではたゞかうではないかといふ自分の推量を申上げるに止まります。」特務「いや推量でも宜しい伺ひませう。」法師「實は數年前に私が伯爵に向ひ、佛蘭西には狂人が多から、完全な瘋癲院を建てたなら大なる功德だらうといつた事があります。その時、伯爵は佛蘭西の何處へと聞きましたゆゑ、巴里の市外なら何處でも宜い。取分けてオーチウル邊が適當だらうと答へました。或はこの問答を覚えてゐて彼のところを買つたのではあるまいかと思ひます。」特務「では、瘋癲病院を建てるためだらうと思ひですわね。」法師「はい、私はさう推量します。」餘り當になつた返事ではない。特務は肝腎のところ、要領を得ぬのが如何にも残念らしい容子である。「貴方の外に誰か伯爵の事を能く知つた人はありませんか。」法師は充分考へて、「何うも思ひ當りません。」特務「英國の旅行家柳田卿とやらが伯爵と懇意なやうに聞きますが。」法師「どうです

か、先年伯爵が柳田卿と喧嘩の末、決闘した事は聞いてゐますが懇意に交つてゐるか否は知りませ
ん。」特務は却つて喜んだ。決闘もする程の敵ならば必ず大いに伯爵の暗所を探り知つてゐるだらう
と、さうしてこの法師には別れを告げた。

法師は特務を門口まで送つた後で、室に歸つて頬笑みつゝ呟いた。「太陽の光を恐れて夜中に來て、
またも硝燈の光を恐れて眼鏡を懸けるといふやうでは蛭峰先生、未だ姿を變へる初歩も知らぬ、この
暮内などは暮内と見られるに十餘年も苦勞したのだ。」

一六八 偽の動物

若し俳優が舞臺の上で早變りをするやうに、尋常の人が自由自在に姿を變へ忽ち老人となり、また
忽ち小兒となるやうな事が出來たら、嗚呼人を欺くに便利な事だらう。人を欺くのみでない萬事の掛
引に總て都合が好いだらう。

それだから孰れの國孰れの時代にも、多少はこの姿を變へるといふ事が行はれる。假鬘もあれば附
鬘もあり、顔を彩る紅白粉もあれば眼を隠す眼鏡も顔を隠す覆面もある。いはゞ總ての動物の中で
人間だけが最も姿を變へるに都合の好いやうな境遇や習慣を持つてゐるので、これが若し牛馬や犬猫
ならば常始終裸體でゐて身體の全部を露出して通るのだから到底充分に姿を變へる手段はない。これ
に就けても人間は偽りの動物である。同類同胞を欺す事ばかり考へてゐる。その中にもこの、姿を變
へるといふ技術が最も進歩してゐるは佛蘭西で、またその佛蘭西でも最もその技術の盛に行はれたは
恰度巖窟島伯爵の住んでゐた頃である。一千八百年代の上半期である。その頃の佛蘭西は陰謀の時代
と言はれ、顔を隠した宴會さへも行はれた。貴婦人でも淑女でも姿を變へるといふ術を多少は稽古せ
ぬ者無く、況して男子に至つては父子親戚の間にさへ姿を變へて欺き合つた話も多い。このやうな場
合だから取分けて巖窟島伯爵の如き、大の祕密を持つて大の陰謀を抱いてゐる人は大いにその術を研
究し學習したに違ひない。また實際姿を變へるために用ふる材料の製作も餘程行届いてゐた。大檢事
蛭峰さへも自分で特務巡査に化けるやうな事をした。凡そこれ等の事に就ては數多の考證が存してゐ
るけれどこゝに詳しく記すに及ぶまい。

特務巡査として暮内法師に逢つたけれど蛭峰は充分満足する程の結果を得なんだ。巖窟島伯爵が左
近といふ造船者の息子としても、何故オーチウルの彼の別莊を買つたり、どうしてその庭に曾て私生
兒の埋められた事を知つてゐるか、また何故にそれを蛭峰と段倉夫人へ思ひ出させるやうな狂言を演
じたのか、少しも分らぬ。何でも何等かの因縁でこの身を恨む者には違ひ無いと思ふけれど、マルタ
の造船者やその息子などに恨まれる覺えは毛程も無い。

去れば蛭峰の不安心は暮内法師に逢つた後も、逢はぬ以前に少しも變らぬ。いや、逢はぬ以前より
却つて怪しさが深くなつたといつても好い。最早かうなれば自分が職を奉じて以來、今までの履歴を

悉く取調べ、凡そ自分を恨みさうな人の名前だけ書抜いて、その中であれかこれかと取調べる外はない。さうだ。さうすれば或は思ひ當る事が出て来るかも知れぬ。かう思うて彼はこの翌日より古い書類を取調べに懸つた。勿、論官に就て以來三十幾年の間、多い日は五件にも十件にも關係し幾人幾十人の密告者、被嫌疑者、罪人、未決人に接したのだから、その書類だけでも容易の嵩では無い。文庫からも出れば筆筒からも出る。長持にも葛籠にもといふ状だ。たゞ取揃へるだけに時日が懸る。中々何時調べ終るといふ豫定は出来ぬ。

しかしこの取調べが、巖窟島伯爵に取つては何よりも恐ろしい。暮内法師に逢ふとか、柳田卿を訪ふとかいふやうな事は蛭峰が勉めれば勉めるだけ益々伯爵の術中に陥るのだから、伯爵は却つてこれを喜び、蛭峰の愚を嘲る種にしてゐるけれど、蛭峰自身が自身の越方を取調べるに至つては、伯爵の力で何とこれを妨げる事も出来ぬ。なほこれのみでない。蛭峰は自分で越方を取調べる外に、嚴重に警視總監に頼んで、伯爵の越方を、伊太利、希臘邊へまで問合させる事にした。眞に伯爵が、重なる恨みを蛭峰に復したいとならば、餘程急がねばならぬ。ぐづ／＼してゐては先を越される。しかし伯爵の仕事は、なるべく人の疑ひを引かぬやうに、自然の成行に任せて、その都度にその成行を利用しようといふ工夫も多いのだから、綱附けて引くやうには運び難い。

恰度蛭峰が右等の書類を大方取揃へ得た日の晩方である。これからその順序を付け、次に取調に着手しようと、大體の方略を定めてゐるところへ、柳田卿からの返辭が来た。これは兼て警視總監の名を以て、一名の特務巡查に面謁を與へて呉れと、卿の寓居へ言込んであつたに對し、卿から總監へ返辭したのを總監から蛭峰へ廻して来たのだ。夜の十時といへば太陽の光を恐れる蛭峰には最も好い時刻だ。彼は直に鏡に向つて自分の姿を變へるに着手し、二三時間も経て漸く思ふ通りの特務巡查には化果せた。さうして柳田卿の宿を指して家を出た。

一六九 その記念が鮮かです

果して蛭峰は伯爵の素性を見破る事になるだらうか、若し見破つてこの人が實は昔の團友太郎であるとなれば、それこそ伯爵の身に取つて、伯爵の計畫に取つて、由々しき大事である。蛭峰が恰度伯爵に匹敵する程の恐るべき男である事は今までの閱歷にも分つてゐる。一旦かうと思ひ詰めては、どのやうな事をしてとも通さずには置かぬ。どれほど陰險奸惡な手段でも決して施すに躊躇はせぬ。これを思ふと伯爵も誠に厄介な敵を持つたものだ。この男に讐を復さうなど、危険な大望を思ひ立つたものだ。

蛭峰自身はもう確信してゐる。どうしても伯爵はこの身に深い恨みを、懐く人に違ひないと、さうしてまたその素性も遠からず分るに違ひ無いと。

その分る手段の第一は警視廳に探偵せしめる事だ。第二は自分で探偵するに在る。第三は今までの

自分の扱つた事件の書類を悉く取調べる事だ。この手段をば、孰れを重し孰れを輕しともせず、彼は一樣に平均に力を盡してゐる。しかし、その實伯爵の身に取つて最も恐るべきは第三の手段に在るのだ、蛭峰は自分の履歴を繰返して古い書類を調べれば、團友太郎といふ名は餘り遠くもない中に出て来る筈だ。

實際、彼は書類を大方取揃へてしまつた。愈々これから調べるといふ一段になつて、恰度柳田卿といふに面會する道が開けたから、書類はそのまゝ疊んで置いて、自分がまたも警視廳の特務巡査に化け、サン・ジョルヂのホンテン街五番地と分つた卿の寓居へ、夜の十時頃に尋ねて行つた。

抑もこの卿は何者だらう。今までに既に讀者の見た通り、その名前は船乗新八や暮内法師などの名と共に屢々伯爵の口から出て伯爵に利用されてゐる。實際英國の貴族名鑑には幾等もある名前だ。柳田一家はその一族が幾個にも分れてゐて、政治家もあれば商業家もあり地主もあり、中には印度へ渡つたのも、濠洲へ移住したのも、旅行家も奇癖家も澤山ある。その中のどれだかは知らぬけれど、この柳田卿は十年ほど前から毎も替澤た遊山船に乗つて、佛蘭西の港などへは度々来る。さうして、件のホンテン街五番地を假寓として買入れたのは七八年前の事で、その後は巴里へ来る度に大抵はこゝへ立寄る容子である。今蛭峰が警視廳の報告に由つて知つてゐるところで見ると、この卿は非常に傲慢な我儘な人で、殊に英國の貴族に特別な大の國自慢である。英國の事といへば理を否に曲げて辯護して佛蘭西の事柄は憎むことが甚だしい。その一例を擧ぐれば、人に對して決して佛蘭西の言葉を使はぬ。この言葉を使ふと唾が粘つて口が臭くなると罵つてゐるけれど、その實この言葉を知らねば不自由だから来る度に内々で教師を雇ひ稽古してゐるのみならず、人が佛蘭西語で悪口でも言ふと直にその意味を合點して、事に托して決闘を吹懸けるといふ事である。中々危険な相手だから蛭峰はブル犬にでも近づくやうに充分用心してその家の戸を叩いた。

直に相接室へ通されたが、室一面に硝燈の光りが殆ど晝のやうに輝いてゐる。彼はまた目が悪いといふ口實で、硝燈の心を小さくして貰つた。さうして例の青い眼鏡を取出してゐるところへ、通常の人よりは聊か背の高く見える主人の卿が、英國風に反返つて入つて來た。服が悉く金釦であるところなど、愈々以て英風流だ。卿は先づ室中を見廻して眉を擡め、「いやこの室の暗い事は、えゝ佛蘭西の給仕は主人の油をまで儉約するからそれだから氣に食はぬ。」と勿論英語で傍若無人に呷いた。蛭峰も英語で、「いやこれは、私の目の性の悪いために暗くして戴いたのです。」と言ひつゝ眼鏡を懸けてしまつた。自分で姿を變るのが旨く無いと知つてゐるとこれだけの弱味がある。卿は嘲けるやうに、「おゝさうでしたか、それは失禮。なに英人の眼には、そのやうな眼病などはないのですから。」と自慢八分に言譯して更に、「何の御用か知りませんが、この室で佛蘭西語を使ふのは初めからお斷り申して置きますよ。」

その發音は英人の外は決して口に出ぬ口調である。蛭峰「致し方がありません、不束ながら英語で申しませう。」卿は大いに満足の容子で、「いや貴方は感心に英語が巧だ。全く我々英人の口調で

すこれならば私も何事をでも隔て無く申しませう。」蛭峰「はい、有難う存じます。實は今夕伺ひましたのは、兼てお知り合と聞く巖窟島伯爵の事を聞きたいと思ひまして。」卿はまた眉を擡めた、「え巖窟島伯爵の事——いやそれでは御免蒙ります。私に彼奴と、いや彼の伯爵と終天の敵ですから、私の言ふ事は決して公平ではありません。」蛭峰は却て感心した。大抵の人ならば、自分の敵の事だから、警視廳より聞かれては得たり畏しと悪し様に言立てるところなのに、流石は卑怯な事を嫌ふ英國の貴族である。「いゝ貴方が御自分で公平でないとお氣附ならば却つてそれだけ公平になる譯ですから、恭しく聞取ります。」卿は中々快活である、「でも私と彼との間は、公平に感ずる事の出来ぬ仕宜になつてゐるのです。既往七年間の間に三度決闘した程ですもの。」三度の決闘とは暮内法師も噂した、蛭峰「どういふ譯でさう度々決闘を。」伯「はい、彼が英國にゐる時私の親友の妻に無禮を加へたのが起りです。」親友の妻といふのは實は自分の妻だらう。さもなくばさう執念く三度までに闘ひはせぬと蛭峰は惻巧げに察した。「してその結果は。」卿「最初の一回は彼が勝ちまして私の胸へ窓を開けました。次のは矢張り同じ事ですが私が負けまして肩先を斬られたのです。三度目は、一昨年の事でその記憶がまだ鮮かです。これこの通りだ。」と言ひ、袖口を捲り上げて左の手の腕を示した。腕には薄暗い燈火にも歴々と赤い傷の痕が残つてゐる。蛭峰「おゝ、これは大變なお怪我ですねえ。」卿「はい三度とも負かされて黙つてゐられませうか、近々四度目の決闘を言込む積です。今日も私はグリセル先生の道場です時聞古して來ました。今度こそ彼に十々滅を刺して呉れます。」蛭峰は眞實に腹の中でこの人が十々滅を刺す事を祈つた。「御尤もです。」卿「ところが彼、實に卑怯ではありませんか。私が頻りに撃つ積古してゐるのを聞き、今度は叶はぬと臆したと見え、オーチウルの隅の方へ別荘を買ひ、この頃ではその中へ潜んでゐる容子です。」成程、この人は我儘と臆断とに過ぎて事の皮相より知る事は出来ぬのかと、蛭峰は聊か失望に想ひましたが、しかしこのやうな氣質ならば、知つてゐるだけは少しも包まずに言ふだらうとまた自分で取直した。

一七〇 肝腎の記憶の筋

これより蛭峰の間出す言葉に柳田卿はいと無遠慮に答へ始めたが、その答へは總て皮相の事のみであつた。しかし大體に於て暮内法師の言葉と大して違はなんだ。巖窟島伯爵がマルタ港の造船者の子であるから、船に乗つて多く東方の諸國を歴巡り、後に鑛山を發見した事なども同じである。たゞ法師の方はその鑛山が何處かといふ事を知らなんだが、柳田卿の方は明かにそれを指した。希臘のセサリーに在る金鑛で、伯爵がその國王に何か忠勤を盡したため褒美の意味でその採掘を許されたのだとの事である。成程、セサリーに意外の金脈が見附かつたといふ事は幾年前に蛭峰も聞及んだところである。最後に蛭峰は卿と伯爵と何うして知り合になつたと聞いたたら、それは伯が印度で英吉利の兵の一部を指揮してゐる頃、その軍隊へ伯爵が品物を賣込む

許可を願出た爲であるとして、その頃の伯爵が、たゞ單に一個の冒險者であつた状態などを誹謗しつゝ、更に轉じてその後、英吉利で逢つた事、またそれより後屢々卿の遊山船と伯爵の遊山船と地中海などで逢ふ事があるのに、その度毎に伯爵のが無禮に卿のを追抜いて行く事などを語り、いと悔しげに、「なあに私は造船者の息子ではありませんから、どうせ船の水滑りの好いやうに造る事は船大工の息子には叶ひませんわ。」と嘲つた。この容子で見ると、兎に角作り話では無いと蛭峰は思つた。

しかしこれだけのところで、別に参考になるやうな節は無い。といつてこの上に聞き出す事も無いから蛭峰が別れを告げようとする時、卿は更に誇るやうに、「このやうな譯ですから私は常に彼ら身へ隠し目附を付けてあります。彼がオーチウルの別荘を買つた事なども誰よりも先に知り、その公證人の名まで知つてゐます。何しろ彼は山師ですから何時法律に觸れるやうな事をするかも知れませんが。その時には直に警視廳へ知らせ上げます。」と非常な乘氣を示して言つた。蛭峰は兎も角も計らぬ手助けを得たといふやうな思ひで、「はい、どうかその節は警視廳監宛で親展書に認めてお出し下さい。」卿「その代りどうか貴方の方でも何か彼の事に付き、私へ知らせ差支のないやうな事があればその都度こゝへ来てお知らせ下さい。」蛭峰は口先ばかりの積りでなく、「はい、自分で來るか或は親展書でお知らせ申しませう。」これで別れたのは早や夜の十一時過ぎであつた。勿論この長い面會の間、柳田卿は一言も佛蘭西語を用ひなかつたが、若し用ひたならば或はその言

葉の癖に巖窟島伯爵と能く似てゐると蛭峰に思はれるところがあつたかも知れぬ。

夜更けて家に歸つたけれど、蛭峰は寝もせず朝まで彼の澤山の書類を調べてゐた。翌朝も出勤の刻限まで書齋を出なかつた。出勤して後は毎ものやうに公務を執り、終つて警視廳監の邸へ立寄つた。

さうして午後の五時頃に家に歸つた。歸るとまた書齋に閉ぢ籠つた。

かうまで彼が綿密に且つ熱心に過越方を調べてゐるとは巖窟島伯爵も知らぬであらう。この日は恰度、子爵野西次郎の邸に彼の伯爵の土曜日の晚餐會に因んだ夜宴の催さるゝ當日である。無論蛭峰は妻と共に案内を受けてゐる。けれど彼はその事を忘れた容子で、夜に入つてもなほ取調べてゐる。その進み方も中々早い。今は早や順を付けて積重ねた書類の中から、人の名を書抜いてゐる。それも既に罫紙へ二十枚程は書いてしまつたが、餘り魂を詰めたため、少しは氣が屈したのか、靜かに机から頭を上げて獨語した、「あゝもう少しで、俺が檢事補であつた時代だけが終る。次は檢事の時代へ移るのだ。」と言つて、今寫した最終の名前を見た。それは、「團友太郎。」と書いてある。恰度此處へ彼の妻が靜かに入つて來た。「おや貴方は未だお調べ物ですか、もう徐々にお支度をなさらねば、遅れますが——」彼は合點の行かぬやうに、「遅れるとは何か。」妻「あれ子爵野西家の宴會を貴方はお忘れですか。」蛭峰「おゝさうだつた。けれど私は調べ物のため今夜は行かれぬ。」妻「行くとの返辭を送つてありますのに、それに巖窟島伯爵も必ずおいでせうから、先夜の晚餐會のお禮も貴方から言つて頂かねば。」彼は、「おゝ巖窟島伯爵か。」と言つてなほも紙の上の名前を眺めつゝ、「急に頭痛が

するから來られぬ事になつたと、どうか和女が獨り行つて、然る可く斷つてくれ、もう少しで調物が一段落着くところだから手が離されぬ。今氣を抜くと、肝腎の記憶の筋が途切れるから。」到頭妻一人で野西家の宴會には行く事になつた。

一七一 死生疑

蛭峰の妻は終に夫の言葉に従つてこの室を去つた。蛭峰は、その去つたか去らぬかには氣の附かぬ容子である。彼はたゞ自分の寫し懸けたその野紙を見詰めてゐる。野紙の表面には、多くの人の名があつて、その一番の終りには、「團友太郎」とある。

彼の眼は切にこの「團友太郎」の名に注いでゐるけれども特別の意味があつてこれに注ぐ譯では無い。たゞ寫して來た最終の名であるために注ぐのだ。彼は暫らくして呟いた、「俺が大檢事になつて後に取扱つた分は、比較的に新しいから、未だその中の人が俺に忘れられてゐるだらうと安心して、俺の傍へ近寄る筈は無い。よしや近寄つても俺の方で思ひ出す。然るに彼の巖窟島伯爵に至つてはとうも思ひ出されぬ。何だか昔見たことのある顔のやうにも思つたけれど、心に浮ばぬ。これで見ると大分昔に違ひない。果して俺が取扱つた罪人の内だとすれば、どうも大檢事時代では無い、その前の檢事時代か、或は未だ前の檢事補時代、さうさ今朝からかう書抜いたこの中に在るかも知れぬ。或は更に近くこのページの内に無いとも限らぬて。」言葉と共にまたも、「團友太郎」の邊を眺めた。

危い哉岌々乎たりとはこの時の巖窟島伯爵の運命である。誰もさう危いとは氣が附かぬけれどこゝで若し蛭峰の心機がたゞ一轉すれば、いや一轉せずとも纒に微動して、團友太郎の昔の顔をでも思ひ出したなら、それが巖窟島伯爵の最後であるかも知れぬ。しかし、しかし、能く考へて見るとさう容易に考へ出す筈が無いかも知れぬ。それともあるかも知れぬ。何しろ何百と書列ねた名の中だから今は特に團友太郎の事をのみ思ひ出すといふ端緒が出て來ぬ。然り、今は出て來ぬけれど後には出て來るかも知れぬ。それに又この蛭峰と團友太郎との間柄を考へて見るのに、友太郎の方からいへば實に終天の恨を醸してもなほ足らぬほどの苦しみを受けてゐるけれど、これを蛭峰の方からいふと、彼が友太郎の顔を見たのは、二十年より先の以前で、しかも唯一日である。時間にすれば一時間に足るか足らずだ。自分の檢事補の室へ被告人として連れて入り簡単に取調べたのみである。假令その取調べ方が他の取調べ方と違つてゐたにせよ。またその取調べには空前絶後ともいふべき一種の事情が因つてゐたにもせよ。その被告の顔を今まで覚えてゐぬのは尤もである。たゞその事件は生涯忘れられぬ事情があつて今でも時々彼の心へ浮んで來るかも知れぬけれど、それがために友太郎の顔をまだまだ覚えてゐるといへば、それこそ却つて怪しむべきである。

彼はまた呟いた。「いやたゞこのやうに名を書きただけでは可い。名の上へ何か印を附けて區別せねば、さうだ明かに死んだ奴は再び現はれて來る筈が無いから用事は無い。死んだ奴には名の上へ、

『死』の字を附け、生きてゐる者には『生』の記を加へて置かう。しかし死んだと思つてもその好
活きてゐる奴もある。このやうな奴が最も怪しいて、ふむこのやうな奴には『疑』の字を附ければ實
い。譬へば死んだとなつてゐるけれど何處で死んだのか分らぬとか、或ところは分つてゐるが、そ
の死骸が分らぬとか、さうだどのやうなことでそのやうな奴が逃れてゐるかも知れぬ。」
中々彼の思想は綿密である。かう綿密に部を分けて調べて行けば何だか意外に早く分りさうにも思
はれる。併し彼の思想はこゝに至つてまた一入綿密になつた、「待てよ、巖窟島伯爵の年齢は幾歳だ。
一寸見れば三十四五にしか見えぬが、暮内法師や柳田卿のいつた履歴やその今の事どもから考へて
見ると四十位だらう。五十には決してならぬ。さうすると俺より年下の奴を調べれば好い。假に四十
とすれば、さうだ俺が検事補の頃調べたのなら十八九の少年であつたのだ。この割合でこの名前の
達の年齢を區別するが肝腎だ。宜しい、早く検事補時代だけを寫し終つて『生』『死』『疑』の三つの
印とその年齢とを分けて見よう。なあに彼奴がどのやうに隠したとて分らぬ筈があるものか、これ
が分らぬ程なら俺は蛭峰とはいはれぬ。大検事とはいはれぬ。」
驚く可き程の自信である。實にや自信の強き者は必ず目的を遂げ果せるといふか、その言葉が事實
となるのは何時だらう。果して今夜の中だらうか、或は明朝だらうか、兎も角も彼はこの決心に従つ
てまた残る部分を寫し初めた。凡そ二時間の後には早や検事補時代の分を寫し終り、さうして彼の三
つの印と年齢とをば初めの方から區別を附けに懸つた。けれど今夜の中は、その仕事が出来ぬ

運命に極つてゐたと見え、夜の十一時頃になつてどうしてもこの仕事から手を離さねばならぬやうな
一瞬事が湧いて起つた。その棟事は後に廻す。

* * * * *

しかし、この蛭峰より外に、蛭峰にも劣らぬほど切に伯爵の素性を氣にしてゐる者が一人ある。
或は伯爵に取つてはその方が一入恐る可きかも知れぬ。その方が蛭峰より先に伯爵の素性を見破る
かも知れぬ。或は既に見破つてゐるかも知れぬ。それを誰かといへば武之助の母なのだ。野西子爵夫
人露子なんだ。昔は西班牙村のお露といはれた。見る影も無い漁師の娘であつた。さうして團友太郎
の許嫁であつた。この露子夫人が初めて巖窟島伯爵に逢つた時の尋常ならぬ容子は既に記した通り
である。その後も伯爵の事をのみ氣にしてゐる事も讀者の知るところであらう。今夜催した夜會とて
も、多くの貴紳を招いたけれど、その眞の目的は或は一度巖窟島伯爵を招いて詳しく様子を見て取
りたいといふに在るのでは無からうか。どうも前後の事情がそのやうにも思はれる。けれど伯爵はさ
うとも思はぬ。約束の刻限にその邸を指して行つた。或は最早や伯爵が眞の素性を見破られるやう
な時節が到來してゐるのではあるまいか。何しろ伯爵のやうに名高くなれば、その名高さの増すと共
に、右からも左からもその素性を怪しむ人が増して来るやうな事がありはしまいか、誠に疑へば限
りも無いが、その疑ひは讀むに従ひ、自然に何方にか分つて行かう。」

露子夫人を會主とする子爵野西家の宴會に招かれた人達か非常の名譽と心得て我先に推懸けたところである。巖窟島伯爵がこれに臨んだのは、遅くも無かつたけれど早や客の來揃うた後であつた。

若し伯爵の知つてゐるだけこの家の主人野西次郎の素性が一般に知られてゐるなら、誰もこの宴會にさう急いで行かぬであらう。二十餘年前の彼は漁師村の若者であつた。看賣であつた。戀のために人を密訴密告するやうな卑劣な男であつた。今はそれが子爵といふ榮譽の上に陸軍の中將である。殊に希臘の戦争から歸つて以來は、大金持の一人にさへ數へられる。實に三拍子揃つた勢力家であるのだ。誠に變れば變るものと伯爵は多少の感慨を催しつゝその家に入つたが、見れば自分が第一に逢ひたいと目指して來た蛭峰大檢事の姿が見えぬ。彼とても我が身の舉動には目を離さぬ程に、今夜來ぬのは、何か深い仔細のあるためではなからうかと、流石寸刻の油斷もない鋭敏な心に早や不審の念を起し、直に一方の窓下にゐる蛭峰夫人の許に行き、「今夜蛭峰氏は如何なされました。」と問うた。夫人は頭痛のためと言ふやうに命ぜられては來たけれど、夫の勉強を誇りたくもある、「貴方だから申しますが、二十餘年前初めて職に就いた時からの書類を集めて綿密に取調べて居りますよ。何でも世間を驚かせるやうな大事件が始まり懸けてゐるだらうと思ひます。愈々その事件が法廷へ現はれる事にもなれば第一に貴方へ、私から傍聴券をお送り申します。」伯爵はたゞ黙

禮してこゝを去つた。蛭峰が何のために二十餘年前からの書類を調るか大抵は見當が附いたやうだ。

それがためだか否は知らねどこれより伯爵は何と無く氣懸りの體で總ての舉動が沈み勝に見えた。それと見て第一に慰めに來たのが森江大尉で、次に來たのが當家の子息武之助である。大尉は頻りに伯爵の好む馬の事を語り出で近々共に遠乗りをなさらぬかなどと勸めてゐたが、武之助の方は方面を變へ、「伯爵、貴方と私との舊知己が愈々この巴里へ歸つて來る事になりました。」伯爵「え、舊知己とは。」武之助「私が貴方を尊敬すると同じほど矢張り貴方を尊敬してゐる毛腰安雄ですよ。彼の手紙が今朝着きました。彼は手紙より一日後れて羅馬を出發すると申します。」また蛭峰夫人もこゝへ來た。「はい安雄さんは私共へもその通りの手紙をお寄越しでした。巴里へ着けば直に私共の華子と結婚の式を挙げますから、その時は伯爵も是非御臨席を願ひます。」この言葉を聞いて青くなつたは森江大尉である。彼は座にも堪へぬ狀で伯爵を捨て去つた。眞に華子と安雄との婚禮がさうまで差迫つたとは彼に取つて世界絶滅の期が近づいたやうなものだらう。伯爵も大方は森江大尉の事情を察したらしかつた。

このやうな事で益々伯爵は陰氣になつたが、その中に幾番の舞踏などもありました食事も始まつた。來客一同は興に入つて、殊更伯爵に目を留める人も無いやうに見えたが、たゞ今夜の會主露子夫人のみはさうでなかつた。初めて伯爵の入つて來た抑もの初めからこの夫人の眼は、それとは無しに伯爵の身に注いでゐたが、食事の半頃になると、宛も堪へ兼ねた事のあるやうに我が子武之助を一方に

呼び聲を潜めて、「其方は氣が附いたか知らぬけれど、今夜伯爵は何の珍味にも箸をお取なさらぬ容子だ。」武之助「それはお腹が満ちたためせう。」露子「このやうな夜會へ来るのにお腹を満ちて来る方も無いものだ。其方は何とも思ふまいけれど、女といふものは詰らぬ事でも氣に懸るものだから、どうか其方が伯爵へ、何か召上るやうに勧めて見てお呉れ。」武之助「何が貴女はそのやうな氣になりますか。」露子「なに。伯爵は兼てからこの家で物を喫べたのを避けていらつしやるやうだもの、私の氣の迷ひかも知らぬけれど、敵の家で物を喫べれば神の怒りに觸れるなどといふ宗教もあるし、この家へ来るお客が物を喫べぬとは。」武之助「なにそのやうな事がありますものか、伯爵は初めて巴里へおいでの時、私と共に食卓へ着いたではありませんか。」露子「いゝえ、其方の家と父次郎の家とは、同じ家でも棟が違ひます。お宗旨で言ふのは敵と同じ棟の下で鹽を食べるなど言ふのです。」武之助は軽く笑ひ、「それでは伯爵がお父さんを敵と思ふのですね。そのやうな事がありますものか。」露子「それでも先づ勧めて見てお呉れ。」武之助「勧めたとしてお腹が満ちければ誰だつて喫べませんよ、しかし勧めて見ませうよ。」言ひ捨て武之助は立去つた。

なほも露子夫人は此方より、伯爵の方をのみ眺めてゐると、纏て武之助が、一皿の珍味を特に伯爵の前に置いて勧めたやうである。けれど伯爵が嚴重に拒んでゐる状も見えた。露子夫人は絶望の嘆息と共に、「あゝ、この疑ひが間違ひであれば好いのに。」といひ、と悲しく呟いて、立つてる足の震へるやうに踰限いた。その中に食事も終り、客の幾人は涙を流す月を踏んで散る心と見え、打散れて

庭に出た。こゝぞと露子夫人は心を固めた容子で靜かに伯爵の傍に寄り、「さあ伯爵、御一繼に庭へ出ませう。どうか私の手をお扶き下さい。」とて伯爵の腕を求めた。伯爵は不意に恐るべきものにも逢つたやうに驚いて此方へ向き、暫し夫人の顔を眺めた末、漸くに心を鎮め得たと見え「はい」とのみ短く答へて腕を與へた。斯様に繼り、斯様に繼らせたのは二十年前の夢である。繼る手の心持繼らせる腕の感じは、昔に比べてどのやうだらう。二人ともに一種名狀の出来ぬ恐れに震へる身を震へまいと、たゞそれのみが必死の思ひであつた。

一七三 益 裁 架

「この疑ひが間違ひであれば好いのに」と露子夫人が心配するその疑ひの何であるかは知らぬけれど兎も角も巖窟島伯爵がこの家で何一つ喫べぬより起つた疑ひに違ひない。夫人が強ひて伯爵の腕を求めそれに繼つて震へく伯爵を庭の面に誘ひ出したのも全くその疑ひを晴らしたためなんだらう。繼るといふは名のみにて、實は巖窟島伯爵の腕にたゞ露子夫人の指先が一寸障つてゐるに過ぎぬ。二十餘年の昔手を引き手を引かれたとは大層な違ひといふもの、しかしこれだけが兩人の精一杯であるのだ。この上深く繼ることも繼らせることも出来ぬ。纏て二人は益裁架の方に行つた。こゝには他の客も來てゐるから、勿論密會といふやうな状ではない。たゞ何方から言葉を送るかと思ふ方ともに

待つ容子で殆ど果しが無く見えたが、やうくや夫人の方が口を開いた。「秋は月も冴え果物なども熟
しまして、春よりも好い季候ですねえ。」異存をいふべき言葉でないから伯爵はたゞ、「はい。」と答
へた。確に嚴重な用心の状が見える。夫人「御覽なさい。この熟した秋葡萄が、月影に、宛で地に描
いた繪のやうではありませんか。」伯爵が、「如何にも。」と答へて地を見る間に、夫人は早くも露の
垂るやうな秋葡萄の一房を、垂れた蔓から摘み取りて、「貴方のお愛しなさる東方の果物には及ばぬ
かも知れませんが、これは故々アルジルから取寄せた種ですからこの國には餘り類が無いと言ひ、
皆人様がお褒めになります一つ召上つて品定めを願ひます。」とて伯爵に差出した。來客の身に取つ
てこれほど手厚い持做がまたとあらうか。主人自ら珍重する盆栽の果物を摘み、手づから差出して、
しかも夫人自らは否と言はせぬやうに早やその一粒を啄んでゐる。誰とてこの場合にこれを斷るこ
とは出来ぬ。伯爵は靜かに顔を上げた。照添ふ月にその色の青いことは葡萄の葉にも優るかと思はれ
る。誠に伯爵の身に取つては命の瀬戸ともいふ程の試験である。しかし伯爵は遂に言うた、「いえ
夫人、私は葡萄は喫べません。」

若し日頃の伯爵ならば同じ斷るにも少しは愛嬌のある言ひ廻しをするだらうが、今は心に、言葉を
飾るだけの餘裕が無いのだ。夫人はこの言葉に泣出さんばかりに嘆息したが、直にまた品を替へ「で
はこの桃を召上つて戴きませう。」とて隣に熟した桃の實を摘まうとした。伯爵は遠てるやうに「い
いえ夫人、私は果物は喫べません。」夫人が、「おやこれもですか。」と言つた聲は全く泣聲を強ひ
て壓したやうな音であつた。さうして更に、「本統に貴方は、私の折角の願ひを。」と、半恨の
やうに、また半笑ひに紛らせるやうに、言繕はうとしたけれど後の句は、肩より外へは出なんだ。
夫人の辛さも全く伯爵の辛さに劣らぬのだ。

暫し無言とはなつてまた他の方へ歩を轉じたが夫人はなほ彼の葡萄の房を一方の手に持つてゐる。
さうして程合を見て、今度は雑話のやうに、「伯爵、貴方は大層旅もなされたまた艱難もなされたやう
に聞きますが。」伯爵「はい、随分悲しいことを経て來ました。」夫人「さうして、今ではもう、喜ば
しいことばかりの御身分にお成りなされて——」伯爵「はい誰も私の嘆くのを聞かぬから喜ばしい
と言ふのでせう。」何と無く苦い意味が籠つてゐる。夫人「したが、貴方はお一人ですか、奥方は。」
伯爵は驚いたやうに、「え、奥方、私にそのやうな者はありません。」夫人「でも劇場へは毎も希臘
風の美しい御婦人をお連れだと聞きますが。」伯爵「彼れは私が土耳其で買取つた女奴隷です。餘
り可哀さうな身の上だと思ひましたので。」夫人は問へるだけ問うて見る氣になつたらしい。「では、
一人も親身の方がありませんか。」伯爵「はい一人も。」夫人「父上も母御も。」伯爵「今
はありません。」夫人「お子様も、兄弟姉妹も。」伯爵「はい何にも。」夫人「それでまあ、何を樂し
みにこの世をお過しなされますか。」
何を樂しみに、嗚呼何を樂しみに、樂しみのために生きてゐる身ではない。たゞ恨といふ一念の、
晴らさねばならぬものがあるがために、人も分らぬこの暗い年月を送つてゐるのだ。我が名にあらぬ名

を稱へ、身分にあらぬ身分を作り、殆ど人とも言はれぬ人となつて、人に怪しまれ疑はれつゝの艱難辛苦、抑も誰のために起つた事ぞ、今問ふ人は、事の起りとはなつたその人である。これを思ふと兼ねて心を鐵石に鍛ひ固め如何なる情にも動かされぬと覺悟してゐる伯爵も異様に感慨の昂ぶつて殆ど自分で制することが出来ぬ。「はい夫人、このやうな一人者となつたのも自分で求めてのことではありません。曾てこの女こそはと思ふ一少女もありましたけれど——」と心の底を語るやうな語を發した。夫人は恐ろしい幽霊にでも逢つたやうに、一步背後に退いた。

一七四 氣味悪く聞える節

幽霊にでも逢つたやうに、露子夫人は一足背後へ退いたけれど、その後を聞かすには能う居ぬ。氣を取り直してまた進み出で、「それからその女はどうしましたか。」

伯爵は聲の震へるを隠さんとてか。いと沈みたる小音にて、「はい、私と結婚するばかりになりましたが、折悪くその時に軍が起り、私は軍隊に運び去られました。」夫人「さうして。」伯爵「それでも軍の終るまでその女が多分は私を待つて居ることと思ひ、軍が濟むと直にマルタへ歸つて來ましたが、それは私の空願みでした。その女は早や他人の妻となつて居ました。」言ひ懸けて餘り自分の言葉を熱心過ぎると思つてか、更に伯爵は異様に打笑ひ、「は、は、は、は、幾等も世間には類の

ある話ですよ。併しその頃は私もまだ年が若くて、餘り正直過ぎたものですから、それきり妻帯といふ念を絶ち、到頭今まで獨身で來ましたのです。思へば愚な話ですよ。」言終つてまた笑つた。

夫人も成る可くは何氣なく笑つて調子を合せたい。けれど、心にそのやうな餘裕がない。たゞ縁に、「その後、貴方はその女に逢ふ折がありましたか。」と問ふが辛とであつた。伯爵「それきり逢ひませ

ん。」夫人「その女は今でもマルタに居るのですか。」伯爵「はい人の妻となつて、或は母となつて、

多分無事で居ることです。」夫人「でも貴方はまだその女を恨みますか、それとも心の中で、その

不實を——その罪を——許してお遣りになりましたか。」伯爵「はい、その後、世の中を經廻つ

て人情とは何のやうなものかといふことを多少は知り、その女だけは許しました。」夫人「その女だ

けですか、女を貴方から引離した人達はまだ許して遣らぬのですか。」伯爵は曖昧に、「今更恨んだと

て追ひつきませんよ。」

露子夫人はこの返辭を何と悟つたことか、最早や伯爵の心に何の恨みも残つて居ぬと思つたやうか、又も先程の葡萄を差出し、「伯爵、何うか一つお上り下さい。」伯爵は、先程答へたと同じやうに、

「いゝえ夫人、私は葡萄を喫べません。」たゞ簡短な一句であるけれど決して恨みを忘れた人の言葉ではない。何處にか氣味悪く聞える節がある。夫人は絶望に堪へぬやうに、口の中で、「えゝ氣強いにも程がある。」と呟いて、その葡萄を傍の叢に投棄したが、恰度此處へ武之助が走つて來たためこの上の問答が出来なくなつた。

「阿母さん、阿母さん。大變な不幸が出来ましたよ。」と言ふのが彼の遠しい言葉であつた。何のやうな場合でも「不幸」といふ語は決して爽かには耳へ響かぬ。露子夫人は驚いて、「え不幸とは。」武之助「今、蛭峰大檢事が故々夫人と華子嬢とをこの家へ迎へに來ましたかね。」露子夫人「何うして。」武之助「何事だか知りませんが、急に變つた事が出来たと見え、大檢事の顔色が眞青でした。さうして何か夫人の耳に細語くと、傍に居た華子嬢が驚いて氣絶しました。座敷は大騒ぎでした。尤も直に手當して嬢は正氣に返りました故、蛭峰氏が夫人と共に馬車へ乗せもう連れて歸りましたけれど、外のお客がこれがために何だか興か醒めたやうですから、それで私が貴女を探しに來たのです。」夫人は遽て座敷に歸つた。さうして再び客の興を引立たせようと勉めたけれど、夫人自らの心が引立つて居ぬためか、充分には成功せずこの夜會は終つた。尤も伯爵は終らぬ先に歸り去つた。

* * * * *

この話はこれだけに置いて、少し長いかも知れぬけれど「蛭峰家」と題を置き、これから數回の間蛭峰の家の事を述べねばならぬ。

一七五 蛭峰家 (一)

扱も蛭峰は、何うしても伯爵の素性を見破るために、夜の更くるまで古い書類を調べ、書抜いた名前を「生」「死」「疑」の三點に記し分けて居たが、彼はまた何か思ひ出したやうに獨語した。「ああ、職務の上で敵を作つたのでない。俺はその外にも敵を作つたことが數々ある。若し職務上關係した人間を取り調べて分らぬならば、更に祕密の方面を調べねばならぬ。」と呟いた。祕密の方面とは、言ふまでもなく「戀」といふ曲者である、彼は世間幾多の好色家と同じく、その半生を、怪しげなる祕密なる「戀」といふことに委ねた男である。その頃の佛蘭西の紳士一般の風としては怪しむに足らぬやうなものゝ、それがために思ひも寄らぬ敵を作つた事は定めし少し數ではあるまい。その時にこそは、血氣の勇に任せ、敵を作るを恐ろしいとも思はずに居たけれど、今のやうに自分を恨む人の名を取調べる場合となつては、區域の廣いだけに益々面倒になつて來るのだ。それは扱て置き彼が呟き終るところへ、何者か、けたましく戸を開き、泣聲と共に室の中へ入つて來た。兼て誰をも通さぬやうに支關の番を嚴重にしてあるのにと蛭峰は怪しみつゝ、振向けば、硝燈の光に照されて蛭峰の背後に立てるは、年七十にも近からうと思はれる一婦人である。蛭峰は狼狽の狀で書類を疊みつゝ「おや阿母さん。」と打叫べんた。

一七六 蛭峰家(二)

蛭峰に「阿母さん」と呼ばれるこの老婦人は何者だらう。他でもない、蛭峰の先妻禮子の母なる米良田伯爵夫人である。

この老夫人は夫伯爵とともに、久しい前に巴里の本邸を立ち、馬耳塞の別荘に行き、何時歸るとも極つては居なんだのに、突然、こゝへ現れたから、蛭峰の驚くも無理はない。「え阿母さんは何うしてこゝへ、阿父さんも御一緒ですか。」老夫人は俄破と蛭峰の前に泣伏し、「聞いておくれ重輔、阿父さんは——私の夫は——あの米良田伯は、巴里へ来る途中の宿屋で亡くなりました。」蛭峰は目を見張つた、「え、米良田伯がお亡くなり、それは何うして。」老夫人は涙とともに、「はい、數日前から少し勝れぬ御容子であつたけれど、其方から華子の婚禮が近よつたとの手紙が来たため、その婚禮の間に合ふやうにと、私と共に馬耳塞を出たが、途中の宿屋で晝食した後、兼ての持薬を召上つたところ、間もなく眼けを催したと仰有り、少しの間とてお寝みなされたが、そのまゝ目の覺めぬ事となりました。」蛭峰「さうして醫者には。」老夫人「はい、直に土地の醫者を招いて見せました。多分は腦卒中だらうと診断はしたけれど、もう絆切れた後であつた。勿論、葬式はこの巴里でせねばならぬ故、御遺骸は、棺に收め、後から從者が持つて來ます。多分は明後日あたり着くだらう。私は葬式

の用意もあり且つは其方の娘華子が伯の相續人と極つて居るから直に華子にも逢はねばならず、晝夜無しに馬車を急がせ、遺骸より先にこの通り歸つて來ました。さあ、華子は何處に居る、華子をこれへ呼んでおくれ。」

實に思ひ設けぬ事變である。外の事のためなら到底書類の取調べを止めぬ蛭峰だけれど、これには止めぬといふ譯に行かぬ。「少しお待ち下さい、阿母さん。華子は母と共に、一寸外出したところですから、直に私が呼んで來ます。」眞逆にこの悲しみの中で、夜會に行つて居るとは言ひ得ぬ、老夫人は聊か聞答めるやうに、「え、母と一緒に、華子の母は亡くなつた禮子です。繼母は決して母ではありませんせん。」この中でさへ斯様に異存を唱へるところを見れば、何れほどこの老夫人と蛭峰の今の妻と不和合かといふことも推量られる。

蛭峰は言葉の端を言争ふ場合でないから無言で書類を悉く抽斗に入れ、錠を卸し、さうして馬車を命じて自分で野西家へ迎へに行つた。野西家で華子が何のやうに驚いたかは既に前回の武之助の言葉に見えた通りである。間もなく華子と繼母と蛭峰と、三人一緒の馬車で歸つて來たが、老夫人はさなきだに衰へた身體を以て生涯にまたと無い不幸を受け、その上三晝夜を休息せず急いで上京したため、この家へ着いて早や氣も弛んだと見え、蛭峰の居間で給使の持つて來た飲物にさへ手を觸れず、長椅子の上に居眠つて居る。さうして三人の物音を聞き、目を開いて飛起きたけれど最早疲れに勝つ氣力が無い。たゞ華子の手を取つて、「早く婚禮して曾孫の顔を見せておくれ。」と言ひ、暫く

して又、「和女の夫になる手腰安雄といふは昔暗殺せられた手腰將軍の息子だと言ふから、萬一和女の死んだ後で直に後妻を迎へるやうな不實な紳士ではないだらう。」と甚く蛭峰に當附けた語を吐くのみである。蛭峰の妻は餘程不興の體だけれど、陽に立腹する場合でないと思つてか、穩かに、「阿母さん、貴女は不意の御不幸に、餘り身體をお使ひ過ぎになりました。大凡の容子は私も蛭峰から聞いて知りましたが嘸ぞ御愁傷な事せう。この上心配をお続けなすつてはお身體に障りますから今夜は直にお寝みなさい。また明朝色々伺ひませう。」とて手を取つた。老夫人は、また忌々しいといふやうに目を開き、「なに、私の世話は孫の華子がするから好いよ。華子と女には色々話がある。さあ私を外の室に連れて行つておくれ。」

華子は蛭峰から目配せられ、そのまゝ老夫人の手を取つて、これを二階の寢室へ連れて行つた。老夫人は身を支へる力も無い體で、直に寢臺には就いたけれど、あまり疲れ過ぎた神經には、本統の眠りは來ぬ。稍久しく華子の手を握つたまゝ、「早く安雄と婚禮して、この老婆に安心させておくれ」との事をのみ、殆ど囁言のやうに繰返した。華子は、「安雄と婚禮」と、言はれる毎に、身を切られるよりも辛い。けれど、この方さへこれほどに望まれるからは最早や逃れる路は無いかと、詮方なく逆らひも得ずに聞いて居るうち、何うやら老夫人が本統に眠つたらしく見えたのでこゝを去つた。

この翌朝である。再び華子がこの寢室に入つて見ると、老夫人は容易ならぬ容體である。昨夜はた

だ疲れのためとのみ思はれたのに今朝はさうでない。熱があつて全くの病人となり、中々起出る容子もない。華子はその顔に顔を寄せて、「祖母さん何か召上りたくはありませんか。」老夫人は病體に似ぬ決然たる聲で、「他の人へは言はぬけれど和女だから言ふが、私はもう何にも喫べぬ。喫べれば毒殺せられます。」華子は根も無い囁言のやうに思ひ、「そのやうな事がありますものか。」老夫人「いえ、私は昨夜、夢だらうと思つたが、夢でなかつた。誰だかそつとこの室へ忍び入り、枕許の盃を何うかして立去つたよ。暫くして私はその盃で水を飲んだが、その時から咽喉が焦げつくやうな氣持がします。何でも盃へ毒を垂らして立去つたに違ひない。けれどこのやうな事は誰にも話さず居ておくれ。」餘り恐ろしい言葉だから華子は顔の色も變つたけれど、また病氣のための根無し言と思ひ做し、そのまゝ室を出て醫師を迎へた。

一七七 蛭峰家(三)

迎へに應じて來た醫師は、兼てこの蛭峰家へ十年以上も出入する老國手で、有國博士とて、その道には中々名譽の高い人である。この人直に華子と共に米良田伯爵夫人の寢室に行き診察したが、病の徴候に合點の行かぬところがある容子で、頻りに老夫人の食物の事などを聞いた。併し老夫人は先刻華子に話した毒藥の疑ひなどは少しもこの國手には洩らさなんだ。

診察を終へて國手はなほも不審の眉を擡めてこの室を出で、華子に向つて、「暫し貴女の阿父さんにお目に掛りたく思ひます。」と、いと重々しい調子で言つた。何か容易ならぬ疑ひのある事は、その語調でも察せられる。華子は直ぐにその意に従ひ、父蛭峰の室へ馳せて行つて、さうして戸を開いて見ると、父は年若い一紳士と慇懃に何事かを相談して居て、直に華子を招き寄せ、「この方が毛脛安雄君である。毛脛さん、これが娘華子です。」と、引合せた。華子はハツと思ふとともに、顔を眞紅に染做した。これが父の定めた我が夫である。夫たるべき人である。この人が羅馬を立つて歸國の途に上つたことは、既に昨夜も聞いたけれど、早や歸着して、しかもこの室に居ようとは思ひ設けぬところである。日頃行儀作法には正しい華子だけれど、今は一語をも發し得ぬ。全く身の破滅する時が来たやうに感じた。さうして、たゞ纒に父の耳へ、「阿父さん、有國國手が貴方を待つて居ます。」と、細語いたまふ、行儀作法にも構はず、逃げるやうに馳出した後に蛭峰は安雄に對し、娘の無作法が極り悪いやうに、「あの通り未だほんの子供だから致し方ありません。何うぞお氣永く充分面倒を見て遣つて戴きます。」と言つた。しかし、安雄は華子が一方ならず羞らうた状を決して憎くは思はなんだ。實際、誰とて華子を見て、しかもその顔の眞紅に染做さるゝを見て、憎くいなど思ふことが出来るものか。

蛭峰はやがて安雄に暫しと斷つて座を立ち、さうして有國國手の待つて居る室へ来た。國手は口數を利かぬ。たゞ簡短に、「若しやこの家に貌律矢を蓄へてありませんか。」と問うた。貌律矢とはストリキニーネと並び稱せられる程の劇薬で、曾て巖窟島伯爵がこの家の令夫人にその作用などを説明した事もある。蛭峰はたゞその名を聞くだけにすら驚いて、「何でそのやうな毒薬をば素人の家に蓄へてありませんか。」と斷言した。國手はなほも合點の行かぬ状で、「若しや私から野々内彈正に與へてある薬がこの家へ紛れ込むやうな事はありませんか。」蛭峰は怪しむ如くに、「父彈正の服薬には貌律矢を用ひてあるのですか。」國手は自分の職業上の事を、素人に問はれるを好まぬ。「或は用ひてあるかも知れませんが。或は用ひてないかも知れません。それよりも私の今の間にお返辭を願ひます。」大檢事でも醫者の前では醫者の權威に従はねばならぬ。「はい父彈正の居る隱居所とこの家は御存じの通り廊下續きではありますけれど、父の服薬が此方へ紛れ込むといふやうな恐れは少しもありません。ですが國手、何でそのやうな事をお問ひになりますか。」國手は、「未だこの間に返辭すべき時ではありません。」と言切り、そのまゝなほも訝かしく考へつゝ立去つた。

それは扱て置き、華子は安雄の前から逃出すが否や、國手の居る室へも來ずに、直に祖母米良田伯爵夫人の寢室に驅入り、「何うしませう、祖母さん。」とて、その枕邊に泣伏すやうに身を投げた。老夫人は先程に比べると餘程心も落着いて居て、華子のこの状に打驚き、「この子はまあ、何をそのやうに遽しう。」華子「いゝゝえ祖母さん、私は少しも知りませんでしたか、毛脛安雄さんが、早や羅馬から歸つたと見え、今阿父さんの室へ來て居ます。」老夫人は却つて安心の容子である。「それで安心だ、私も何うか安雄さんに逢ひ、出来る事なら今日の中にも婚禮の約束を取極め、その約定

書へ、和女と安雄さんとに調印させるところを見たい。」華子は助け船に水の洩れ入るやうな思ひである。「婚姻として、今そのやうな事が出来すものか、未だ祖父さんのお葬式さへ済まぬではありませんか。何うか祖父さんのお葬式のお済むまででも婚禮の事を言はぬやうに、え祖母さん貴女のお力で延ばすやうにして下さい。」一週間でも一日でも延ばしたいのである。延ばしたとて素より逃れる道は無いけれど、延ばす中には何うかなるだらうといふやうな氣のするものが、世間知らずの若い者の常である。老夫人は飛んでもないといふ面持で、「いゝえ祖父さんもこの婚禮には大の賛成で、早く取極めたいとのみ言つておいでだつたから、儀式は兎も角も、調印だけは葬式の前に済まさればなりません。調印さへせば、夫婦も同然で、裁判を経ねば取消すといふ事が出来ぬから、何が何でも調印は今日の内、それが出来ずは明日は必ず——」

華子は後の言葉を聞く力がない。今日か明日より延びぬ事にまで極つたとは、何といふ情ないことだらうと、たゞ絶望に前後も忘れ、またこゝを馳せて出た。さうして行く先は何處だらう。毎も獨りで心の鬱を晴らしに行く裏庭の深い木蔭である。樹の葉より外に聞く人の無いところで、泣きたいだけ泣きでもすれば、幾等か心も鎮まるのだ。かう思うて直に裏庭へ迷ひ入つたが、こゝには、たゞ堀一重隔てた先に、これも同じ思ひの森江大尉が佇んで居る。堀の隙から華子の姿を見るより早く、「もし華子さん、華子さん。」華子「おゝ森江さんですか、ようこゝに居て下さつた。」と、馳せ寄る状の嬉しさ、このやうな二人を引分けるとは眞に罪である。

一七八 蛭峰家(四)

華子は我が名を呼ぶ森江大尉の聲に、嬉しげに堀の際には走寄つたが、垣一重隔てた此方と彼方で何のやうな話をする事やら。

抑々森江大尉は昨夜野西家の宴會で、華子の許婚の夫毛屋安雄が早や羅馬を立つて歸國の途に上つたやうに聞き、最早や全く華子を失はねばならぬ時が來たと思ひ、死刑の宣告をでも受けた人のやうに落膽して歸宅したが、それより一夜一夜を考へ明したけれど、到底華子を失うてこの世に生きて居る心は出ぬ。眞に命よりも深い愛が心の底に根ざして居るものと見える。しかしまた思へば、華子とて心は此の身と同じ事にて、この身が華子を失ふの辛さと同じく華子もこの身に別れては生存らへる氣もせぬであらう。このやうな間であるのに、何も浮世の義理に隔てられ、辛い思ひをするに及ばぬ。互に心を合せて他國へ飄落すれば好いことだと、身分をも名譽をも打忘れ、終に飄落を華子に勧めるといふ氣になつて、今朝は早くから此處に佇み、華子の姿の見ゆるのを待つて居たのだ。若しも華子が愛よりも義理を重しとも、そのやうな短慮は出来ぬと言へば、その時には自殺するまでのこと、自殺はしてもそれでもなほ華子を斷念めることは出来ぬから、自殺よりは何うしても華子を説伏せねばならぬと、一心凝り固つた狀であつた。

このやうな間であるから、二人は垣一重隔て、泣きもした嘆きもした。けれど親を捨て、義理を捨て、飄落するといふことは、深窓の中に育つた華子に取つては餘り恐ろし過ぎる事柄である。さればとて、これを否と言へば、森江大尉は死ぬのだ。大尉を殺すか、家を棄てるかといふ間に扱まれば、眞逆に大尉を殺す方に決心することは出来ぬ。況してその身とても大尉が死んでは生きて居ることが出来ぬ。詰り二個の命が無くなるといふ場合である。華子は終に大尉の意に従ふ方に決した。勿論、かゝる年頃で、義理といふ事をさう深く齧分けることは出来ず、却つて愛といふことに氣も心も眩んでしつたのである。併しそれも有るだけの故障を言盡し、出るだけの涙をも流し盡した後であつた。さうして愈々二人の極めた約束は、華子の婚禮の調印が最早や何うしても明日の晩よりは延びぬ故、愈々その場合となつて到底逃るゝ事が出来ぬとなれば、華子は言葉を設けてその場を外し、このころへ逃げて來ること、その時には森江大尉が、旅行の馬車をこの垣の外に置いて、直に華子を載せて共々に他國へ去る事と言ふのであつた。誠に若氣のためとは言へ無分別の至りである。

斯くて愈々翌日になると午後二時頃に華子から森江の許へ走り書の手紙が來た。婚禮の調印は夜の七時に極つたと書いてある。森江は最早や驚きもせぬ。たゞその手紙を華子の眞心の籠つたものとするがために幾度も讀返した上で肌身に着け、直にそれより種々の用意には着手し、七時より餘程前に馬車を調べて、約束のところへ來て待つて居た、ところが約束の七時にはなつたけれど、華子より音も沙汰もない、或は愈々といふ場合に華子の決心が弛み、詮方なく調印したのではあるまいか、それとも逃出して來る道で捕つたか、或は心に恐れを抱き何處か途中で氣絶でもして仆れて居るのではあるまいかと、それからそれへと心配して、氣が氣でない程の思ひをしつゝ、遂に九時過ぎまでも待つたが、もう到底待つ事は出来ぬ。思案も何も盡きてしまひ、兼て華子を抱へて塀を越すために調べてある細梯子を馬車の中から取出して苦もなく塀を乗越えた、さうして蛭峰の屋敷の中に入つた。

中の案内は日頃華子に聞きなどして能く知つて居る。先づ野々内彈正の隠居所を廻つて本家の裏口に近づかうとすると、その裏口から脊の高い紳士が歩み出た、これは確に蛭峰である。見咎められでは大變と遽つて庭木の背後へ身を隠したが、續いてまた一人の紳士が出た。これは或は毛脛安雄ではあるまいか、早や婚禮の調印を済ませて、蛭峰と共に嬉しさを語り合ふために庭の面を散歩に來たのではあるまいかと様々の疑が湧き起つて、腸が千切れるやうな想ひである。けれど飛出して安雄かと疑はれるその紳士に飛附く譯にも行かぬから、據所なく息を詰めて二人の言葉を聞いて居た。

一七九 蛭峰家(五)

蛭峰の後に隨つて庭に出たこの紳士が果して毛脛安雄だらうか、木の蔭から息を凝らして窺うて居る大尉森江眞太郎は必定彼だと思つただけけれど、暫くしてこの兩人が窓から差す燈光の前を通つた時、兩人の顔が明かに森江の目に映つた。違ふ、違ふ、毛脛安雄ではない。

安雄の顔は未だ見たことがないけれど、この紳士の顔は、幾度も見たことがある。即ち有名な醫師有國手なのだ。何のために有國手がこの夜半に、蛭峰と共に庭の面へ出たのだらう、秋も早や寒い頃だから、決して涼みや散歩ではないと、森江は訝がる暇もなく、有國醫師は小聲で蛭峰に向つて言うた。「今夜死なうとは、昨日までも思ひませんでした。」扱てはこの家に、死んだ人があるのだ。若しや華子嬢ではあるまいかと森江は胸を轟かした。蛭峰「私も意外ですが、しかし米良田夫人は取る年ですから。」成程華子でない、米良田夫人が死んだのだ。有國醫師は聞答めるやうに、いゝ蛭峰さん、米良田夫人は決して取る年のために死んだのではないのですよ。それだから私が特に貴方へ祕密のお話があると言ひ、この庭へ出て戴いたのでです。」何だか重大な事件らしい口振である。蛭峰「え、取る年のためでないと言へば、何だか變死のやうにも聞えますが。」醫師「さうです、變死の疑ひがあるのです。」蛭峰「これは怪しからん、寢床の中で死んだものを、變死などとは。」醫師「はい毒殺された疑ひがあるのです。」蛭峰は飛上つた容子である。「え、え、毒殺、毒殺。」と彼は叫び、更に泣出しさうな聲で、「國手、國手、何うかそのやうな恐ろしい事を言うて下さるな。それでなくとも私は近來不幸な事が續き、非常に急いで取調べねばならぬ書類もありますのに、その調さへ出来ません。それに加へて今夜は義理ある母が死に、何うしてまあこのやうに辛い事のみ續くかと、恨めしい程に思つて居ますのに、その母の死が變死とは、毒死とは。」醫師「いやお氣の毒ではありませんけれど、私の疑ひだけはお耳に入れて置かねばなりません。」

「はい。」蛭峰「單に貴方の疑ひと言だけの事ですか、確に毒死と言ふのではなく。」醫師「はい確に毒死と言ひたいのですが、貴方が大檢事といふ嚴重な職務の方だけに私は言ひ切る事が出来ません。貴方へ言ひ切るには、裁判所の證人に呼び出されたも同様ですから、宣誓する程の心でなくてはなりません。眞逆にさう譬ふ譯には行きませんが、米良田夫人の死際の痙攣の有様が、何うも病氣のためではない、貌律矢といふ毒のためだと思ひます。」蛭峰「では病氣で死ぬ人はあのやうに身體が引き攣りませんか。」醫師「強直症といふ病氣で死んだのが、丁度貌律矢の中毒と同じ痙攣です。それだから私は必ず毒殺たと言ひ得ません。或は強直症かも知れぬといふ疑ひがあるのです。けれど昨日私が診察した時強直症の兆候は少しもなく、却つて既に中毒の容體が見えましたから、それで貴方に聞いたのです。若しや野々内彈正氏の薬がこの家へ紛れ込みはせぬかと。」蛭峰「はいその時私は決して紛れ込まぬとお答へ申しました。さうして彈正の薬に貌律矢が入つて居るかとお貴方へ聞ひました。」醫師「はい、入つて居ます。これは何うか彈正氏に口や手足の自由を恢復させたいと思ひ、數ヶ月前から少しづつ量を増してありますから、殆ど六分程の貌律矢が入つて居ます。彈正氏は呑み慣れてありますから、中々六分では死にませんけれど、初めての人が六分も呑めば必ず死にます。全體貌律矢といふ毒は奇妙な働きがあつて、少しづつ呑み増して行けば、段々多量に呑んでも中毒せぬ事になるのです。」

暫し考へた末、蛭峰は、「それでも父の薬が本家へ紛れ込むやうな事は何う考へてもありません。」

醫師もまた考へた、さうして更に重々しく、「さうすると蛭峰さん、全くこれは容易ならぬ事柄ですよ。今申す通り貌律矢を吞まされた死状は強直症の死状と同じ事で、餘程熟練した醫師とでも見分けを誤る程の次第ですから、この毒薬を用ふる者は、餘程毒薬の事に詳しい恐るべき相手です。眞逆に素人の家にこの毒薬を用ふる程、藥劑の理を研究した人があらうとは思はれません。それなのに貴方の家にこの巧妙な毒薬の用ひ方を知つて居た人があるとなれば——」蛭峰「何で私の家にそのやうな不届きな者が。」醫師「いや、なくば米良田夫人の死が更に合點の行かぬ事になります。全體夫人に薬を吞ませた看護人は何方です。」蛭峰「華子です。」醫師「夫人を殺して利益を受ける人は何方です。」宛も大檢事が問ふやうな事を却つて大檢事に問うて居る、それも無理ではない、この有國國手は、醫學の名譽が高いため、今まで裁判所の證人、または鑑定人となつたことが幾度といふ數を知らぬ、自然にかゝる詮索の心をも持つて居るのだ、蛭峰は充分には呑み込み得ぬ體で「え、利益を受け人とは。」醫師「米良田夫人の遺産を相続する人は。」蛭峰「それは華子——」と言ひ掛けたが、自分で自分の聲に驚いたやうに、「有國さん餘り恐ろしい言ひ分です、何で華子が。」醫師「左様、華子さんにそのやうな事の無いのは私も確信します。矢張りそれでは彈正氏の薬でせうか、兎も角、隠居所へ行つて調べて見ませう。」

拒むにも拒まれぬ、殆ど蛭峰は引立てられるやうにして彈正の隠居所へ行つた、今までやつと我今しも蛭峰と醫師とが出た裏口に忍び入り、二階なる華子の室を指して上つて行つた。

一八〇 蛭峰 家(六)

森江大尉は眞に夢中の状である。たゞ華子の身が氣遣はしさに、自分が見咎められるなどの懸念は少しも思はず、今しも蛭峰と有國國手との出た裏口から忍び入り、華子の室を指して二階に登つた、華子の室は何處に在る、見廻すまでもなく廊下の一方に幽けく燈火の洩れて、中から女の泣聲が聞ゆるかと思はれる室がある。大尉は戸を開いて中に入った。果して華子の室である。大尉はその無事な顔を見て先づ安心した、勿論華子の驚きは一通りでなかつたけれど、それは管々しく計すに及ばぬ、兩人は様々に問ひつ問はれつして、大尉がこゝに來た次第も華子に分り、華子が今夜約束の場所へ來なんだことも大尉に分つた、それは外でもない、米良田夫人の死んだため、毛脛安雄との婚禮の調印が延びたのだ。延びは延びても止まつた譯ではないのだから、また遠からずその調印の日が來るに極つて居る、大尉は迫立てるやうな聲で言つた。「それにしては華子さん、今夜こゝを脱け出させよう、馬車の用意も來て居ますから。」華子も心を極めて居ると見え、この性急な言葉を聞いても別に驚く容子はない、しかし應ずる色とてもなく、「米良田夫

人のお葬式を済ませるまでは、何うしてもこの家に居ねばなりません。私のためには大恩ある祖母さんですもの、その遺骸を捨て、こゝを去ればどのやうな罰が當るかも知れません。」これには大尉も異存を言ふ言葉がない。たゞ悄然として、「でも調印は、取込みの中でも出来すから、若し葬式の前に父上がその手續を運ば何うします。」華子「それは私も氣遣うて居るのです。祖母さんも思を引取る前に父に向ひ、婚禮は兎も角も調印だけは直にさせるやうにと言ひ、また父も兼てか大尉調印を急いで居ますから、明日にも私へ迫るかも知れません。」大尉「それでは愈々絶望ではありませんか、矢張り今夜逃げませう、逃げませう。」華子「ですけれど、唯一つ私には見込みがあるのです。それ兼て貴方へ話しました祖父野々内彈正が——」大尉「え、彼の中風の祖父さんです、か手足も口も利けぬ人が、このやうな際に何の頼みになりませう。」華子「まあ、さう言はずにお聞き下さい、御存じの通り彈正は兼て私を毛腰安雄の妻にさせぬと、請合つて居て呉れるでせう。それだから今朝私はその枕許へ行き何も彼も打明けてしました。ところが彈正は毎もの通り眼で以て私へ安心して居よとの意を傳へますから、それでは私は無事に森江大尉の妻になれませうかと問ひましたら、勿論との返辭を傳へました。ですが私が聞いただけでは未だ森江さんが安心しませんから、祖父さん貴方は若し森江さんがこの枕許へ来れば、彼の方に向つても矢張り同じやうに受合つてくれますかと念を推しましたから、さうだとの意を答へました。若し何か祖父さんが毛腰様と私との間に思ふべき力を持つて居るのならば、決してこのやうに請合ふ筈はありません。」

森江は訝かしげに考へて「いや華子さん、外の人々が請合つてくれるのなら、決して私には當にしません、野々内彈正氏は昔一世に恐れられた英雄で、私の父なども首領と仰ぎ深く敬服して居た方ですから、よしや年は取り、身體は不随になつても、眞道に確な見込みのない受合はなさらぬでせう。何うぞ私を彈正氏の枕許へお連れ下さい。彼の方が受合つて下さると見込みがつけば、私はそれだけを信じて、今夜の逃亡を貴女のお言葉通り葬式の済むまで延ばします。」言ふ中に隠居所の方から蛭峰と國手と共に歸つて来て、裏口の戸を鎖す音も聞えた。その戸が締つては、否でも應でも彈正の室を潛つて去る外はない。

華子は甚く喜んだ。さうして自分で立つて階段のところに行き、父が國手と共に居室へ引つ込んだ事を見届けてまた歸り、今度は森江を案内していと靜かに、二階を下り廊下を傳うて無事に隠居所なる彈正の傍には着いた。實に彈正は見るも憐れな状である。夙に一世を驚倒して歴史の幾ページを填した英雄が、身も足も舌も動かさず、たゞ眼のみ動かして狭い隠居所を天地とするとは、變り果てた末路といふべきである。彼はたゞ森江の顔を、異様に見詰むるより外、何事をもなし得ぬ、華子はこの状を見て「祖父さんこの方が森江さんですよ。」森江も恭しく、「多年先生と主義を同じくしました森江良造の嫡子眞太郎です。」彈正の眼は嬉しげに輝いた。華子「祖父さん、貴方は私と毛腰安雄さんとの婚禮を妨げて下さりますか。」彈正の眼「然り。」森江は心底より謝するやうに「唯一人の孫娘華子嬢を私へお任せ下さるとは生涯の大恩人です。偏に貴方の御助力を頼みと致します。」

彈正は實に嬉しげである。知らず、この全身不隨の老英雄、胸に何のやうな奇略を蓄へて居ることやら。

一八一 未熟な男で無い

全身不具の老英雄野々内彈正に果して何のやうな奇略があるか、それは「蛭峰家 七」以下の記事と共に暫く後に譲り、話頭は段倉家に移る。

* * *

世に手堅いやうでその實極めて危いのは銀行の身代である、少し評判がよくなれば、世の人、先を争うて取引を開くため、世間の金が集つて来る状にもなれど、その代り一朝よからぬ評判でも立てられて、少し信用が傾く日には、直に預金を取附けに来る人が門前に市をなし、同業者の取引や融通も忽ち止つて、昨日まで全國の財権を一手に握るとか見えしものが、今日は早や戸を閉ちて身代限りの間際まで押寄せる例も、随分今まであつたことだ。それとこれとは事異れど、扱ても段倉銀行の頭取段倉喜平次は、先頃電報の間違ひのため西班牙公債で一夜に四百萬圓の損をした上、巨額の伴越となつて居るマンフレデー銀行の支拂停止に遇ひ、これにも百萬圓以上の損失は逃れ難く見える場合

とはなり、今まで絶えて損といふことに出會した覺えの無い身だけに、内心甚く落膽して我が妻にまでその損失の幾分を割附けんとさへ嘆つて居たが、幸にこれだけのことでは未だ信用が傾くといふ程にはならず、多少の取附けには逢つたけれど、上部だけは平然と済すことが出来たところ、日頃の運の神が彼を見捨てたのか、彼の野西家の夜會の翌日、またフロレンス商會が破産したといふ知らせを受けた。この商會は段倉が伊太利鐵道の企業のために、見込を立て、餘程の資本を注込んであつたのだから、その損失は殆ど前の二口の損失を合せたよりも多い程である。抑々もこの商會を破産させたのは誰の仕業か知らぬけれど、伊太利の大株主が何か意見の違ひのために手を引いて、その株券が暴落したためとのことで如何とも仕方がない。幾等段倉銀行が盛大でも斯う一月と経ぬ間に引續いてかれこれ一千萬圓からの損失を受けては、信用に關せぬといふ保證は出来ぬ。既に巴りの同業者中にはそれとなく段倉銀行に對して手を緊めた向もあり、また手を緊めねばなるまいとて、密々相談する者も出来たとやら噂される程にも至つた。

頭取たる身に取つては、何れほどか辛いことだらう、彼段倉は晝頃から自分の居室に閉籠り、帳面を開いては嘆息し、嘆息してはまた帳面を繰返しなどして居たが、最早や氣も盡きたと見え、首を擧げて暫く前額に手を當てた、この時は午後の六時頃で、妻の居間には親しい來客があると見え、先程から談笑の聲も起り、時々音楽の音さへ聞えて居た、たゞ段倉の煩悶した耳へのみは入らななだが、何うした拍子かふと彼は聞きつけた、さうしてその方に振向いて、「何だなあ、騒々しい。實に

「所夫の心配も知らずに、面白さうに。」と呟いたが、忽ち思ひ直し、「いやあの音楽は妻でない、娘だ。あゝ、娘夕蟬が小侯爵と合奏して居るのだ。」とて直に顔の面を柔げた。「旨い、旨い、この向では、あの小侯爵が愈々近日の中縁談を言込んで来る、ふむ小侯爵皮春永太郎が、姓名も何となく貴族的だ、父の歳入が一年五十萬圓といふのだから、その身代は二十萬圓からの身代だ、俺などなら、なに千萬圓以下の金を持つても、五十萬の歳入を得る事は容易だけれど、金儲けを知らぬ伊太利の貴族だから、財産總體を皆働かせるといふことは出来ず、それに古金を集めて地の底へ埋めて置いたり、珠玉を倉に藏つて置くのを誇つたり、不生産的なことばかりして喜んで居るのだから、事に依ると五千萬からの身代かも知れぬ、これと縁組が出来れば、なに幾等でも引出して来る寸法は胸にある、未だ運の神がこの段倉を見捨てた譯ではないな、夕蟬と野西武之助との縁談を急がずに置いて好いことをした。彼等兩人は幼い頃からの許婚とは言へ、何もその後改めて武之助の父次郎が、愈々婚禮させると言ひ込んで来た譯ではなし、今斷つて破談にするのは譯もないことだ。さうくその破談の口實は先日巖窟島伯爵の言葉から思ひついて、希臘のヤミナ銀行へ問合せ置いた、その返事が来さへすれば、必ず次郎の舊悪が、いや新悪が分るからそれを利用すれば好い、何事も旨く運ぶわ。」漸く思ひ直して破顔一笑するところへ、書記が手紙を持つて来た、見ればヤミナ銀行から出たものである。

「来た、来た。」と段倉は書記の退く姿を見送りつゝ嬉しげに呟き、直に封を切つて讀下したが、中々長い手紙である、けれど彼は呼吸をも纏がずに讀終つた。餘程彼に取つて都合の好い事を書いてあると見え、彼はその笑を顔中に押広げ「驚いたなあ、次郎奴このやうな悪事をして居やがる。これでは希臘で大身代を作つて歸つた筈だ、ヤミナ城を敵の土耳其國王へ賣渡して、いやこれくらゐの悪事は仕兼ねぬ奴だよ、その上に城主の妻、城主の娘をまで。」と言ひ掛けてなほ終らぬところへ、「やあ段倉さん今日は、令夫人をお尋ねに來ましたが、序に貴方へお知らせ申す事がありますよ。」と言ひつゝ入つて来たのは巖窟島伯爵である。

段倉は遽て手紙を押隠し、懐かしげに迎へた。伯爵「フロレンス商會が破産しました。」段倉は我が財政上の弱點を人に悟られるやうな未熟な男ではない、何の利害をも感せぬ體で「さうですか。」と軽く答へた。伯爵「でも貴方は大株主ではありませんか。」段倉「なに僅數百萬圓ですよ。」とは伯爵の口調を學び得たものと見える。伯爵「いや貴方がさう軽く視て居れば、私も安心ですよ、若し御心配でもあれば多少は御用立ようかと思ひました、どれこれから夫人の御機嫌を伺つて來ませう。」と何氣なく伯爵は奥の間を指して立つた。段倉はまた遽て引止め、小聲になつて「ですが伯爵、何か奥に居る皮春侯爵へは、この破産事件を話さぬやうに願ひます。」とは咄嗟の間にも中々用意が綿密である、伯爵は領首いたまゝ奥へ行つた、直にその後へ、野西次郎とその息子武之助が入つて來た。来る時には来るものだ、かくと見て段倉は、扱ては縁談のためではないかと、破談の口實を持ちながら、先を越されさうな心配にギクリとした。

子爵野西次郎は何のためその子武之助に段倉の許へ来たのだらう、段倉の恐れる通り縁談のためだらうか。

若しなうとすれば、段倉と何等かの衝突無しには済ぬ筈である、段倉の方ではこの數年來内約になつて居る縁談を断るために、遙々ヤマナ州へまで手紙を遣つて口實の材料を集めて居る程なんだから直に段倉は思つた、先か言ひ出さぬうちに奥の間へ連れて行き、娘夕蟬が皮春侯爵といと親しげに合奏などして居る状を面前に見せつけて遣れば、父子とも氣色を損じて言ひ出さずに歸るかも知れぬ、或はその上に立腹して、終に縁談を先から取消す事になるかも知れぬと、若しさうでもなれば、面倒なしに目的は届くのだからと、何につけても掛引の上手な質だけに、咄嗟の間に思案を極め「さあ子爵、この室は取込んで居るから何うぞ奥の間へ、奥の間には妻も娘も居ます、巖窟島伯爵も娘夕蟬の好きな皮春小侯爵も来てゐられる、誰も氣の置ける人はありませんから。」と、闕から内へは入れず、直に自分が先に立つて案内した。

娘の好きな皮春小侯爵とは、許婚の相手父子に對して餘りな言分である、けれど、武之助の方はこれを聞いて竊に喜んだ、彼は何うかして夕蟬嬢を我が妻にはしたくないと心に祈つてゐるのだから、但し父の方はさうは行かぬ、眉の間に八字の皺が現れ掛けた。

若し段倉が猶豫を與へたなら、父の方は何か言ひ出すところであつたかも知れぬが、段倉は早くも眉間の八字を見て、自分の言葉に機能があつたを喜び、たゞ「さあ、さあ。」と迫立つて奥の間へ連れて入つた、こゝには全く段倉の夫人もゐる、娘も伯爵も小侯爵もゐる、かくと見て野西子爵は先づ段倉夫人に向ひ、「今日は、私共の夜會へ御出席下さつたお禮を申しに參つたのです。」扱ては縁談のためでは無かつたのかと、段倉は聊か自分の恐れ過ぎたを感じた、子爵は語を續ぎ「貴族院からの歸りにそれにお禮に廻る積りで蛭峰氏の家からこゝへ來ました、峰峰氏は餘程お取込中の御容子でした。」夫人は蛭峰と聞いて、司法省の官房で密會した一條から猶溯つて、昔の罪深い事柄などを思ひ出したか、異様に巖窟島伯爵の顔を偷み見た、しかし伯爵の顔は單に平和で何の色とても現れてゐぬから安心の體に子爵に向ひ、「それは御念の入りました。」子爵「さうしましたら恰度此方の門前で武之助に逢ひましたから、夕蟬嬢の機嫌を伺はせたいと思ひ、この通り連れて來ました。」いや、縁談のためでないでもない、また段倉は思ひ直して「何うです子爵、娘と皮春小侯爵とあゝして竝んで居るところは、能く似合ふではありませんか、誰でもさう言ひますよ。」この深い掛引のある言葉は殆ど石一個で鳥二羽を打つたやうな機能があつた。小侯爵皮春永太郎と成濟して居る春田路辨太郎はこれを聞いて腹の中で、天にも上つた心地がして、明日にも縁談を言ひ込まねばならぬと思ひ、また言ひ込みさへせば、直に承諾を得られると見て取つて心に勇み、野西子爵の方は同じくこの言葉

に前よりも深く眉を顰めたけれど何にも言はずに、聽て知らぬ振で聞流した。

併し聞流さぬ人が一人あつた、それは巖窟島伯爵である、伯爵は直に「段倉さん一寸。」と言ひ、彼を室の隅まで連れて行き、誰にも聞えぬ小さい聲で「貴方の今のお言葉は失言ではありませんか。」と問うた、段倉は假忘けて「え、今の言葉とは。」伯爵「夕蟬嬢と武之助とは久しい許婚だと言ふ

はありませんか、その間へ皮春小侯爵などを入れて、若しものことがあれば——いやなくとも野西子爵が感情を害するやうなことであれば、第一私が子爵に濟みません、子爵は必ず巖窟島が餘計な小侯爵などを連れて来るからこのやうな事に成るのだと私を恨みますが。」段倉はまた小聲で「い

え、いゝえ、何のやうな事があらうとも、決して貴方に迷惑は掛けません、何うぞ私の娘の縁談は私の家の言は、内所事だから私にお任せ置き下さい。」伯爵は不興氣に「成程、貴方がさう仰

れば、他人の私が出すべき事柄ではありません、けれど段倉さん、貴方の舉動が何だか小侯爵と夕蟬嬢との間を結びつけないように見ゆるのは、私の鬱成せぬところですよ。私はこれがため

に、若しも野西子爵から恨まれるやうな事になるのは否ですよ。」段倉「いゝえ、決して貴方が野西子爵に恨まれるやうな事は私が致しません、よしや娘を武之助に遣らずに、小侯爵へ遣るやうな事

にならうとも、それにはまたそれだけの手續があり、野西子爵にはぐらの音も出させません。」伯爵「そのやうな事を仰有つて、他日貴方が後悔するやうな事があらうとも私は知りませんよ。」段倉「勿論です。後悔するなら私が一人で後悔するのです、私は早くその後悔をしたいと思います。」

つて居ます。」とは、これ早く小侯爵を娘の婿夫に定めたいとの意味である。謙か誠か伯爵は苦々しい顔をして「さうまで仰有れば、致し方がありません。」とて嘆息して更に皮春小侯爵の傍に行き細語いた。「何かこの家に取込みがありさうですから、今日はこのまゝお歸り

なさい。」人の戀路の邪魔をすと、口には言はぬが、小侯爵は恨めしげに伯爵の顔を見た、併し伯爵の心を損じては、元も子も無くなる身分だから眞に詮方なくなく、「はい。」と答へて立上つて、立上

りつゝも彼の心にふと一つの疑ひが浮んだ。「おや、斯うまで我が舉動に心配し干渉するこの伯爵は我がために何者だらう、若しやこの身の本統の父ではあるまいか。」と、この疑ひの起ると共に、彼は忽ち柔順になり、殆ど懐かしいといふやうな聲で「伯爵私少し用事を思ひ出しましたから、お先

へ失禮致します。」と言ひ更に他の人々へも然る可く挨拶してこゝを去つた。間もなく伯爵も「いや私も大變な用事を控へて居ます。」と言ひ、同じく然る可く挨拶して立去つた。

若し、伯爵のかゝる仕草が掛引に出たものならば段倉の掛引よりも更に上を越す手際と言ふべきである、これも石一個で鳥二羽を打つたやうなものだ。これを見て段倉は思つた。「あゝ伯爵は小侯爵を、自分の連れて居る柄繪姫とかいふのに縁組させる内意がある、それだから心配するのだ、ふむ、伯爵の大身代でなほ縁組を望む程なら、皮春侯爵家の身代は底が知れぬ。何うしても俺の方で、先を越して夕蟬に結びつけねばならぬ。」また野西次郎の方は、伯爵が夕蟬と、我が子武之助との縁縁を妨げまいとの親切のために、故と小侯爵を連れ去つたのだと思ひ、その親切に對しても早くこの談談

を運ばねばならぬと決心した。

決心して少しも躊躇せぬが、野西次郎の本來の性質にある、罪の無い人を密告したり、自分の與かる城を賣つたりする事をさへ躊躇せぬ程の氣質だから、直に段倉に向ひ「貴方へ眞面目な御相談がありますよ、何うかお居間へ。」段倉は當惑氣に「今日全く取込んで居ますので。」野西「いや手間の取れる事ではなく、一言で決するのです。」無理に段倉の居間へ連れて行き「兼て約束になつて居る私の息子と、貴方の令嬢との婚禮の日を取極めませう。」一言の誤解をも許さぬ、言葉は明々白々である。段倉「成程、昔はそのやうな話しもあつたかのやうに覺えて居ますが。」曖昧この上もない返事に、野西子爵の前額には青筋が隆起した。當年の次郎と段倉、何方かどのやうに勝つか負けるかこの取組は見ものである。

一八三 賣國奴の一項

次郎は軍人肌、段倉は商人肌。一は厳しく一は猶い。昔の素性は兎も角も、今は雙方各々一癖を具へてゐる。眞に見もの、談判である。

段倉が空とぼけて、妙に着附けた狀に對し次郎は櫻み掛らん程の見幕となつて、「え、え、段倉男爵、貴方はこの約束を忘れて居たと仰有るか。」成程、昔はそのやうな話しもあつたやうだ。」など。」

段倉「忘れたと言ふでもありませんが、それほど眞面目な堅い約束とも思ひませんでした。」次郎「怪しからん事を仰有る、息子息女を夫婦にしようとお親と親との結んだ許婚を、堅い約束でないなどと、若しや貴方は外に私の息子武之助より優つた婿夫を見出したといふやうなためではありませんか、さうならさうと明かに言つて下さい、私には私だけの考へがありますから。」何のやうな考へかは知らぬけれど、その言葉の鋭さで見れば、決闘を言込むとの意味らしい、決闘などは段倉に取つて最も禁物である、この上もなく恐しい事柄である。

けれど彼は容易にこの縁談を破るだけの材料を持つて居る。先程ヤミナ州から受取つた手紙がそれなんだ。何もこゝで劇しく言ひ争はずとも、この材料を使用さへせば、忽ち我が目的は達するのだと心で多寡を括つて居る。「いゝえ野西子爵、何も私は貴方の息子を非難するものではありません、息子には罪はないのです。」息子には罪は無いとは角立たぬやうで角立つた言分である、聞咎めよと言はぬばかりである、次郎は果して、その手に乗つた。「なに息子には罪は無い。では父の方に罪があるとでも言ふのですか。」段倉「さあ、無いと言ひ切る譯にも行きますまいて。」と嘯いた。何だか氣味の悪いところがある。

さなきだに激怒して居た野西子爵は脱いで卓子の上に置いてあつた手袋を攪み潰すかと思はるゝ程に握り「失敬な。」と言つて立つてそのまゝ戸口を指して立去らうとした。けれど段倉の方は猶落着いて居る。なに自分の身に暗いところのある奴は眞實に怒り得るものでないと自分自身の經驗に照し

て見抜いて居る。果せる哉だ、次郎は戸口からまた引返した。さうして忽ち今度は昔の極く親しかつた時代の打解けた口調に返り、「これ段倉君、君の態度が僕には少しも合點が行かぬよ。お互に何も罪だの罪でないのと、他人がましく洗ひ立すべき仲ではないよ。君の娘も早や年頃だし、間違のない中に話を極めて、婚禮を濟せようぢやないか、僕と仲を違へて君は何の利益がある。」段倉は少しも打解けぬ。殆ど初めよりも一層恭しい口調で、「いえ、野西子爵、利益の問題ではなく、名譽の問題です。」次郎「では武之助と夕蟬とを夫婦にするのが、名譽に障ると言はれるか、僕と親類續きになるのを君の家の不名譽と言はれるのか。」

詰問のやうに問はれ、段倉は言葉を濁した、「それにしても子爵、この縁談は今日取極るに及びません。私に二三日考へさせて下さい。」次郎「十年も約束して、今更二三日考へるとは、僕には合點が行かぬ。君からこのやうな仕向を受けては、僕は勿論息子武之助の顔にも掛る。」段倉「いやなに縁談の破裂といふことは、男の顔よりは、餘計に女の顔に掛ります。私も辛けれど、この頃世間の噂を聞込んだ事も有り、何が何でも兩三日考へねば、お返辭が出来ません。」次郎は怒氣滿面再び立つた、今度は戸口から引返す容子は無い。

「では世間ではこの野西子爵の事を、悪様に言ふ者があると言ふのだな。何のやうな噂だか知らぬけれど、それに多年の親友たる段倉が耳を傾け、縁談の故障にするとは餘り甚い。そのやうな輕薄な友人ならば、無い方が幸ひです。」と言ひ捨て、立ち去つた。

この翌日の朝である。彼の猛田猛の主宰せる獨立新聞の紙上へ、「賣國奴」と題して、野西子爵に關する容易ならぬ記事が出た。段倉は毎も五六種の新聞を讀終つて、獨立新聞を最後に讀む男だのこの朝に限つて、何か待設ける事でもあるやうに、その新聞を一番先に選出して打開き、紙面全體を熱心に探した末、その「賣國奴」の一項に目を注ぎ、「占た、占た。」と叫び、更に「これが出れば幾ら野西次郎が圖々しくとも、自分の名譽が地に落ちたことを知り、名譽の完い段倉家へ最早や縁談を言込みもせぬだらう。」と呟いた。

一八四 歌牌が出来ました

「賣國奴」世にこれほど恐ろしい言葉は無い。誰でも彼でも、一度この言葉を加へられれば、直に死んでしまふのだ。肉體の命は存するけれど、名譽の命は死んでしまふ。

何のやうな威名嚇々の政治家でも賣國奴と言はればその地位は保つ事が出来ぬ。大軍人でも貴族でも直に社會から齒せられぬ事になる。今この恐ろしい言葉が、何のため、又誰の仕業だか知らぬけれど新聞紙の上で子爵野西次郎に加へられたのだ、彼の汚名を雪ぐ事は出来れば好し、若し出来ずば政治的、社會的、交際的に死んでしまはねばならぬ、又この世に顔を出す事は出来なくなるのだ。男爵段倉がこの新聞を見て嬉しげに呟いたに引替へ、同じ朝の同じ時刻に、この新聞を見て怒髮逆

立ち目撃裂くるほどに立腹した人がある。それは外でない、かく賣國奴と指目された野西次郎その人の息子武之助である。彼はこの新聞の主筆記者猛田猛と懇意なだけに、毎朝何の新聞より先にこの獨立新聞を讀んで居る。目に立つほどの大記事ではないけれど左の如く書いてある。

△ヤミナ州の通信（佛蘭西の賣國奴）希臘に在る通信員より驚くべき一報を傳へ來れり。聊か舊聞には屬すれども、先にヤミナ州が土耳其の兵を受けて戦ひ敗れたるは、通例の敗北に非ず、ヤミナの城中に一の賣國奴あり。敵軍より重賄を得て、その城とその軍との機密を土耳其皇帝に賣渡したるより起りしものなりといふ、これだけならば敢て今更事新しく報ずるに足らざれどこゝに憶嘆すべきは、その賣國奴が悲しくも我が佛蘭西人なるに在り、初めヤミナ州が、大敵土耳其を引き受けて義戦するや、我が佛蘭西の軍人は多くヤミナの義舉に感じ、走せ參じてヤミナ軍に加はりたり、この義侠を藉口せる軍人中に賣國奴あらんとは誰か知るべき、しかも賣國奴はヤミナ城主の最も深く信任したる次郎といへる者なりといふ。

これを讀終つて武之助は、「あんまり失敬なことを書く。」と打叫んだ、勿論單に、「次郎。」とあつて野西子爵とはないけれど、ヤミナ城主の最も深く信任したといふだけでも自分の父とは分る、況して、「次郎。」といふ名まで添ふから誰とて子爵野西次郎と一目に見て取りずには置かね「え、

で親友として交はつて居る猛田猛が、その新聞へこのやうなことを書かうとは思はなんだ、彼と決闘昨日ましてこの汚名を雪がねば、この身は世間へ顔を出すことも出来ぬ、父上もこの家も、恥辱の底へ沈んでしまひ、又と浮む瀬がなくなるのだ。」彼は血氣の滿々たる年頃だけに腹立しさの一念のみで他の考へは少しも浮ばぬ、このやうな汚名が果して決闘で雪げるや否やなどいふことは毛ほども彼の思ふところでない。直ちに彼はその新聞を衣囊に入れ、馬車に飛乗つて家を出た。

さうして只管走らせる中に思ひ出した。決闘には介添人が要る。先づその人を定めた上、その人から言込まねばならぬ、介添人は誰にしよう。第一に彼の心に浮んだのは巖窟島伯爵である。直にエリシー街なる伯爵の邸へ馬車を向けた。この時は朝の八時前である。未だ伯爵が起きて居ぬかも知れぬとは思ひつゝもその支關に飛んで入ると、伯爵は三十分ほど前に外出したとのことである。この早朝にと、怪しんで更に聞直すと、八時半には歸るからその時刻に朝餐の用意をして置けと言ひ残して出たことが分つた。それでは八時過ぎに來れば逢はれるから、その刻限まで散歩しよう、馬車降り降りてエリシー園の外を歩むうち、行くともなしに射的場の前まで行つた。徒に散歩するより、少しでも射的の稽古をして置けば決闘の補足になるかも知れぬと、直にその中へ入つて見ると、早や先客が一人ある。的に向つて短銃を手にして居る。

短銃の朝稽古とは熱心な人もあるものだと、靜にその背姿を見れば巖窟島伯爵のやうである。直に聲を掛けようかと思ふうち又も目に留つたのはその的である。的の所に恰度歌牌程の形に切つて紙

の札を十枚並べてあつて、伯爵はその中の何れかを狙つて居るやうに見える。何のために紙切を的にするのか、餘り不審だから聲を潜めて猶も背後から見て居ると、伯爵は第一發で左の端の紙切の真中を射貫いた。その紙切が恰度ランプといふ歌牌の一點のやうに見える事になつた。次に二發三發でその次の一枚へ二點の穴を開けた。これも全く歌牌のやうに見える。不思議にもその丸の中つた所が正しく歌牌の二點の記號が附いて居べき所である。次に又三發打つて三番目の紙をば歌牌の三點のやうに射貫き、これで六發の丸が盡きた。さうして伯爵は餘念もなく更に又彈丸を籠めて居る。

若し偶中でないとなれば、この伯爵こそは世界に唯一無二の短銃射的の名人である。武之助は伯爵にこのやうな武藝があらうとは知らなんだから、眞に開いた口が塞がらぬほど感心して、なほも立つたまゝ見て居ると、伯爵は六發打盡して彈丸を込め、又打つては込め直し、到頭十枚の紙札へ順々に歌牌の一點から十點までを射貫いてしまつた。妙、神に入るとはこのことだらう。何の點も、何の點も、悉く定木を當て、書いたやうに正しいところへ當り、一分一厘も狂つて居ぬやうに見える。武之助は思はず感嘆の聲を發して「絶妙。」と叫んだ。伯爵は初めて此方に向いたが、何か悪事をでも見留められたかのやうにその青い顔を聊か赦めた。しかしこれは僅の間であつた。直に打撃つて「おや詰らぬ 戲を見附かりました。久しく武器を手をせぬから若し狙ひ方を忘れはせぬかと、今朝は食事前に試して見ましたが、子爵何うでせう。彼の歌牌を極めて見て下さい。」武之助は直に的のところにいき、射貫かれた紙札十枚を拾ひ上げ、「全く歌牌が出来ました。伯爵、何のやうな決闘者でも貴方の短銃の前に立つ勇氣はありませんまい。」と嘆賞した。勿論、他日その身が伯爵の短銃の前に立つ場合があらうとは思ひも寄らぬのだ。

一八五 一城の主の姫君

これより直に武之助は、巖窟島伯爵に向つて、決闘の介添人になつて貰ひたい旨を頼んだ、それを聞くと共に伯爵は眉を蹙めた。

「いやいけません。私は何のやうな決闘に對しても決して關係致しません。固く嚴正中立を守ると言ふのが日頃の主意です。」一も二もなく承諾して呉れようと思つた人がこの仕讀なので、武之助は案外の思ひに堪へぬ、けれど伯爵としては無理のないところである。日頃の主意は孰れとするも伯爵に取つて武之助はその實敵の末である。勿論、父を恨むがためにその子をまで敵のやうに思ふことは伯爵のせぬところではあるけれど、去ればとて伯爵には一種の堅い信念がある。確にその身が神の助けを得、神に代つて人間に天の裁判を下すがために生きて居るものと思ひ詰めて居るのだから、少しでも自分の奉ずる宗旨に觸れるやうなことはせぬ、その父を恨みながら、その子の決闘に加担する如きは神の命でないと思つて居る。若しも外の人からこのやうな頼みを受ければ、或は承知するかも知之助からでは出来ぬ、又同じ武之助からでも外のことを頼んだなら必ず承知するだらう。決闘の介添

れぬ、武人となることは決して承知が出来ぬ。

伯爵は武之助の案外に思ふ顔を見て、説き明すやうに言つた。「本来私が決闘と言ふことに賛成せぬは、先に羅馬で死刑を見物した時に、貴方と毛脛安雄君に話したではありませんか、人から辱めを受ければ、その受けた通りの辱めをその人に復せば好い、自分が負けるやら勝つやら分らぬ決闘のやうな手弛い手段で決して満足が出来ぬものではありません。」暗に自分の目的を込めかして居る。「目を抉らるれば目を抉り返せです。私は法律の裁判さへ満足でないと思ひます。」暗に御身の父へ法律にもないほどの罰を加へるとの意味ではあるまいか、さうとすればこの伯爵、或は既に今朝の新聞を見て武之助の父が賣國奴の汚名を被せられたことを知つて居るのであるまいか、なほ一層深く疑へばこの汚名さへも幾等か伯爵の方寸から出た事ではあるまいか、よしや伯爵から出ぬにしても、伯爵が却つてこれを賛成し、或はこれを大復讐の好き發端と思つて居るのであるまいか、しかし伯爵の顔には武之助に對する無限の憐れみが現れて居る。少しも武之助は伯爵の心に隠れた念慮であらうとは疑はぬ。

彼は熱心に又言つた。「併し伯爵、それならば貴方は何故短銃の稽古などをなされません。中々貴方の射撃の旨いことは、戯らや慰みに稽古したものとは思はれません。何うしても誰某を射殺さねばならぬと決心して深い目的のために稽古したやうに見えます。貴方が紙切を的にして狙つて居る姿までが恨ある人の心臓を狙つて居るやうに見えました。」伯爵は物凄く笑つた。「いや、伯爵、貴方は久

しく武器を手にはせぬからと仰有つたれど、短銃ばかりは外の武器とは違ひますよ、これを以て鳥や兎を獵りに行くといふものでもなければ、戦争に行く武器でもありません。殆ど一私の争ひに相手射殺すといふより外に用はないのです。いはゞ決闘のためと限つて居る程の品です。その品を以て貴方が熱心に稽古なすつたところを見れば決闘をせぬ人とは思はれません。貴方の態度は確に世界隨一の決闘者です。」伯爵は妙に眞面目に、「いや、私は短銃ばかりが巧者ではありません。貴方は何か私のする仕事でこれが下手だといふことを見ることがありますか。」成程何一つ人に優れて居ぬといふところはない。武之助「しかし伯爵、そのお言葉は未だ貴方が人と決闘をせぬといふ證據にはなりません。根本から決闘を嫌ふ人が何故に短銃を。」伯爵「いや、自分では決闘をせぬけれど人から挑まれた時應ぜぬ譯に行きません。ですが貴方は誰と決闘するお積りです。」武之助「え、猛田猛とです。」伯爵「え、猛田猛、あの新聞記者の、それ御覽なさい、彼は貴方が親友だとして私へ紹介した方ではありませんか、この國に居れば何時親友からでも決闘を申込みれるか分りません。今日親友の猛田猛に決闘を申込み貴方が、明日は私へ決闘を申込みぬと限らぬではありませんか、私はそのやうな時の用意に短銃を稽古するのです。」武之助は笑つて、「その時には歌牌の心臓印を射貫くやうに私の心臓を射貫きなされるでせう。」伯爵「はい心臓を。」笑談の返辭だけれど何となく物凄く、武之助は思はず知らず身震ひした、「いや伯爵の丸面には立たぬやうに用心しませう。歌牌にせられるは未だ早や過ぎます、はゝゝ。」伯爵「私は決して自分から決闘を申込みません。決闘する

ほどの恨みがあればもつと好い方法に訴へます。」

「しかし兎も角も、私の家へおいでなさい、さうして能く事情をお聞かせ下さい。」とて伯爵は更に武之助を自分の邸へ連れて歸つた。さうして武之助から彼の新聞を示されて立腹の次第を聞いた、一應思案した上、「しかし、次郎といふ名は最もあり觸れた名前です。ヤミナへ援軍に行つた數千の佛蘭西人に必ず五六人はあります。何も貴方が自分の父だなどと自分から辱めるには及びますまい。」武之助「そのやうな誰もいふ言種では私の胸が癒えません。」伯爵「それなら決闘を申込む前に、先づ事實を糺し、猛田猛に紙上で明白に取消させるが好いでせう。」武之助「事實を取糺して居る間に、世間の人はあの記事を争つて讀んで居ます。それからそれへと、私の一家を侮辱するやうな噂が世間へ廣まります。それに事實を證明する人とてもありません。」伯爵「ありますよ、誰よりも能く、そのヤミナ城の陥つた次第を目撃した證人がこの私の家に居ります。」

扱ては伯爵自身がヤミナ城の陥落を目撃した人だらうかと武之助は目を見開き、「それは誰です。」伯爵「私が希臘の皇女といつて毎も劇場などへ連れて行く柄繪姫です。」武之助「え、彼の美人が、何うして。」伯爵「何うしてとて、姫君は、いや柄繪姫は當時ヤミナ城に籠つて居た一人です。」武之助「それけしかし。」伯爵「ヤミナ城主有井宗隣の娘です。世が世ならば、一國一城の主の姫君、それが今では自分の家も、いや自分の身分さへもない奴隷です。」異様に伯爵は自分の言葉に感動した答である。眼の底に涙が輝いて居るやうに見える。不問のため眼の底に涙が輝いて居るやうに見える。

武之助「おや、そのやうな身分の方ですか、道理で自然に品位が備はつて居ると思ひました。」伯爵「柄繪姫の室へ一緒に行きませう。」武之助は暫し考へ、「いゝえ、事實を取糺すといふことは何だか私自ら父を疑ひ、若しやこのやうな所行があつたのかと怪ふやうに覺ります。事實の無根といふことは無論ですから、問ひ糺す必要はありません。これから私は出部嶺か砂田伯かを介添人に頼みます。」伯爵も亦考へて、「けれど武之助さん、介添人を立てたり、決闘を言ひ込んだりする前に、貴方一人で猛田に會ひ、立派に記事を取消せと掛合ふのが當然です。彼が穩かに取消せばそれで済みます。その手續もせずに貴方の口からこの「次郎」とは俺の父を指したのだと、假令出部嶺や砂田伯へたりとも吹聴するやうな所業は宜くありません。」この道理は武之助も聞き分けた。「成程さうです。先づ猛田猛へ直接に談判して謝罪の意を表させませう。」といひ彼は猶豫もなく新聞社を指してこゝを去つた。後に伯爵、殆ど神に感謝するやうに天を仰ぎ「あゝ愈々時機が熟して来た。何も彼も我が思ふやうに進んで来る。全く神が導いて下さるのだ。この上にも神の御心を以て首尾よくこの大任を果さねばならぬ。」呟く聲は一種の祈禱のやうに聞えた。

一八六 決闘の條件

伯爵の許を去つた野西武之助は直にその足で獨立新聞社を訪ひ主筆記者猛田猛の室に走り込んだ。

新聞社の主筆記者といへばその天職は重いけれど、餘り立派な室に住んで居るものではない。書撰
じの原稿から見古しの新聞紙が其處此處に散らばつて、いはゞ反古の捨場ともいふべき中から首ばか
り出して居る有様だ。

武之助の登音を聞くより猛田猛は何か忙しく書いて居た原稿紙から顔を上げて、「お、野西君、早
朝からこれは意外、應接の室に待つて居て下さればもつと綺麗ですの。」と挨拶した。武之助「い
や、待つて居られるやうな緩々した話ではありません。貴方に汚された一家の名譽を回復に來たので
す。」いふ言葉がその見幕と共に如何にも荒々しいので、猛田は初めて尋常でないと思ひ取り、「全體
何のやうな用事です。」

問ふ尾に付いて、「今朝私の來る事は、問はずとも御存じの筈です。このやうなことを書かれて
私が黙つて居るとは思ひますまい。」と武之助は自分で持つて來た新聞紙を猛田の前へ差し附けた。
猛田は怪訝な顔で彼のヤミナ通信の一項を讀んだけれど合點し得ぬ。

「や、このやうな事項は通信部の主任記者が私共へ相談せずに載せるのですから——」武之助「そ
のやうな事を言つて貴方が責任を逃れるなら、二人の介添人をこゝへ送る外はありません。私は初
めから決闘の積りです。」自分の言ひたいことばかり言つて、相手に分るや分らぬやら考へる暇を與
へぬ、今まで呆氣に取られて居た猛田猛は、急に眞面目になり。

「私には何の事だか分かりませんが、貴方の言葉は殆ど暴言です。日頃の懇意のため私には恕して居
ますのに、貴方がそのやうな紳士らしくない態度を續ければ、摘み出す外はありません。この室は亂
暴者の闖入を許す場所ではないのです。」と嚴重に言渡し、武之助の益々怒らうとする狀を見て、「そ
れとも貴方は穩かに説明しますか。それならば私も聞きますが。」

この言葉に逢うて武之助は聊かながら我に復つた。「私には貴方が分つて居る事を故と偽忘けて
居るのだと思ひますけれど、説明せよとならば説明しませう。」といひ、これより彼の記事が確に自
分の父を指したに相違ない旨を述べ、更に事實無根として少しの疑ひも遣らぬやうに明白に取消すか
若しそれが出來ずは決闘せよと迫つた。

猛は迷惑げに武之助の顔を眺めたけれど、中々治る容子が見えぬので、また暫く思索した末、い
と重々しい語調で、「全體ならばこの記事は猛田猛の知らぬことですから、責任者たる通信部長へお
掛合ひなさいと刎ねつけるところですが、それでは貴方が、また責任を避けるなどと立腹するでせう
から。」武之助「無論です。避けようとして避けさせません。」猛「いや、避けはしません。相手が貴方
だけに、日頃の交誼を重んじて、私が責任に當ります。はい、充分の責任を以てお返辭します。能
くお聞きなさい、新聞紙が一旦掲げた事を取消すといふのは一種の自殺ですから容易には出來ぬので
す。」武之助「出來ぬなら私と決闘する一方です。」猛「宜しい決闘しませう。けれどこの決闘たる
や貴方から申込む決闘ですから、その條件は私が取極めます。」武之助「何のやうにでもお取極め
なさい。」猛「貴方に異存は言はせませんぞ。」武之助「何で卑怯に條件に對して異存などいひますも

のか。」 猛 「では日取を極めます。今日から起算して二十二日目の朝といふことに。」
「二十二日目、そのやうに待たれますものか。」と武之助は叫んだ。 猛 「異存は言はぬといふその下からその異存は卑怯ではありませんか。」 武之助 「でも。」 猛 「いえ、でもではありません。」 武之助 「でも三週間を無駄に過すとは譯が分りませんもの。」 猛 「私に取つては三週間の準備がなくは決闘は出来ません。外の事とは違ひ貴方の父上に關する次第故、私も先づ充分に事實を取糺し事實無歩と分れば明白に取消して謝罪したい、無根でないとなれば貴方が無禮故、私は貴方と決闘するに少しも躊躇はせぬのです。充分に良心の贊成を得て命の取遣をするのです。貴方は三週間の猶豫を承知するか、決闘と取消と兩方を思ひ止るか二つに一つのお選びなさい。」 何うして思ひ止まる事が出来よう。武之助は詮方なく「それでは三週間待ちませう。三週間も掛つて貴方が充分詮索すれば、事實無根に極つて居ますから、私も紙上で明白に謝罪させるのを好みます。」 決闘するに三週間の猶豫とは類のない事だけれど全く武之助は記事の無根が分るに極つて居るやうに安心し蟲を殺してこの條件に従うたが、若しその三週間の後に、事實無根でないとなつたら何うするだらう。

一八七 蛭峰家(七)

話は追々枝葉が多くなつて來た。三週間後と極つた武之助と猛との決闘は何うなるだらう。

の娘夕蟬と小侯爵皮春永太郎との仲は何のやうになり行くだらう。また全身不隨の野々内彈正が請合つた華子と安雄との婚禮の調印は果して妨げることが出来やうか、總てそれやこれやの別々の事柄が、知らず知らずに巖窟島伯爵の大復讐、流れ込んで行きつゝあるのだ。その状は、宛も東西南北様々の方角に流れて、互に何の縁もなさ相に見える別々の川が、その實自然に一つの大海へ流れ込んで行くやうなものである。これは天地の間に存する自然の道理、彼は人情の上に現れに大いなる天意といふべきである。こゝには先づ野々内彈正の件に立戻つて話の歩を進めよう。

口さへも利けぬ末路の英雄野々内彈正に何のやうな奇略がある。彈正の傍を離れぬ華子さへも且つ怪しみ且つ危ふんで居たが、この翌日はこの蛭峰家から二つの葬式が一緒に出た。一つは馬耳塞から着いた米良田男爵の死骸で、今一つはこの家で有國醫師に毒殺と疑はれた米良田老夫人の死骸である。何しろ悲しむべき事柄ではあるけれど老いたる夫婦が凡そ時を同じうして死し、同じ日に同じ家から棺を出して、同じ所に葬られるとは世にいふ偕老同穴の諺に叶うたものとして諦める外はないと、悔みに來た中の或る人は言つた。何にしても、主人蛭峰に取つては一方ならぬ取返といふもので、それがために彼の大事の取調べは日一日と延びて居る。「え、このやうな事さへなくば、最う夙くに巖窟島伯爵といふ彼の怪物の本性は分つて居るのに。」と彼蛭峰は墓地に行つてまで呟いた。そ

の心中の忙しさは察すべきである。しかし、彼は忙しさに驚くやうな弱い男ではない、忙しさに連れ
益々心が激しくなる方で「なに、この葬式が済めば、直に華子の調印を済ませ、また即座に彼怪物の
取調べに着手するのだ。」と心に誓ひ、葬式の場所で早や會葬人の中から毛脛安雄を目付け出して、
今夜是非とも我邸に来て調印を済ませよと乞うた。

安雄もこれには驚いた。何が何でも二つ葬式を出したその家で、その夜に婚禮の調印とは餘り心持
の能くないことだから、切ては明日にと達て辭み、その場はこれで分れたが、扱て翌日になると愈々
その積りで蛭峰の方では公證人も呼び、總て調印の用意を運び盡して待つて居る。そのところへ安
雄が来た。これが安雄と華子との二度目の顔合せである。華子は敢て安雄を憎いと思ふ譯ではない、
家柄といひ男振といひ、且つは心榮まで誰の所天としても恥かしからぬ人ではあるけれど、外にこの
人に優る大尉森江眞太郎があつて心が既にその人のものとなつて居るのだ、どうして祖父彈正がこ
の調印を妨げて呉れるだらう。手段があるなら今その手段を施さねばと、殆ど氣が氣でなく、調印の
卓子に向つても幾度か隠居所の方を振向き、たゞ胸のみ騒がして居るうち愈々公證人が婚姻約定書を
讀聞かせようとする間際になつて、隠居所の方から多年彈正に附いて居る老僕忠助が急いで来た。
華子は有難いと思ふ心を押し隠してこれに向ひ、「忠助、祖父様がお悪くでもありはせぬか。」と
問うた。忠助「はい、先刻から何だか御容子が違つて居るやうに見えますから、色々伺ひましたら
婿夫となる方を一度も隠居所へ連れて来ず調印するとは不服だとの御立腹のやうに私には思はれま

すので。」華子は父蛭峰の顔を見た。こは顔に父の返辭が現れるだらうと思つての事なんだ。蛭峰は
眉を蹙め「何だ餘計な。」と呟き、更に聲を發して、「何も隠して調印する譯ではなし、たゞこのやう
な事は寸善尺魔とさへいふのだから、急いで居るのだ、調印が済めば直に手脛安雄氏を隠居所へ御案
内してお引合せ致しますと、さう申して呉れ。」華子は大變と、「でもお父さん——」と叫んだ。けれ
ど後に續く言葉は出ぬ、若しこの時に天から邪魔でも降つて来なくは彈正のどのやうな奇略も施す
に由なくして、調印は無事に運ばれさうに見えた。

幸なる哉、邪魔は天から降つて来ぬが、手脛安雄の口から出た。「いやこれは全く私の失念で
した。大事のお孫娘と縁組するのに、一度も祖父様にお目に掛らぬとは、申し譯のない無作法です。
兎に角御隠居所へ行き、一應お目に掛つて来て、それから調印と致しませう。公證人、どうか手間は
取らせませんから少しお待ち下さい。」といつて立つた。これは必ずしも手脛安雄でないともい
ねばならぬことである。人の孫娘を妻にするのに、その祖父に顔さへ見せず調印するとは誰とて氣
の濟まぬ事柄である。獨り蛭峰のみは蟲が知らせるといふものか、何だか今この安雄を彈正は逢は
せるは宜くないやうに感じ、既に蹙めて居る眉と眉との間を一層狭くしたけれど、引留める口實はな
い。「では私が御案内致しませう。」と澁々立つた。自分が連れて行きさへすれば、よし萬一に何か
面倒の起りさうに見えても直に引分けて連れて來ることが出来るのだ。華子も後れずに立上つた。眞
に祖父さんが妨げて呉れることが出来るか知らんと、まだ危ぶむ念は胸に滿々で居るけれど、兎に角

一旦は虎口の難を逃れたのだ、いや難を幾時の間か後へ送ることが出来たのだ、これに蛭峰の妻を合も四人打連れて隠居所を指して行つた。抑もこの隠居所に於て大なる活劇が演ぜられるとは誰も知るものはない。

一八八 蛭峰 家 (八)

安雄は野々内彈正の枕邊に寄り、先づその顔を差窺いて恭々しく初對面の挨拶から不思議の縁で孫娘と婚禮することになつた嬉しさを、場合相應の言葉で述べた。素より彈正はたゞ眼を動かす外何の返辭をもなし得ぬ身ではあるけれど、異様に落着いて居る。何だかこの婚禮を妨げるに就ての充分なる謀略が胸にあつて必勝を信じて居るらしい、大軍師が戰場に臨む前夜とてもかくまで落着き拂ふことは出来ぬ。

彼の眼は纔に安雄の顔に注ぎ直に轉じて華子の顔に移つた。華子は胸を轟かせつゝ進み出て「祖父さん 私へ貴方の言葉を通辯せよと仰有るのですか。」彈正の眼「さうだ。」華子は定みし辛い通辯だらうと思ふけれど我が身の浮沈が繫かるところだから、充分その役を果さねばならぬと覺悟して居る。直に先ずABCの文字をならべ記して表を取り一字々々指示して彈正の意を窺ふに、彈正の眼は忽ち「ひみつばこ」の文字を綴り出した。華子「驚愕の中から貴方の秘密を窺ひ出しては」

持つて来るのですか。」彈正「然り。」

華子はその通りにした。一同は如何なる箱かと目を注いだ。通例世間で大事の手紙などを入れるに用ふる小さい文庫である。この中に大なる活劇の種があらうとは誰も思はぬ、先程からたゞ彈正のすることのみ、心配して居る蛭峰さへも、或は祝ひの記標に何か孫婿夫へ與へる積りだらうかと位にしか思はなんだ、華子は、「この箱を何うしますか。」と問ひ、またも様々の管々しい手續きを得て漸く、「中に在る書類をこゝで安雄に朗讀させて呉れ。」と、いふ意味を探り得た。誠に異様な註文である。こゝに至つて初めて初めは異様に危む念を起し「なに毛脛さん、今讀まずとも後で緩くり御覽なさつて宜いでせう。」と申言した。安雄「いゝえ、祖父様のお差圖は神聖です。」かう恭々しげに返辭して直に華子が蓋を開いて出すその箱を受取り、中から古い一通の書を取出した。書には面に「千八百十五年一月五日、秘密共和黨會合の顛末略記」と書いてある。これだけの文字に安雄の顔色は早や變つた。變るも道理やこの年月日は幼い頃から深く安雄の胸中に刻まれて消すに消されぬところである。千八百十五年二月五日、これ安雄の父毛脛將軍が暗殺されたその日である。しかもその暗殺はこゝに記した秘密共和黨の密會の席から歸る途中であつたのだ。

たゞ標題の文字だけで安雄は、他の何事をも打忘れた體である。熱心にその書を取上げ、嚴かに読み始めた。初めの方には先づ、將軍が拿翁の流されて居るエルバ島から歸つたことから筆を起し將軍が充分世間から拿翁の腹心である如く疑はれたため秘密黨の首領が内々將軍に面會しその黨の

密會場へ出席せられよと請うた次第を記してある。これ等のことは既に本篇の初めに記した通り、その頃の警視廳が探り得て新聞紙にも乗つたことで、それから將軍が自分から承知して自分の目を隠し、秘密黨の首領の馬車に同乗してその會場へ行つたことまで世間の人は知つて居る。讀んで其處に至ると、蛭峰は大に心配を始めた。彼は「毛脛さん、毛脛さん、それは今讀むべき書類ではありません。先づ私にお渡しなさい、御存じの通り公證人も待つて居ますから、婚禮の調印を濟せてその後で見ることなさい、さあ私が預かりませう。」と遮つて實際に手をまで出した。けれどももう安雄は心と書面とが一體になつた如くである。その言葉を耳にも掛けぬ、さうして次の如く讀み續けた。

吾々黨員は首領の連れ來りし毛脛將軍の目隠しを取脱したるに、將軍は目を開きて、列座せる七十人ほどの黨員を見廻し、痛く驚きたる體なりき、座に在る中の過半數は兼ねて將軍と懇意なる軍人にして皆朝廷の忠臣と信ぜらるゝ人々なりしかば、將軍は聲を揚げ、いや君方もこの黨員なりしか、扱ては人を此處へ連れ來るに、用心に用心を加へ、道順や場所などを知らしめぬため目隠しを施すは當然なりと、賞讃する如き語を發したり、黨員の多くは、將軍の加入を得て、我々早大望を成就せし心地すと叫び、熱心に將軍と握手したり。既にして議事に掛れり、勿論將軍は初めの列席ゆるゑ、自分より發言するほどの意見もなかりしと見え始終無言にて黨議を打聽き、その生ばに至り、手帳を取出して心覺えに筆記せんとしたれば、首領はこれを制止し、我黨の秘議はたゞ書記に筆記せしむるのみ、決して黨員銘々に書き留むるを許さずといひたるに、將軍はまた感服し、成程さうなくば眞の秘密は保たれまじといひてその手帳を收めたり。

この時の評議は拿翁がエルバ島より脱し來るに就き、全國黨員が到るところに旗揚して朝廷を覆へす手筈の打合せなりしたため、黨に取りてはこの上もなき重大の機密なりき、かくて評議は終り黨員中の軍人は各自己の連れ來たるべき兵士の數と、向ふべき方面とを首領の耳に細語して順々に血判し、軍人ならぬものは自己の相達すべき軍用金やまた身に引受くべき勞働や奔走などを密約しこれもそれと血判して、愈々將軍の血判すべき順番とはなりたるに將軍は躊躇せしのみか、拙者は朝廷より將軍の軍職を受け、朝廷の祿を食み、朝廷より榮爵をまで授かれるものにして朝廷の忠臣なれば未だこの秘密黨には入籍せざるものなりと言放ちたり。

黨員の面々はこの一語に怒髪の逆立つ如く怒り、將軍の肉を食らふとも足らずといひ「殺せ。」「殺せ。」の聲は叱咤の聲と共に凄しく滿場に沸き起りたり。

讀來る安雄の聲は、鍛へたる鐵を打合すかと思はれるほどに牙えた。蛭峰さへも一語を發すること

が出来ぬ、華子は首を垂れて顔を両手に隠して居る。多分は竊に泣いて居るものらしい。

一八九 蛭峰家九

讀むに従つて毛脛安雄は、その身が全く父將軍の位置に立ち、將軍の當夜の境遇に入つたやうに感ずると見える。一心不亂の有様で讀續けた。

將軍を活せて歸しては黨の破滅なれば即座に將軍を殺すべしとの意は黨員全體の心に満ちたるものゝ如し、この時若し黨の首領が、諸君將軍を殺すべきかとの一問を發せしならば將軍は確に全會一致を以て死を宣告せられたるべし。

將軍は逃れぬ場合と察したるや、畏に懼りたる猛獸の如く狂ひて立ち「七八十人の力を合せてこの一人を壓殺するとは能くも卑怯者のみ揃ひしもの哉、一人と一人の決闘なら私は甘んじて應じます、さなくば諸君の所行を虐殺の所行といふに躊躇しません。衆を恃んで一人に向ふ卑怯者よ、揃ひも揃ひし破廉恥漢よ」と罵りたり、この時首領は衆を制して立ち、いと嚴かなる聲にて將軍に向ひ「將軍よ、未だ我黨は貴下を殺すに決した譯ではありませぬ。暴言は謹みなされ、將軍よ、貴方は、我々が無理にこの場へ連れて来たといふでは

なく、ただ私の勧誘に従ひ自分の隨意にこゝへ来たことを忘れまじか、我々は貴方に目隠しを施しましたけれど、これも貴方が自分の手で結んだのです。否といふのを無理に我々が施した譯とは違ひます。その時には、貴方も充分に、この會が秘密黨の會であることを知り、他人が入り込むべき場所でないことを知り、これに入込むには黨員の式に従はねばならぬことを知つて居たのでせう。我々が貴方を我黨の贊成者と認めしたのは無理のないところで、す。しかのみならず、貴方はこの場にて我黨來の幾人と握手しました。若し我黨の贊成者でなくば何故に目隠しまでしてこゝへ来ました。何故に握手しました。何故に決議の前に斷りませんでした。しかし將軍よ、これは敢て咎めません。たゞ我黨を侮辱することを止めなさい、我黨は決して能くも揃つた卑怯者ではありません。何よりも廉恥を重んじます。その證據として、若し貴方が今夜の秘密を生涯他言せぬといふ誓ひを立つれば、無事に貴方の邸まで送り届けます。何うですその誓ひを立てますか。」

將軍は嘲笑つて「他言をせぬとは即ちこの黨へ加擔すると同じことです。現に國王の朝廷を覆へやといふ企てを聞き知つて、これを國王に知らさずに居れば、自ら國王を倒すと同じことです。私は國王の忠臣です。そのやうな誓ひは立てられません。」この言葉にて觀れば將軍は國王のために我黨贊成者らしく見せ掛けて入込みしものと認めらるゝ外なければ、黨員一同は再び激動し「死刑。」「死刑。」と連呼したり。

首領は再び將軍に向ひ、「その誓ひを立てぬとならば、生きてこの場を出ることは出来ません。誓ひを立てるか、生きて還るか二者の一を選びなされる前に、今一應篤とお考へを願ひます。」將軍はまたも満場を見廻したが、黨員一同が首領の言葉を當然として鎮まり返つて居る状を見、決してその死刑といふ語の、虚喝にあらぬを知りし如く、「然らば誓ひを立てます、今夜のことは決して口外致しません。」といひ更に首領の差圖に従ひ、名譽を賭したる正式の宣誓を行ひたり。

黨員中には多少不服に思ひ、よしや宣誓の式に従ひたりとてなほ將軍を生かし還すは危険なりと呟くものありしかど、首領が唯一言「私が責に任じます。」と言切るを聞きて満足したるに、將軍は初め來し時の如く、自らまたも目隠しを施し、またも首領及び馭者三人と共に馬車に乗りたり。

馬車の中にて將軍はなほも罵言の言葉を止めず、頻りに黨員一同を卑怯なりと責むるにぞ、首領は聞き兼ね「將軍、最早會議の席ではありませんから、卑怯といふことはありません。少し言葉を聞きなさらねば、聞捨には致しませんぞ。」と制止めたるに、將軍は嘲ひて「へん未だ貴方がたは四人と一人だから強いことをいふのです。單に一人と一人になつたなら、私と決闘するものは一人も貴方がたの中に在りますまい、この毛脛將軍の長劍は悪人に向つて容赦はないのです。」首領は權忍の力も盡きたり「將軍、こゝはセイソンの橋

の上です。さあ目隠しを取つてこの馬車からお降りなさい、降りた上で、なほも一人と一人の決闘が御所望なら私がお相手致します。私の持つて居るこの仕込杖も、貴方の長劍と同じく悪人に向つて容赦はないのです。」將軍は勇み立つ如く「なに一人と一人、小積な。」と呟いて直に目隠しを取外し、自分より先に飛出る如く馬車を降りたり。

扱は我父の死んだのは暗殺ではなく一種の決闘であつたかと安雄は初めて氣が附いた容子である。

一九〇 蛭峰家十

この長々しい始末書が何のやうな恐しい結果に終るかは何も知る者がなく、安雄は猶も讀續けた。

將軍が飛び降りたるに續き、我黨の首領も馬車を降り、首領は直に將軍に問へり、「將軍よ、立會人無しに闘ひませうか。」將軍は暫らく考へ、「いや私が貴方を殺した後で、貴方の手下共から、何時までも首領の敵だなどといつて蒼蠅く附け狙はれるやうなことがあつては困りますから立會人を定め、この闘ひが全く公明な決闘であつて暗殺でないといふことを後々まで證明せしめる用意に供しませう。」將軍は少しも自分の身が萬に一つも負けべし

とは思はざりしに似たり、勿論剣道に掛けては當時佛蘭西第一といはれ、幾度決闘しても必ず相手を殺したる程なればこの決闘も必ずその身が勝つべきを思ひ、後の面倒をまでも豫防し置かんと計りたるは無理もなきところならんか、首領は合點し、「立會人といつたところで、他所から呼んで来る譯には行きませず、私の馬車に居る馭者の中、二人をそれと定めては如何でせう。」將軍「宜しい、最も宜しい、貴方の黨員を立會人とすれば、黨員全體に後々まで私へ言掛りなどする口實がなくなりますから私は殊に望むところです。」始終將軍の言葉は自分の必勝を期して首領に對し侮辱の意を含みたり、しかも首領は毫もその意を感じざるが如くなりき。

臆て定められたる二人の立會人は雙方の劍を受取りて檢めたるに將軍の劍は長劍なれば立派な鏢あれども、首領の劍は仕込杖の身なれば鏢あることなく、しかも將軍の劍より五寸ほど短かりしかば、「かく武器に優劣があつては公平な決闘とは認められません。」と、いへり。將軍「この場に及んでそのやうなことをいつても仕方がないよ、劣つた劍を持合せて居た方が不運だと諦めませう。若し不幸にして私の劍が劣つて居る場合でも私は決して苦情はいひません。」首領「勿論です。私は用ひ慣れて居ますからこの鏢のない短い劍をも通例の長劍と同じやうに使ふことが出来るのです。」これにて決闘の準備は終れり。決闘の場所は橋の下たる空地なり、立會人は先馬車の燈を取り來りて橋の桁に懸け、兩

人の鬨者は外套を脱ぎて其處に來れり。立會人よりの合圖と共に決闘は開始したり、將軍は唯一打と思ひし容子にて初めより攻勢を取りたるも打込む度に巧みに反されその目的を達せざるより、「え、小癩な。」との語を連呼して益々燥だつのみなりしが凡そ五六合に至り、將軍は凍りたる地盤に足を滑らせ横さまに打倒れたり、この時若しも我黨の首領が將軍の不利に乗ずれば容易に勝を得べかりしも首領は先刻より幾度か將軍に卑怯などと罵られたる語の耳に存すれば益々以て自個の度量を示さんとする如く、直に劍を投捨て自ら將軍を抱起して立たしめ、「なほ決闘を繼續しますか。」と問へり、將軍もこの度量には聊か感心のせし如く、「幾等卑怯者の中でも、流石に首領は首領だけ武士の禮儀を知つて居られる。いやこれには感心しました。」と評し更に「無論決闘を繼續します。一方が命の盡くるまで。」といひ再び鬨ひを開きたり。しかれどもその幾合か進むに従ひ、首領の手練が將軍の手練に優ると徐々に現れ來り、將軍は歩一步に自己の地盤を失ふ如くに見えしが、終に首領の打降す劍先を反し損じ左の肩先に傷を負ひたり、しかし將軍は氣丈にて、「いや初めて手答のある敵に逢つた。これは愉快。」と叫び奮迅の勢を以て切込みしがこれには首領も、左の手先を傷つけられたり。

これより雙方の争ひは益々激しく、或は攻め寄せ、或は攻め寄せられ、果てしもなく思はるゝうち、首領は最後の手練を示し、鋭く劍を突出せり、將軍は二回までこれを受損じ、殊

この書類をお持ちゆゑ、定めし首領の姓名を御存じでせう。」野々内「然り。」安雄「それなら何うかして私へお知らせ下さい、さあ何うかABCの表に依り、その姓名をお綴り下さい。」とて早や彼の表を指示した。今まで詮方なく無言で控へて居た蛭峰は必死の思ひで、「姓名を問うたとして無益です。彈正は知らぬでせう。」遮るにも拘はらず、彈正は綴り始めた。さうして態々綴り終つた文字を見れば「我なり。」とある。安雄は椅子から轉げ落ちぬが不思議である。「え、その時の秘密黨首領は貴方ですか。」彈正「然り。」安雄「私の父男爵毛脛將軍を殺したのが、野々内彈正、貴方自身だと仰有るのですか。」彈正「然り、然り。」

一九一 蛭峰家(十一)

「然り、然り。」と彈正は目を閉ちて、確にその身が毛脛安雄の父を殺したとの意味を明白に現した。安雄は全く椅子の上に尻餅を搦いて、さうして暫しがほど彼はたゞ目を屢叩くのみであつたが、漸くにして「分りました。」といひ、また更に「この始末書は私が頂いて歸ります。」と獨り語のやうにいうて彼の書面を巻收めた。

彼がこの時の心持は何のやうだらう。漸く縁談が調うて、殆ど巴里第一ともいふべきほどの美人が我が妻と事定まる間際に及び、その美人は我が父を殺した人の孫娘と分つたのだ、知らぬ中は兎も解

に二回目は狙ひ違はず心臓を刺したれば、將軍は、「残念。」と叫びて仰向けに打ち仆れ、復た起上ること能はず、微かな聲にて、「顔を、顔を。」と細語きたり。首領はその意を察し直に橋桁の燈を取りそれに照して自分の顔を將軍の目の前に出したるに將軍は、「餘り劍を操るが巧妙だから専門の擊劍師かと思つたが、成程さうでない専門の擊劍師なら、この國中に私に知られる者は一人もありませんから。」首領「いや將軍の手練こそ専門家以上です。」

これこの通り。」とて自分が左の手に受けたる傷を示したるに、將軍はこれを見たと一語を發する力無く、そのまゝに息絶えたり。首領は劍の血を拭ひて鞆に收め、馬車に歸りて、残れる一人の馭者に馬車を遣らせ、後をも見ずに立去れり、後に二人の立會人は將軍の死骸を水際に推落し、立會人の役を濟せてこれも去れり。

以上は後日の疑ひを根絶せんため、立會人二人、誠意を以てその夜の中に直に認めたる始末書なり、少しも事實に違はざることを、名譽に賭けて誓ふものなり。

年 月 日

兩人 署名

安雄は青い顔で讀終つた。けれど騒がぬ。「父の死した顛末は、兼て私が知りたいと心に願うて居たところです。この書類をお示し下さつたのは、何よりの婿引出です。深く謝さねばなりませんけれど、私は何うを父を殺したこの首領が誰であるかを知りたいのです。祖父様、彈正様、貴方は

も知つて何うしてこの縁談が纏められよう。彼は土の如き面色のまゝ立上り、「貴方お蔭で多年の疑問が解けました。」と言捨て躊躇なく如くにしてこの室から立去つた。彼に續いて蛭峰も妻もまた立つた。若し立たずに居たならば、或は蛭峰はこの全身不随となつて居る父彈正の咽首を攫み潰したかも知れぬ、父のために大事の政略的結婚が妨げられたのだから、この時、彼は眞實に我が父を憎いと思つた。

さうして蛭峰は直に客間へ歸つたけれど毛脛安雄の姿は見えぬ、扱てはと思つて玄關を窺いて見れば、早や安雄は待たせて置いた馬車に乗つて立去るところである。今更追掛けて呼び返す口實とてもないのだから詮方なく斷念し、公證人には少し事情があつて調印が延びたからといひ、漸くその場を繕うて歸したが、これより一時間と経たぬ中に安雄から手紙が來た。その筆蹟の震へてゐるところを見ても彼の心が未だ鎮まつてゐぬことが分る。その文言は「更めて申上ぐるまでもなき事情のため拙者と華子嬢の間に到底縁談の纏まらぬは最早や御承知の事と存じ候。拙者は全身不随の老人を親の敵などと今更恨む程の執念深き者には無之、切て今の中この事の分りたるを雙方の幸ひとして却つて老人に感謝致し候。拙者と嬢の利害も名譽も未だ傷かざる中なれば、拙者はこれ限りに一切かかる縁談さへもありしことを忘るゝため、再び外國の公使館へ赴任致し候。告別までかくの如くに御座候。頓首。」とあつた。誠にさつぱりとした手切れの文句である。勿論かうなくては成らぬ筈だ。父の煩悶に引替へて全く重荷を卸した想ひをしたのは華子嬢である。嬢はその後で深く祖父彈正に

に謝し「貴方がこの縁談を妨げて下さるとは仰有つたけれど、かうまで手際能く妨ぐる事が出来やうとは思ひませんでした。」といひ幾度か彈正の前額に接吻した末、裏庭へ忍び出で、毎ものところろで心配しつゝ待つてゐる森江大尉に、毎もの通り垣一重隔て逢ひ、兎も角祖父彈正が約束を果して呉れたから安心せよとの意を傳へた。かくと聞いた森江の喜びは讀者の推量に任せてよからう。嬢がかく立去つた後へ又入來つたのは繼母なる蛭峰夫人である。彈正はその姿を見るより、眼に餘り喜ばぬ色を示したが、夫人は毎になく甚く打解けた容子で彈正の枕邊に身を卸し、「祖父さん、華子と毛脛氏との縁談は全く破れてしまひました故、今更私は何事をも申しませんが、唯一つ私の口からでなくば申上ぐる事の出来ぬお願いがありますよ。」と何だか氣味の悪いやうな前置を以て言出した。彈正も何の事かと合點が行かぬらしい、たゞ怪しげに夫人の顔を眺めてゐる。夫人は眺められるを恐れもせず「はいその事は第一華子のため、第二には蛭峰家總體のためでありますけれど、華子の口からも蛭峰の口からもいふことが出来ません。私は華子には繼母、蛭峰には妻ですからその義務を以て申します。何うか先日貴方が公證人にお作らせなされた遺言状をお取消し下さい、あの遺言状は華子と安雄との婚禮に御不同意の旨を示すため、貴方の財産一切を他へ寄附するやうにお作りでありましたけれど、もう愈々華子と安雄の縁談が破れて見れば、その必要はありませんから、何うか元々通り華子を貴方の相續人として別に遺言状をお作り下さい。」殆ど誠心を披いて請うた。日頃華子を目の敵のやうに窘めて居るこの繼母が、華子のためにかゝることを請ふとは、何か深い仔

細のあるためではなからうか。誠に油断の出来ぬ事柄ではあるけれど、兎も角彈正の思惑もこの通りであつたのだから彈正は直に承知し、この翌日またも公證人を呼び、華子を自分の財産全體の相続人といふことに新しい遺言状を作らせた。後に思ふとこれが果して波瀾の本であつた。華子に取つて有難いやうで有難くなかつた。

一九二 蛭峰家(十二)

年中齟齬と稼いで居る人は容易に金持となることは出来ぬけれど、運や果報の向いて来た人は寢て居ても大金持になることが出来る。華子の如きは即ちそれなんだ。死んだ母親が少からぬ財産を遺して呉れてあるが上に、母親の兩親たる米良田伯とその夫人とが一時に亡くなられたため、血筋の順序として當然にその兩個の財産も轉がり込み、今はまた祖父野々内彈正が蛭峰夫人の請ひを容れて遺言状を書直したため、これも死ぬれば九十萬からの身代が華子のもとなるに極つた。纏に一週間ばかりの間に五百萬からの財産の持主とはなつたのだ、華子自らは金のことなどは何とも思はぬから、別に氣に留めもせぬ容子だけれど、若し深く考へて見れば、たゞ運や果報といふばかりではなく何か仔細があるのではなからうか、米良田伯夫妻の死方なども何だか怪しかつたではないか、疑ふ人に疑はせれば、誰か深い目的を以て華子の身へ財産を集めて居るのではあるまいか、華子の身へ集めて置いて、さうして華子を何うかして、一舉にその財産を横領するといふやうな計畫でもあるのではなからうか、餘りな事でこのやうな疑ひの餘地さへも出て来るのだ。

兎も角華子は幸福である。今まで父と繼母との手に壓附られ幸福の何たるを知らなんだ身が急にこのやうな大金持となつて、數ヶ月來何うしようかと心配して居た安雄との縁談も破れた、こゝ暫くは殆どいふ芽が出るといふ景状である。のみならず彈正が、安雄の縁談を破つた序に、思ひ思はれて居る森江大尉との縁談を充分に固めて遣りたいとの心を起し、不自由な身體で少しづつその意味を嬢に告げ知らせ、二日ほど掛つて漸く一種の相談を取纏めた。その大意は第一に、外へ隠居所に宛てべき相當の家屋を探しそれを買求めて、彈正自ら華子と共にその家へ引越す事、第二に、引越さへせば森江大尉も自由に其處へ出入することが出来るゆゑ、その間には益々華子と相互の氣質も分り、また彈正も篤と大尉の心榮などを見て取る事も出来るゆゑ、その上にて婚禮の條件や日取などを取極める事、といふのであつた。實に局面が一變したやうなもの、手に手を取つて驅落する外、到庭夫婦になる道がなからうと決して居た兩人が、何うやら天下晴れての許婚となる事が出来る場合になつて来たのだ。

この相談が極るか否や、彈正は一方に建物會社へ人を遣り然るべき家屋の詮索を命じ、また一方は兎に角大尉に逢つてこれだけの事情を告げ知らせ、短氣なことをせぬやうに誠めて置きたいといひ、老僕忠助を大尉の許へ使ひに遣つた。勿論大尉は彈正からの使ひと聞き、宙を飛ぶ程の勢

で老僕忠助を追抜いて遣つて来たが、廳で彈正の枕許に座し、華子の通辯や自分の氣轉で右の次第を聞いて居る中に、飛んでもない一事件がこの静かな隠居所に起つた。

それは外でもない、老僕忠助が大尉の後から喘ぎ／＼歸つて来て、華子に向ひ嬢様もう年取つてはいけません、線に十町か十五町ばかりの道が、若い方と一緒に走ることが出来ず、咽喉か干潤ひてしまひました、嬢様、こゝに在るレモンを少し戴きますよ。」といひ、華子が彈正のために用意して置いたレモン水を盃に注ぎ一息に呑乾した、この時華子は「あれお前、年寄の癖に冷たいものを。」

と制するやうな言葉を發したけれどそれは間に合なんだ、忠助は呑乾して暫し休んで居る體であつたが忽ち苦痛の聲を發し、「あゝ死にさうだ、恐ろしい眩暈がする。耳も破れるやうに音がする。」などと叫び、廳ではまた、「頭が破裂けます、破裂けます。」とて空を擱んで腕き始めた、勿論華子は驚いて「忠助何うした。」とてその場に行き、森江大尉も「何事です。」と同じく出て来たが、この時、本

家よりも、忠助の悲鳴を聞き、誰やら驅附けるやうに思はれたから、華子は忙しく大尉に向ひ「若し父上に咎められては面倒ですから貴方は裏の方から、密とお歸り下さい、さうして再び迎へを上げた時また来て下さい。」とて大尉をこの場から避けさせた。

引違へてこの場へ現れたのは蛭峰夫人である、夫人も氣が轉倒したかと思はれるほど遽でた狀で「お、忠助が、お祖父さんの召上るレモンを呑んだのかえ。」といひ、直にその盃と瓶とを取つて「先

あこのやうなものには片付けて置かねば。」とて自分で臺所なる流し場のところへ持つて行つた、引續いてまた蛭峰と有國醫師とが一緒に來た、醫師は唯一目、忠助の體子を見、蛭峰に向ひ、「米良田御夫人と同じ容體です、同じ原因です、同じ最期を免れません。」と連呼し、直に今しも蛭峰夫人の行つた臺所へ行き、彼の盃を持つて來た。「嬢さま、忠助はこの盃でレモンを呑んだと言ひますか。」

と華子に問ひ、華子が「さうです。」と答へるを待つて、また直ぐに蛭峰を引立てぬばかりに、「蛭峰さん、此方へおいで下さい至急です、至急です。」と言ひ本家の方へ去つた。

さうしてなほも蛭峰を捕へたまゝ蛭峰の居室に入り「これが毒殺で無いと言はれますか、貴方は御自分の家に、大なる犯罪があるのに、何でその方には目を注がず、古い書面などを出して調べてみます。」殆ど叱り附ける口調である。蛭峰「え、犯罪。」有國「若し毒殺がこの國の法律で無罪とせられて居れば兎も角、さなくばこの家に。確に犯罪が行はれてゐます、その證據を見せませう。」と言ひ一片の白い試験紙を取り出して、まだ濡れてゐる盃の中の露を拭いた、露に従つて試験紙は所々青く變色した。「それ御覽なさい、貌律矢です、貌律矢です。味や匂では分りませんが、試験紙には現はれます。」蛭峰「貌律矢など、誰がそのやうな毒藥を。」有國「誰が用ふるかそれを探すのは、大檢事たる貴方の職務ではありませんか、犯罪に依つて利益する人を疑へとは貴方の職務の第一歩

はありませんか。」蛭峰「誰も忠助などを殺して利益を得るやうな人は。」有國「いや、忠助ではなく

野々内彈正氏に呑ませるのを忠助が誤つて呑んだのです、彈正氏を殺して利益する人はありませんか、彈正氏の財産は誰が相續します。米良田伯爵夫人の財産は誰が手に轉がり込みました。」この言

か、

か、

か、

か、

か、

か、

葉は明かに華子を指すやうなものだ、蛭峰はたゞ呆れて、「有國國手、貴方の問ひは餘り邪慳です、不道理です。」と泣くやうな聲で叫んだ。

一九三 蛭峰家 (十三)

確に有國國手は華子を疑うてゐる、成程その疑ひに一應の道理が無いでは無い、米良田伯爵夫婦の死んだのも華子の利益となつた、野々内彈正が若し毒殺せらるゝとせばそれも同じく華子の利益に歸するのだ、さうすれば華子は、野々内彈正が新に遺言状を作つて自分を相続人と定めたに就て今が彈正を殺すべき時だと思つたのだらうか。今殺さねば再び彈正が遺言状を書改めるかも知れぬ、再び、書改めては取返しが付かぬから、そのことの無い中にと、深くも謀つて用意した毒薬が誤つて忠助を殺すこととはなつたのだらうか、然り有國國手は確にさう思つてゐる、けれど父蛭峰の身として何でこのやうな恐ろしい疑ひが信ぜられよう。よしやこの上に倍も二倍も強い證據が出たとしても眞逆に我が娘にそのやうな鬼心があらうとは信ぜぬ、彼は叫んだ。「有國さん、犯罪に依つて利益する人を疑へと言ふ古諺ほど明白な語はありませんが、またこの語ほど多く無實の人を罪に陥れた言葉も無いのです、眞誠の裁判は決してこのやうな簡単な言葉で決せられるものではありません。一有國國手は理が非でも自分の言葉を押し通さうといふ人ではない。」

「さうです、全くさうです、故に私はその言葉を根據として誰かその犯罪人だと指すのではありません、たゞこの家に犯罪のあることを貴方へ告げるのです。その犯罪人が誰であるかそれを見出すは貴方の職務、敢て私の嘴を容れるところではありませんが、兎も角もこの家で一週間と經ぬうちに同じ貌律矢で毒殺された人が二人まであることは認めねばなりません、これを認めれば詮議せずしも一家の名譽を厭ふがために、これを詮議せずしに捨置くならば、私は醫師たる自分の職務として更に相當の手續を踏み、相當の官衙へ訴へます、たゞこれだけを申すのです。」

たゞこれだけといふその「これだけ」が恐ろしい、如何に蛭峰が裁判所に大勢力のある身分とてもこれを妨ぐる譯には行かぬ、彼は情無いといふ口調で「有國さん、全く蛭峰家の亡ひる時が來たのです、する事爲す事悉く間違つた道へのみ流れ込んで。」有國「いや、それはお察し申しますが貴方は大檢事として我が家に起つたこの毒殺事件を詮議するのですか、せぬのですか。」蛭峰「詮議します、はい、詮議はしますが——」有國「詮議するとならそれで宜しい。私はこの上に言ふところはあります。」

「と云つて立去つたは、實に我が職掌の上の義務は一步も曲げぬといふ嚴重な方針を守つたもので流石に信用の厚い醫師だけのことはある。」

勿論忠助はそのまゝ死んでしまつた。その後、蛭峰は熟々とその身の否運を感じた、一方に巖窟島伯爵の本性を見破るために、必勝の手段を取つて古い書面を取調へて居れば、落着いてその取調べを

續けられぬやうなことばかり起り、また一方には一身一家の計畫が悉く外れて、今は自分の大檢事といふ職務を以て我が家内から罪人を捜し出さねばならぬといふ辛い詮議まで降つて湧いた。

なほこれのみではない、忠助の變死には下女下男一同に至るまで戦き恐れ、一人がこの家には死神が祟つてゐると言出せば、一同が成程それに違ひないと言ひ、その夜臺所に寄集まつた上、評議を固め、直に一同で暇を取ることゝなつた、これは小事のやうで大事である、雇人一同に立去られて主人たる者がどうして家を治めて行くことが出来るものか、どうして他の仕事に身を委ねてゐることが出来るものか。蛭峰は妻と共に力を合せ、給金を増すからどうか留まつて呉れとて一人／＼に説いたけれど甲斐が無かつた、翌朝は水汲む者さへ無い程の始末となつた、廣い蛭峰家が殆ど火の消えた後のやうだ。

しかし蛭峰家のことはこれだけで止めて置いて話はまたも小侯爵皮春英太郎のことに移る。

* * * * *

扱ても永太郎は段倉の家で巖窟島伯爵の我が身に對する仕種を見て、どうも伯爵が自分の本統の父ではなからうかとの疑ひを起したため、靜かに立去つてその夜を朝までも考へ明したが、どうもさうせねば伯爵の今までの振舞が合點が行かぬ、第一伯爵が日々我が身に與へて使はせる金だけでも莫大なものである。父で無く子で無くば何でこのやうな無益なことをするものか、多分は我が身を、巖窟島

家の相續人として恥かしからぬ性質であるかないかと様々の誘惑を加へて試験してゐるに違ひない我が父といふ皮春大侯爵の使ふ費用とともその實伯爵から出でゐるのは勿論のことで、察するに伯爵はこの身を自分の手近くへ住はせて置くのに然るべき口實がないから、父で無い父を拵へてさうして世間體を作つて置くのだらう。その中には必ず機を見てこの身へ眞實のことを打明け、親であつたか子であつたかと名乗り合ふこととなるに違ひないと、考へるに従つて益々確らしく思はれるから終にその日の暮頃に及び伯爵の許に行き、それとは無しに問うて見た。「若も伯爵、この私が妻を娶つて一家を構へる場合には、差當り私の父は何れ程の身代を分けて呉れるでせうか。」と、遠慮しただれど中々適切な問方であつた。伯爵は驚かぬ。「貴方には母方の財産、即ち小品侯爵令嬢折葉姫の遺産が二百萬圓もあつてこれは或る人が保管してゐる筈ですから、父上の承諾如何に拘らずこれだけは貴方が家を持つと同時に貴方の物になりませう。更に父上が貴方へ幾等分與へるか、それは先日露西亞へ立つた父上が歸つて來た上でなければ分りません、けれど兎に角貴方が令夫人と共に侯爵といふ身分を支へて行くに足るだけの資本——左様さ三朱の利として年に十五萬圓の利息を生むだけの元金即ち五百萬圓は直に分け與へるやうに私が忠告しませう、果して父上が五十萬圓の收入のある方ならそれ位なことを否とは言ひますまい。」と答へた、永太郎は益々自分の信じてゐる所を深くしたが。伯爵は永太郎の立去る間際となり、更に序のやうに「併し小侯爵、貴方が段倉男爵の娘夕蟬嬢を娶らうと言ふなら私はそれに關係することは出来ませんよ、私の位置は義理にも彼の令嬢と野

西武之助との縁談を賛成せねばならぬことになつてゐますから。」と言ひ足した、永太郎は心の底で領首いた、これは伯爵が暗に夕蟬嬢を早く貰へとの謎である、その身は義理のため口を添へることが出来ぬから獨りでことを運ぶやうにせよ。さうすれば夫婦の一家の立つやうには計らつて遣ると請合つて呉れたのも同じことだ。

果して伯爵の心がこの通りだか、否やは分らぬけれど、永太郎は全く斯くと信じ、大膽にもこの翌日、直に段倉の家へ縁談の言ひ込みに自分で出懸けた、段倉の方も、殆どその言込を待つてゐるほどの状であつた。

一九四 その實、本統の父

小侯爵皮春永太郎には好運が向いてゐたと見える、彼が縁談の話の緒口を切ると段倉の方ではその緒口を把らへて引出すやうに迎へた、すらくとこともなく話が進んだ。

永太郎は言つた。「斯様な大事な相談に巖窟島伯爵が賛成して下さらぬのが誠に残念で、定めし貴方の方でも私の言葉だけでは不安心にお思ひでせう、けれど伯爵は野西家に對する義理合でどうも私の方へ加擔する譯に行かぬと仰有ります。」段倉はその事情を充分察してゐる容子で、しかも朝笑つた。「なに伯爵は野西が賣國奴といふことをまだ御存じないから彼へ義理立てするので。今に

野西の舊惡がもつと能く分つて來れば必ず伯爵は彼に義理立てしたのを後悔なされますよ。」段倉の眼中にはたゞ皮春家の身代があるばかりだ、この身代と自分の娘とを結び附けるには誰が賛成して呉れずとも構はぬのだ、永太郎は充分その邊の心意氣を見て取つて、開いた段倉の口へ牡丹餅を投げ込むやうに「でも伯爵は私が妻を持つといふことには賛成です、私の母折葉姫の遺産を二百萬圓だけ誰だか伯爵の知人が預かつて監督してゐますさうで、私が婚禮すると同時にこれだけは私へ呉れると言ひます。」段倉「それは伯爵の知人が預かつてゐるのではなく多分伯爵自身が預かつてゐるのでせう。」永太郎も實はさう思つてゐる、けれど故と兒供らしく、「いゝえ伯爵は確に自分の知人がと言ひました。その上にまた私の父へ勸告し、差當り五百萬圓の財産を分け與へるやうにするからその財産に年々十五萬圓の利子を産ませるやうにしてそれで夫婦の經濟を支へよと言はれました、貴方は銀行家だからこの邊の事情は御存じでせうが、二口併せて七百萬圓から十五萬圓の歳入を得ることは出来ませうねえ。」段倉「それは私の手腕で年に二十萬圓の利子は容易に産ませて上げます。」三朱に足らぬ利子だもの、抛つて置いたとて産まれて來るのだ、手腕も何も要るものは無い、永太郎は安心の風を示し、「それで一つは重荷の卸りたやうな氣がします、では直に、婚禮の済むと同時に七百萬圓は貴方へ預けることに致しませう。」

立派な家筋と爵位の上に七百萬圓の身許金まで供へて、それで銀行家から縁談を斷られるなら世は逆様になるのだ、幸にしてこの場合には世が逆様にならずに濟んだ、平たく言へば縁談が纏まつ

た、永太郎は段倉の承諾を得た上で夕蟬嬢の承諾をも得た、さうして點燈時の後に及んで笑崩れた顔でこの家を辭し去つた、玄關まで送つて出た段倉の顔も劣らぬほど笑崩れてゐた、後のことは兎も角もこれだけのところは先づ目出度いと言はねばならぬ。

けれど永太郎が宿へ歸つて見ると、彼の顔からその笑を剝り取るやうなことが出来てゐた、それは卓子の上に横はつて彼の歸りを待つてゐる一通の手紙である、差出人が彼の毛太郎次であることは筆蹟で分つてゐる、その文句は「親しき辨太郎よ、御身の前途が益々目出度く喜ばしきことは、御身自ら知れるだけ余も知れり、余は段倉男爵の他人に非ず、今若男爵の許へ余が舊交を言ひ立て、顔を出さば、御身は餘り有難く思はぬならん。御身若し余が段倉男爵の耳へ、御身の本名を細語くことを止めたく思ふならば直に余が宿に來れ。」とある、何たる邪慳な書き方だらう、けれど仕方がない、これに従ふ一方である、永太郎は悔しげに拳を固めこの手紙を二度三度叩き伏せた、さうして餘り人目に立たぬ着物に被替へてまた宿を出た。指して行く先はモンタン街の靜かな下宿屋である。

この下宿屋に毛太郎次は、公債證書の利子で暮す有福な商人の隠居といふ積りで、月々永太郎から貰ふことになつてゐる口留の手當錢で日を暮してゐる、彼は先づ不機嫌な永太郎の顔を見て「今日は略縁談が旨く行つた筈なのに何で陰氣な顔をするのだ、これ辨や夕蟬嬢が何と言つた、その話でもして、手前の身の上をのみ心配してゐるこの親切な爺に安心させて呉れ。」早やこのやうなことをまで知つてゐるとすれば、この悪人絶間もなくこの身の舉動を見張つてゐるに違ひないと永太郎は荒膽を

抜かれてしまつた、さうして腹立しげに「何でお前は、私の身の上などを心配するのだ、心配せられ迷惑だよ。」中々これくらゐの叱りに驚く相手ではない。「まあさう怒るなよ、お前が躓けば俺も倒れるやうなものだから、恰度親が子を思ふやうに心配するのさ、さうよ、心配すればこそ俺は先達てお前に逢つて以來、色々とお前の身の上を考へ、お前の行くところへは大抵見え隠れに護衛して行くやうにしてゐるが——」永太郎「なにが護衛だ、止めて呉れ、止めて呉れ、お前のやうな者が附纏うてゐると分れば大事の仕事が皆破れてしまふのだよ。」毛太郎次「さうでない、それがためにお前の氣の附かぬことまで俺は氣が附いてちやんと考へてゐる、お前あの巖窟島伯爵を何と思ふ。」永太郎「大きにお世話だ。」毛太郎次「俺は様々に考へたが、あの人がその實お前の本統の父ではあるまいかと思ふ。」これには永太郎の氣が移つた、この頃、自分の疑ひ初めたところの一つである。「え、え、何でお前はそのやうに思ふのか。」と我れ知らずその首を突出した。

一九五 もう一ヶ月ぐらゐ

どうも伯爵が我が父らしい。愈々さうなら天にも上る心地がする。早くさうといふ確證があれば好いと、このやうに心を焦してゐる永太郎だから、思はず毛太郎次の言葉に釣込まれ首を突出して問返したが、毛太郎次とても勿論確證のある譯でない。「さうとでも思はねば伯爵が餘りお前を可愛が

り過るからよ、俺はお前の暮し方を見て月々伯爵から貰ふ小遣も莫大だらうと思つてゐる、それに就けても俺への分前もずつと引上げて貰はねばならぬ。」と言ふのが彼の返辭であつた。

何事を言ふにも總て最後の一句は金を呉れるとか分前を引上げるとかの言葉へ落ちて行くので永太郎は蒼蠅くてならぬ、出来ることなら叩き殺してでも振捨てたい程に思ふけれど、このやうな手に乗る相手でない、振捨てようとする氣振でも見せれば反對にどのやうな目に逢ふかも知れぬから、たゞ詮方なしに話しの相手になつてゐると、毛太郎は様々の言種を持出して遠廻しに巖窟島伯爵の家の容子から伯爵の日常の振舞を聞出さうとするやうに見える、永太郎は窃に悟つた、此奴め、伯爵の留守を伺ひその邸へ忍び入つてこの身の誕生に關する書類でも盗み出す積であるのではあるまいか、そのやうな書類を探し出しこの身を確に伯爵の子と突留めれば、またも先へ廻つて強請の種を作るには違ひない、それとも或は、さうまで深い企みはなく、金子だけでも盗み出す見知らん、何れにしても伯爵家へ忍び入る底意だけは明白である。

かくは見て取つたけれど、此方もさるものである、少しも見て取つたらしい素振を示さぬ、却つて謀事の裏を行くやうな一計を咄嗟の間に案じ出し、向ふの問うがまゝに正直に伯爵家の案内を話し聞かせ、且つは伯爵が明日よりこゝ二三日オーチウルの別荘に行き巴里の邸を全で空にする筈であるとのことを告げた、これは嘘でない今朝伯爵に逢ひ直々に聞いたところである。遂に毛太郎は必要だけのことを聞取つたと見える、さうして今度は何氣もないやうな容子で永太郎

郎の手に在る指環に目を留めた。「おゝ、大層光る指環だな、これぐらゐの夜光珠は申々安くないだらう。」この言葉の眞意は流石の永太郎も計り兼ねた、何のために用もない指環などを褒めるのか多少訝しく思はれるから、「なあに夜光珠の値打は、所持した経験のない人には話したとて分らぬのさ。」と嘲りて探りを入れた、毛太郎次は竊に障つた體で「俺だつて夜光珠を持つてゐた経験はあるさ、その倍ぐらゐの立派な奴を。」成程彼は暮内法師から五萬圓の値打のある立派な夜光珠を恵まれたことがある、その経験は生忘れ得ぬところであらう、永太郎「では眞物と贋との見分けぐらゐは附くかい。」毛太郎次「どれ貸して見ろ、夜光珠の贋か眞物かはかうすれば一番好く分るのだ。」と言ひつゝその指環を脱ぎ取つて窓のところへ持つて行き、硝子板に傷を付けて見て、「あゝ此箇は眞物だ。硝子が切れるわ、この指環を俺に呉れ。」たゞ窓板を傷けた瑣細な振舞を見て永太郎の胸には宛も電光の輝くやうに一種の合點が差込んだ、しかしそのやうな色は見せず、たゞ腹の底で笑み、「お前が呉れと言ひ出す以上は應ずるまでまた様々に威すだらう。」毛太郎次「勿論さ。」永太郎「仕方が無い、遣るとしよう、しかしこれで今月の金の無心は御免だよ。」毛太郎次「まあ兎も角もこの指環を貰つて置かうよ。」

この翌日である、巖窟島伯爵は朝から執事を差圖して家の内を取片付けてゐる、多分は昨日永太郎

に話した通りオーチウルの別荘へ立つためだらうが、それにしても特別に片附けるとは當分こゝへ歸らぬ所存をでも極めたのではあるまいか、臆て片附き終つたところへ、家扶の春田路が現はれた。彼は先日伯爵がトレボーの海岸に船着きの好き別荘を買求めさせるためノルマンデーへ向け出張させ、彼の土曜日の晩餐會以來久しく不在であつたのだが、今漸く歸つて来たと見える、まだ衣服も旅被の儘で道途の塵に塗れてゐる。伯爵はそれと見るより「おゝ御苦勞だつた、今歸つたか、さうして用事は。」春田路「仰の通りに運びました。恰度好い賣別荘が海岸に在りまして。」伯爵「それは好かつた、して舟は。」春田路「はい、舟は先日御註文のがゼノアから出来て来ましたその別荘の下へ繋いであります、すはと言へば五分間も経ぬうちに別荘から乗込んで出帆が出来るのです。」伯爵「最も可し、それから馬は。」春田路「はい、馬も仰の通り、この町盡れから五里毎の村々へ人を雇うて飼はせてあります。」伯爵「十時間に百二十哩走つて行くことが出来るか。」春田路「はい、孰れも試験済の馬ですから一時間に十二哩以上確です。」伯爵は満足した、しかし何のためにこのやうな用意をなさせるだらう。トレボーの海岸まで五里毎に馬を置き、一日に百哩以上を疾驅して、五分の間に別荘から船に乗るとは、非常に急いでこの國から逃去るやうな場合でもあるのだらうか、伯爵は更に「俺のこの國の逗留ももう一ヶ月ぐらゐで終るだらうからその間少しも馬の駿足を鈍らせぬやうに注意せよ。」春田路「心得ました。」扱ては最早や後一ヶ月ぐらゐにして、企みに企みたる大復讐が首尾能く終るといふ見込か知らん、さうすれば刮目して觀る可きである。

かくて家扶春田路が退くや引違へて執事の一人が今届いたらしい一通の手紙を持つて来た。伯爵は直に受取つて封を切つたが無名である、さうして文句は「密告す、今夜閣下の不在を探知して貴邸に忍び込み閣下の書齋に在る秘密筆筒を探らんとする曲者あり、容易ならぬ目的を抱けること確なれば不在と見せて誘き寄せ、捕へし上にて詮議を加へるが得策なる可し、曲者は閣下の一身上の敵なるに似たり、この密告者は偶然のことにて曲者の計畫を知り得たればこゝに閣下に警戒を與ふるなり、然れども閣下これを警察に訴ふることをなさば一方ならぬ煩累を他日に遺す恐れあり、閣下密告者の言を信するならば必ず警察の力を假ること勿れ。」とある、伯爵は「はてな。」と言つて二度三度読み返した。

一九六 曲者 (一)

何者の密告かは知らぬが、兎に角今夜この邸に忍び込む曲者のあることは確である。巖窟島伯爵は二度三度彼の密書を讀返したが、「今夜閣下の不在を探知し。」とあるも架空の言葉ではない、全く我が身は今夜この邸にはゐないのだ。「書齋に在る秘密筆筒を探らん」と言ひ、「容易ならぬ目的を抱けること確なれば」と記せる如きも總て根據のある言葉である、抑も曲者自身がこの家の身の事柄を知つてゐるのか、それともこの手紙を書いた密告者が知つてゐるのか、孰れにしても多少は萬事の案

内を取調べての上の企てには違ひない。

伯爵の最初の決心は直にオーチウル行を見合せて、今夜自らこの家を守るといふに在ったけれど手紙の文句には「不在と見せて曲者を誘き寄せよ。」といふやうな忠告が籠つてゐる。成程それもさうだ。誘き寄せて捕へた上、その曲者が何者かといふことを見届けるが得策だ。次に伯爵の心に浮んだのは直にこの手紙を警察に持つて行き事情を訴へて今夜巡査の出張を請はんとするに在ったけれどこれも密書に斷つてある、「閣下これを警察に訴へることをなさば一方ならぬ煩累を他日に遺す恐れあり」云々「必ず警察の力を假ること勿れ」云々、密告者の意は明白である。

素より伯爵は曲者の来る如きを恐ろしと思ふ人ではない。凡そ人間の危険といふ危険は冒し盡して身をも腕力をも鍛へ固めた人である。危険な事を思へば、宛も勇士が戰場に臨む晨のやうに、武者震に身を震ふ程である。殊に大業を企てる身分だけに自分の敵も澤山にあることを自覺してゐる。名の分つてゐる敵もあれば思ひも寄らぬ敵もあらう。今夜忍び入る曲者は「閣下の一身上の敵なるに似たり」とあり、我が思ひ設けてゐる敵の中には眞逆に窃盜の如く夜半に我家へ忍び込む者のあらうとも思はれぬけれど、しかし巖窟島伯爵とはその實何者ぞと既に疑うてゐる人もないでもなければ、それ等の人が手下を送つてこの身の素性の分るやうな書類をでも探させようと企まぬにも限らぬ。それともこの身の思ひ設けぬ敵ならば猶更ら捕へて、自ら後々を警戒する参考とせねばならぬ。取つ置いつ思案して頓て最後の決心が定まつた。伯爵は誰にも知らさず腹の中で點首して何気なく右の密書を衣囊に收めた。

さうして定まつてゐる通り、オーチウルへ向けて立つた。これで、この屋敷は年老いた番人を除く外、全くの空になつた。曲者が忍び入るには屈強である。そのうちに日も暮れた。老番人はたゞこの家が空家や貸家でないといふ記しだけに、下階の入口に一箇所、二階なる正面の室へ一箇所、燈を付け、餘り夜の寒くならぬ中にと自分の室へ籠り、温かに寝てしまつた。これは年取つた番人の常である。かくてこの番人が最早や眠つたやうと思はれる頃、二人の曲者が庭の裏木戸を開いて忍び入つた。いやこれは曲者ではない。伯爵と黒如亞黎とである。曲者を捕へるために忍び歸つたのだ。

これより伯爵がどのやうな用意をしたかは管々しく記すに及ばぬ。兎に角曲者を捕へるに少しも手落のないだけに運びを附けた。さうして矢張り亞黎と共に書齋の次の室に身を置いて曲者の入來を待ち受けた。かうなると待遠い思ひもする。八時から十一時まででも待つた。曲者は中々來ぬ、時の経つのが至極遅い。その中に十二時の鐘をも聞いたが、世間は最早や寂然と静かである。その静かさに引込れて伯爵は椅子に凭つたまゝ、我知らず微睡だが、幾分幾十分を経たか知らぬ。忽ち我が背を推す者あるに心付き、驚き覺めて目を開けば亞黎が唇に指を當て静かにとの意を示してゐる。あゝ曲者が來たために亞黎がこの身を揺り起して呉れたのだ。

無言の儘に伯爵は耳を澄ませた。聞けば二階の孰れかの窓に當り微かな物音が聞える。初めて聞く聲ではない。どうやら夜光珠を持つて窓の硝子を切破つてゐるらしい。若しも伯爵にして、昨夜彼の

小侯爵皮春永太郎が毛太郎次に夜光珠の指環を與へたことを知つてゐるならこの曲者が誰かといふことを大抵は推量するだらうけれど勿論そのやうなことは知らぬ。先づ曲者が多勢であるか小人數であるかを確かめて置かねばならぬ。直に伯爵は立上つて、彼の音のする窓を尋ね抜き足で近づいた。窓は横町へ面した方の二階である。曲者は細梯子を懸けて壁を攀ち、二階の窓まで上つて來てゐるのだ。その手際を見れば成程たゞ者ではない。生憎月の無い夜とて能くは分らぬけれどエリシー街の角に在る常夜燈の光りが遠く射して、透かせば黒く曲者の姿が分る。多勢ではなく一人である。それとも下には相棒でもゐるか知らんと更に他の室へ行き彼方此方を透かして見ると、外の往來に一人、これは握に身を添へて立つてゐる。分つた曲者はたゞ二人である。一人が家に忍び入り一人が外を見張つてゐるのだ。

再び伯爵は前の室に歸つた。曲者はまだ硝子を切つてゐる。伯爵の躰音は室に敷詰めた苔のやうな絨氈に没して曲者には聞えぬ。曲者は厚い板紙を窓の硝子に當て、これを定木にして、切つてはまた切り四角に穴を開ける積りらしいが世間並の硝子とは違ひ餘程の厚板だから急には切盡せぬ。伯爵はそれと見て靜かに元の室に歸つた。しかしこれから間も無いうちに曲者の仕事は終つた。切つた硝子が外より推す力のため、四角に脱れて、絨氈の苔の上へ餘り甚い音もせずにはバタリと落ちた。その穴から曲者は手を差込み、窓の内なる彈き金を易々引起して置いて、さうして窓を開き、身軽く室の中へ入つて立つた。

一九七 曲 者 (二)

場合に依ると、多勢の曲者よりたゞ一人の曲者が恐ろしい。たゞ一人でこの堅固な邸へ忍び入るその度胸の強さを考へて見ると流石の伯爵も聊か氣を呑まれるやうな思ひがした。

そのうちに曲者は、暗い室中を探り探りて凡その案内が分つたと見え、襖を開いて伯爵の書齋にばかり、さうして彼の密告状に在つた通り秘密の筆筒に近づいた。この状で見るとこの曲者、確にこの家の案内を能く知つてゐる者に違ひない。自分でこの家へ度々來たことがあるか、それとも度々來たことのある人より聞いたのか、さなくばこのやうな暗いところで目的の筆筒へ易々探り當る筈はない。幸に伯爵の眼は暗闇で物を見ることが出来るまでに兼てその視力が鋭くなつてゐるから、曲者の大凡の状を次の間の襖の間から見て取つた。

頓で曲者は、忍び提灯を取出してその目的とする筆筒を照した。さうして鏡前のところを窺と検めたが鍵は附いてゐぬ。これには聊か失望だらうと思ひの外、彼は宛も鏡前直しを商賣にする職人のやうに一束の合鍵を取出した。その數の多いことは驚くべしだ。餘程これまで諸々方々の筆筒や弗箱を推し開いた奴に違ひない。とかう思ふと伯爵は我知らず失望した。餘程謂れのある曲者かと思つてゐたら、「何だ詰らぬ、たゞ通例の窃盜か。」と呟くを制し得なんだ。が、この時、曲者は筆筒

の鏡前へ俯向き懸つたため忍び提灯の明りがばつとその顔に差した。伯爵はこれを見て驚いた。成程仕業は通例の窃盗であるけれどその顔は、その人は通例の曲者でない。直に伯爵は立上り、また拔足で衣裳室へ退き、路易十六世が着たと同様の鐵板の襦袢を下に着込み槍でも短劍でも突くことの出来ぬやうに身を固め、その上へ僧服を着け僧帽を戴いて少しの間に暮内法師の姿になつた。さうして迂回して曲者のある向う側の室に出で外の様子を見廻した。これは伯爵の用意の綿密なところで、内を攻むるには先づ外を用心して置くのだ。ところが不思議なことがある。彼の外を見張つてゐるだらうと思はれた先刻の一人が、矢張りイんでゐるけれど、此奴、外を見張つてゐるのではない。外をどのやうな人が通るかそんなことには無頓着で、たゞ熱心にこの家の内の様子のみ伺つてゐるらしい。扱ては尋常の相棒ではない。見張番といふより外に、なほ深い目的を持つてゐるのだと、伯爵は早くも合點し、またも西黎の傍にいつて「その方は單に外の曲者にのみ目を付けてゐよ。」と命じ、さうしてその身は内の曲者が仕事をしてゐる書齋に入り、靜かに曲者の傍に立つて、「おや毛太郎次殿、お前は今時分こゝに何をしてゐられるか。」

全く曲者は毛太郎次である。問はれて彼の驚いたは非常である。彼は法師を幽霊かと疑うばかりに、後様に手を出して法師の顔を見、「おや、貴方は暮内法師。」叫んだまゝ後の語は出ぬ。伯爵「お暮内だよ、したがお前に逢つたのはもう十年も昔のこと、それを覚えてゐられるとは頼もしい。」毛太郎次は、「法師、法師。」と繰返した。法師「したが夜半に巖窟島伯爵の留守へ忍び込み、盗みなど企つるとは怪しからぬ。」毛「いえ、盗みなどの目的では。」法師「無いとは眞逆に言はれまい。窓の硝子を切抜いて、泥坊の用ふる忍び提灯を持ち、さうして澤山の合鍵まで。」一々證據を指さされては争ふべき餘地もない。毛「ですが法師さん、全く貧窮のために！」法師「お、貧窮のためと云うのか、成程貧窮のために、人の臺所へ行き食残りの麵麩を請ふと言ふのなら聞える。また通り合して店先から何か一品持逃するとでも言ふならこれも聞える。たゞ貧窮のために巖窟島伯爵の邸へ忍び込むとは少し受取り難いよ。さうすれば先年私の與へた夜光珠を五萬法に賣つた時、その珠玉商人を殺したのも矢張り貧のためと言ふのだらう。」毛太郎次はたゞ縮み込むのみである。「どうか法師、今夜のところはお見逃し下さるやうに願ひます。」全く手を合せて法師を拜んだ。

法師「正直に私の言葉に返辭すれば、許して遣らぬものでもない。」毛「返辭します、正直に。」法師「全體お前はマンドレー島の牢屋で終身服役してゐる筈なのに、どうして牢を出されたのか。毛「英國の或る人に救はれました。」法師「或る人とは。」毛「柳田卿と言ふ方です。」法師「お、さうか、あの卿なら私も能く知つてゐるからその方が諺を言つても直に分る。全體何故柳田卿がその方を救うて呉れたか。」毛「私と一個の鐵鎖に繋ぎ合されて、共に苦役してゐた囚人があつたのです。その者を助けるために私をまで共に助けて呉れました。」法師「その者の名は。」毛「辨太郎と言ひユルシカ島で育つた捨子です。」法師「助けられてそれからどうした。」毛「それから稼いで食つてゐるのです。」法師「諺を申すな。」毛「いえ諺ではありません。」法師「諺である、諺である。矢張り辨

ど企つるとは怪しからぬ。」毛「いえ、盗みなどの目的では。」法師「無いとは眞逆に言はれまい。窓の硝子を切抜いて、泥坊の用ふる忍び提灯を持ち、さうして澤山の合鍵まで。」一々證據を指さされては争ふべき餘地もない。毛「ですが法師さん、全く貧窮のために！」法師「お、貧窮のためと云うのか、成程貧窮のために、人の臺所へ行き食残りの麵麩を請ふと言ふのなら聞える。また通り合して店先から何か一品持逃するとでも言ふならこれも聞える。たゞ貧窮のために巖窟島伯爵の邸へ忍び込むとは少し受取り難いよ。さうすれば先年私の與へた夜光珠を五萬法に賣つた時、その珠玉商人を殺したのも矢張り貧のためと言ふのだらう。」毛太郎次はたゞ縮み込むのみである。「どうか法師、今夜のところはお見逃し下さるやうに願ひます。」全く手を合せて法師を拜んだ。

法師「正直に私の言葉に返辭すれば、許して遣らぬものでもない。」毛「返辭します、正直に。」法師「全體お前はマンドレー島の牢屋で終身服役してゐる筈なのに、どうして牢を出されたのか。毛「英國の或る人に救はれました。」法師「或る人とは。」毛「柳田卿と言ふ方です。」法師「お、さうか、あの卿なら私も能く知つてゐるからその方が諺を言つても直に分る。全體何故柳田卿がその方を救うて呉れたか。」毛「私と一個の鐵鎖に繋ぎ合されて、共に苦役してゐた囚人があつたのです。その者を助けるために私をまで共に助けて呉れました。」法師「その者の名は。」毛「辨太郎と言ひユルシカ島で育つた捨子です。」法師「助けられてそれからどうした。」毛「それから稼いで食つてゐるのです。」法師「諺を申すな。」毛「いえ諺ではありません。」法師「諺である、諺である。矢張り辨

太郎と助け合ひ、彼から送る金子を以て身を支へてゐるのだらう。」毛太郎次は拒みかね、「致し方がありませんその通りです。けれど構ひませんよ、辨太郎は大層な大金持の息子と分りましたから。」法師「どうして。」毛「能く世間に在る奴です。大金持の落胤と分つたのです。私生児です。」法師「大金持とは誰。」毛「巖窟島伯爵です。彼は伯爵の私生の兒なんです。」今度は法師の方が驚かされた。

一九八曲 者三

辨太郎を巖窟島伯爵の私生兒とは餘り間違つた推量である。暮内法師の姿となつて澄してゐる伯爵自身も、打驚いてまた打笑つた。毛太郎次は論證せんとするやうに、「自分の兒で無くば何で伯爵が月々澤山の金銭を與へますか。何で賈の父親をまで充行ひますか。彼れ辨太郎は小侯爵皮春永太郎など立派な名前で、立派な縁談まで整ひ懸けてゐる程です。」法師は聊か怒りを示し、「あゝ段倉家の令嬢と縁組の出来懸けてゐるあの小侯爵、あれが辨太郎と言ふ脱牢の罪人か、それは怪しからん。お前はそのやうな悪人が名譽の高い段倉家を欺いて婿夫にならうとしてゐるのを、知らぬ顔で見ているのか。」鋭く睨んで叱り付けた。その状は如何にも段倉家の名譽を愛護ふ人のやうである。毛太郎次は情無い聲で「何も私が段倉家の名譽の汚れるのを喜ぶ譯ではありませんけれど折角相棒が——いや折角辨太郎が出世し懸けてゐるものを私が妨げる譯には行きません。」法師は決然と、「可し、可し、可し、それでは俺が段倉家へ告げて遣る。」告げられては辨太郎も失敗し自分も金の蔓を失ふのだ。「どうか法師、そればかりはお許し下さい。」法師「ならぬ、ならぬ。汝と共に牢を破り罪の上に罪を重ねてゐる辨太郎とやら言ふ者を、立派な段倉家と縁組させるとは、どうして知らぬ顔でゐられやう。夜の明け次第に俺の口から何も彼も告げてしまはう。」毛「告げるとは、誰に告げます。」法師「知れたことよ、段倉男爵に。」毛太郎次は最早や止める道が無いと知つた。忽ち衣囊の中より、用意してゐる短刀を拔出して、「さうはさせぬ。」と叫ぶが否、躍り掛つて法師の胸に打込んだ。けれど法師はこのやうなことの用意に鐵板の鎧の胸を着込んでゐる。短刀はそのまゝ返され、さうして短刀持つた手は、力ある法師の手に、強く手首を握られた。毛太郎次は顔を蹙め、「痛い痛い、法師さん、貴方の手先は何と言ふ力でせう、もう少し弛めて下さい。」法師「神が俺には、汝のやうな悪人を懲すためにこの通りの力を與へて下さつた。俺は神に代つて神の意を行ふのだ。こゝで汝を攫み潰すは易いけれど、神の御心はまだ汝になさしめることがある。こゝに筆紙墨を與へるから俺が言ふ通りに書面を作れ。」毛太郎次「私は字を書くことを知りません。」法「偽るとかうだぞ。」と法師はまた握れる手を締め上げた。毛太郎次はまた跪いて、「痛い、痛い、何とでも書きますから弛めて下さい。」法師は直に紙筆墨を與へ、文句を口授して左の如く認めさせた。

段倉男爵よ、小侯爵皮春永太郎と稱して貴家に入出し、遠からず貴家の令嬢と結婚せんとす

る少年は、その實、罪人なり、先頃余と共にツローンの牢を破りて逃げ來りたる者なり、余は五十八號の、彼は五十九號の札附きたる囚人にて常に同じ鐵鎖に繋ぎ合されて服役しり、彼は辨太郎と言ふ名前にて姓も知らず父母も知らざる捨兒の成長したる者なり、舊惡の數々は監獄事務官に問合さば明白ならん。

これに署名させ封筒に入れた上、段倉の宛名町名番地をまで認めさせ終つて、さうして法師はこれを自分の懐へ入れた。これはその昔段倉が認めた密告状と略同じやうな密告状である。暮内法師の實嚴宿島伯爵がこの密告状をどのやうに用ふるやば暫らくの間疑問である。

「さあこれで用事は濟んだ、立去れ。」とは直に法師が毛太郎次に言葉である。毛太郎次は怪訝な顔でもう許して下さるのですか、警察へも引渡さずに、え、直に立去つて好いのですか。法師は無言で窓から外の暗を窺き、なほも先刻の怪しき一人が、戸外に此方を見張つてゐる様を見届け「うむこれでこの場だけは許して遣る。しかしこゝを立去つて何處まで汝が無事に行かれるかは俺には分らぬ。」何だか意味ありげな言葉であるが聞く當人は怪しみもせぬ。「いゝえ、こゝを立去れば何處へまでも無事に去ります。」法「さうか、若し汝の宿まで無事に歸り着くことが出来れば、それは神がなほ汝を保護してゐる記標だから俺も汝を保護して遣る。直に汝は何處へでも外國へ落延びよ、さうして再び悪事をせずに正直に身を支へて行く以上は俺から少しづつ年金を送つて遣る。」毛「統

統ですか、本統に年金を下さるなら、私は外國で正直に——」法師「さあへ行け。」

促されて毛太郎次は、前に破つた硝子窓から以前の細梯子を下り始めた。法師は自ら手燭を取つてその窓のところに差出した。その状は宛も外に見張つてゐる一人に「さあ今この者が立去るぞ。」と合圖して、見て取らせるためのやうに見えた。聽て毛太郎次の身が地に着くと齊しく法師は燈を消し、更に他の戸外を眺めるに都合の好い窓に行き、暗がりのまゝで眼を張開いてゐた。

そのうちに毛太郎次は庭を傳うて塀に行き、再び細梯子を懸けて上り、更にその塀の頂邊よりまた細梯子を垂れてすらくと下り始めたが、全く法師の言つた通り、宿へ着くまで神の保護が續かなんだと見える。彼の足が往來の大地へ着かぬうち、何處からか突々と走つて來て彼に近寄つたのは先程から見張つてゐた彼の一人である。この者は直に短劍を持つて、まだ宙にぶら下つてゐる毛太郎次の脾腹を刺した。さうして毛太郎次が落ちて仆れるが否や、更に十々減を刺すやうに、但しところも選ばずに、二刀刺して逃去つた。

「人殺し、助けて、助けて。」との叫び聲は深傷に惱む毛太郎次の口から微に出た。この時には早や法師と亞黎とが此處へ馳附けてゐた。法師は直に亞黎に向ひ、「早く行つて醫者を呼び、直にその足でオノレ街へ行き大檢事蛭峰氏の臨檢を請うて來い。」と命じた。亞黎はたゞ領首で急ぎ去つた。後に法師は毛太郎次の傷口に手巾を宛て等しつゝ、「曲者を逃したは残念だつた。」毛太郎次は微に聲が残つてゐる。「どのやうにでも手當して、どうか私を少しの間活せて置いて下さい。曲者を告訴します。」

法師「告訴すると曲者の名が分つてゐるのか。」眞に毛太郎次は悔しげで有る。「分つてゐます。確にその顔を見認めました。え、悔しい、旨く彼奴に謀られた。彼奴め、俺を殺すためにこの家の案内を教へ、窓硝子を切るやうに夜光珠の指環までも與へたのだ。さうして外に待伏してゐて。」法師「彼奴とは誰だ。」毛太郎次「辨太郎です。皮春小侯爵と言ふ辨太郎です。」悔しげに言ひ切つた。

一九九曲 者(四)

毛太郎次にこの家の案内を教へその上に窓を破る夜光珠をまで與へて置いて、さうして窃に待伏してこゝで毛太郎次を殺したとは、彼辨太郎の心の奸悪實に驚くべきである。毛太郎次が死にも得ず悔しがるも無理はない。

けれど巖窟島伯爵の暮内法師は敢て驚かぬ。實は暗の中をも見るほどの視力あるその眼で先程既に小侯爵皮春永太郎という辨太郎の姿を認めたのだ。認めて大概の様子を察したので、それだから毛太郎次に向ひ、「汝が無事に行かれるか否は俺には分らぬ。」と言つたのだ。しかし伯爵は面前にこの毛太郎次の死に悩む状を見て、また辨太郎のことを思ひ合せて、深い感慨を催し來り暫しは言葉をも發し得ず、拳を握つて毛太郎次の顔を見詰めた。これは何のための感慨だらう。他ではない、たふこの一時に歴々と神の意が現はれてゐると思ふためである。辛苦に辛苦を重ねた大復讐かたよこの

一事で緒口を開くのだと感したためである。

毛太郎次は悶かしげに、「法師、法師、どうか私の口供を寫し取り、検事へ出し、辨太郎を刑に處して下さい。彼を殺さねば私はこの無念が癒えません。それから言ふ中にも私は少しづつ死んで行きます。早くして下さらねば間に合ひません。」法師は急いで家の内に入り紙筆と、別に一瓶の氣附薬を持つて來た。さうして、「さあ望み通り汝の口供を寫して遣る。」と言ひ、「余は今コルシカ島無宿父母不明の辨太郎といふ者に殺されてこゝに死する者なり、辨太郎はツローン獄に在りたる五十九號の脱走囚にして今はこの巴里に在り。」毛太郎次は紙筆を受取つたけれども署名する力が無い。だらう。さうならこの末へ自筆で署名せよ。」毛太郎次は紙筆を受取つたけれども署名する力が無い。伯爵はそれと見て氣附薬三滴を彼の口に注いだ。誠に薬の力は争はれぬ。彼は筆を取上げて署名し得た。「この薬で私は蘇生ります。もう三滴、もう三滴」と後を強求て口を開いた。法師「この上吞めば頓死するわ。」毛太郎次「でも私は検事の來るまで生きてゐて、もつと辨太郎の罪を訴へたいけれど法師、私が死んだらどうぞ貴方の口から充分に検事へ言つて下さい。どうしても辨太郎の逃れぬやうに、これが私の死際のお願ひです。」今果の際にも自分の罪は悔ひずして人の罪を罰することをもみ氣に懸けるとは何たる悪人といふ者たらう。法師は併しこれを慰め、「宜し、汝の知らぬことをまで、俺が検事へ言立て遣る。」毛「え、私の知らぬこととは。」法師「例へば今夜汝の忍び入ることを、今朝既に辨太郎が密書を以て伯爵へ告げたことや——」毛太郎次はまた驚き、「え、辨

太郎が密書を送つて伯爵へ、私の忍び込むことを知らせましたか、悪人め、え、悔しい、悔しい。」法師「さうよ、辨太郎から密書が来たけれど生憎伯爵は不在であつた。さうして來合せた俺がその密書を受取つたから今夜此處で汝の來るのを待受けてゐたのだよ。」毛太郎次「さうとは知らず、え、辨太郎の毘に罹りました。」法師「その上にも一つ俺が檢事へ言つて遣るのは、汝の後を辨太郎が尾けて來て、初めからこの家の外に待伏をしてゐたことよ。」毛「それを貴方は御存じでしたか。」法師「さうさ、窓の外を窺つてその様を目認めたから、多分は汝が殺されるだらうと思つた。それだから俺は言つた、若しも汝が無事に宿まで歸り着くことが出来れば、神が汝を保護してゐる記標だから俺も暫く汝の罪を許して遣ると。」聞き得て毛太郎次は死物狂の拳を握り詰め、「それでは貴方も辨太郎と同様の悪人です。辨太郎の待伏を知つてゐながら私には知らせて呉れず、燈を取つてまで私を送り出して辨太郎に殺させるとは、これが法師のすることですか、悪魔、悪魔。」法師「法師であればこそ俺は汝に辨太郎の待伏を告げなんだのだ。待伏するのは辨太郎だけれど、實は神が辨太郎の手を假りて汝を殺さうとしてゐたのだ。惡を以て惡を打つ天意の巧妙な酈劑が見えてゐたから、天意を妨げてはならぬと思ひ俺は謹んで知らぬ顔でゐた。汝今は死際の身となつて辨太郎を恨むよりも謹んで神を恐れよ、悔悟にはどのやうな罪も亡びる。今死際でも神の宥を願ふのは遅くは無い。」法師の言葉、眞の神の言葉である。毛太郎次の頭も揚がるまいと思はれる程に嚴かに響いたけれど、彼は神をば知りもせず感じもせぬ。「何だ、天意の、酈劑のと、何處にその神の證據がある。」法師は更にまた嚴かに、宛も天の宣告をでも讀み聞かせるやうに、「證據は汝の身に在るのだ。汝自身は何よりの證據である。能く聞け、汝は天の惠を得て、人に劣らぬ健康の身體を以て生れながら、自分で天の賜物を粗末にして酒や蕩樂に身を持崩し、人の踏むべき正直な道は踏まず親友を賣るやうな悪人の中に交はり、一言で妨げることの出来る惡事を妨げもせず、その親友を再びこの世へ返さるゝとの出來ぬところへ追ひ落したこともあらう。そのことは曾て汝が尾長屋の店で俺に告げた言葉の中にもあつた。それだけれど神はなほ、一時に汝を罰するといふことはせず、今の中に悔改めよといふ警報のために汝へ先づ發苦を下した、汝はその時も恨んでゐた。世に若し神があらば何故自分のやうな正直者が榮えぬだらうと、それが汝の間違ひである。正直だのに榮えぬでは無い、汝の正直が足らぬから榮えぬのだ。その時神はなほも汝を警しめるために、この俺の手を以て、通例の人には見ることとも出來ぬ程の寶物を汝に與へた。汝はその寶を以て正直な榮を求めたか、さうで無い。その時には神の惠を思ひ知つたと言ひながら直にその夜に珠玉商人を殺したでは無いか、殺して二重の寶を奪ひ得たけれど、それは神の許さぬところである。直に神が汝の手からその寶を奪ひ去り汝は終身の牢に入れられた。これを汝は人間業と言ふだらうが、人間の法律を假りて神が怒を示し給ふのだ。」毛太郎次はまた叫んだ。「さうで無い、さうで無い、神がそのやうに不正直を罰するなら、毛太郎次よりも不正直な次郎や段倉が何故榮える、不公平だ、不公平だ。」法師「神の公平不公平を裁判する力は人間に與へられてゐぬ。次郎や段倉が何時まで榮えるか、重い罪には重い罰がある。重い罰には

師は更にまた嚴かに、宛も天の宣告をでも讀み聞かせるやうに、「證據は汝の身に在るのだ。汝自身は何よりの證據である。能く聞け、汝は天の惠を得て、人に劣らぬ健康の身體を以て生れながら、自分で天の賜物を粗末にして酒や蕩樂に身を持崩し、人の踏むべき正直な道は踏まず親友を賣るやうな悪人の中に交はり、一言で妨げることの出来る惡事を妨げもせず、その親友を再びこの世へ返さるゝとの出來ぬところへ追ひ落したこともあらう。そのことは曾て汝が尾長屋の店で俺に告げた言葉の中にもあつた。それだけれど神はなほ、一時に汝を罰するといふことはせず、今の中に悔改めよといふ警報のために汝へ先づ發苦を下した、汝はその時も恨んでゐた。世に若し神があらば何故自分のやうな正直者が榮えぬだらうと、それが汝の間違ひである。正直だのに榮えぬでは無い、汝の正直が足らぬから榮えぬのだ。その時神はなほも汝を警しめるために、この俺の手を以て、通例の人には見ることとも出來ぬ程の寶物を汝に與へた。汝はその寶を以て正直な榮を求めたか、さうで無い。その時には神の惠を思ひ知つたと言ひながら直にその夜に珠玉商人を殺したでは無いか、殺して二重の寶を奪ひ得たけれど、それは神の許さぬところである。直に神が汝の手からその寶を奪ひ去り汝は終身の牢に入れられた。これを汝は人間業と言ふだらうが、人間の法律を假りて神が怒を示し給ふのだ。」毛太郎次はまた叫んだ。「さうで無い、さうで無い、神がそのやうに不正直を罰するなら、毛太郎次よりも不正直な次郎や段倉が何故榮える、不公平だ、不公平だ。」法師「神の公平不公平を裁判する力は人間に與へられてゐぬ。次郎や段倉が何時まで榮えるか、重い罪には重い罰がある。重い罰には

用意の月日が掛るのだから遅いのだ。なほ聞け、その時にも神は汝に三度目の慈悲を現し、英人柳田卿の手を假りてまたも汝をツローンの獄から救ひ出し、正直に餘命を送られるだけの手當を與へた。それをも汝は不足に思ひ、なほも人の家に忍び入るなど、神の怒りを犯すやうなことばかりするため、最早や許しては置かれぬと、今夜このところに、この俺の視てゐる前で神は辨太郎の手を假りて汝に致命の罰を加へた。これでも未だ證據が分らぬと思ふのか。」不思議にも毛太郎はまだ口を利く力がある。「でも正直な人に褒美を神が賜はつた實例は無い。」法師「あるよ、あるよ、その實例は俺を見よ。汝はこの俺を誰と思ふ、俺の顔を見忘れたか。」法師は言ひつゝ法師の假鬘を脱ぎ捨て、顔を毛太郎の前に迫り寄せた。毛太郎は驚いて「え、柳田卿。」法師は再び顔の假作を拭ひ去り「柳田卿よりなほその前を能く考へて見よ。」再び迫り寄せた顔の面には、眞の人間を離れた如き静かな穏やかなところがあつて、たゞ眼のみ最と異様に輝いてゐる。毛太郎は恐れを顔に現はしつゝも右見左見た。「何だか見覚えはある顔だ。昔——昔——あゝ思ひ出されぬ。もう頭が混雜して——誰です、誰です——神様のやうな貴方の顔は。」法師は毛太郎の耳に口を寄せ細い聲で囁いた。自分の耳にさへも自分の名を入るを恐れる體である。それも道理や、二十幾年來、人に向つて告げたと無く、自分でさへも思ひ出すのを恐ろしと思ふ姓名である。「俺か、俺の姓は……だよ、俺の名は……だよ。」姓は團、名は友太郎、たゞ一語で毛太郎の胸には今まで思ひも寄らなんだ一切の明りが、稻妻の如く煌々と差込んだ。

二〇〇 一冊の始末書

法師の囁いたこの人の姓、この人の名に、毛太郎次は、忽ち何も彼も思ひ出した。これが驚かずにゐられやうか、無實の罪に夙の昔死だとのみ思つたその人が、いや死んだとより外思ふ道の無いその人が柳田卿となり暮内法師となつて今は我が目の前にゐる。眞に神の業、神の業としてもなほ合點の行かぬ程である。彼は力盡きてもう聲も出ぬ程の咽喉で叫んだ。「え、貴方が彼の、次郎や段倉に密告せられて行方も知れぬことになつた——」法師「さうよ、さうして今は巖窟島伯爵と言はれるのだ。」巖窟島伯爵と聞いて彼の驚きはまた加はつた。「世界一の大金持、さうです、さうです、巖窟島伯爵といふ貴方の姿は、幾度も見て知つてゐます。成程その面影が、昔の彼——に違ひが無い、あゝ神の業、神の業、このやうな神の力を信ぜずにながらぬ事ばかりしてゐたのは恐ろしい、恐ろしい。」全く彼は死際に神の力を信ずることが出来た。法師は言葉を柔けて、「神の證據を合點することが出来たなら幸だ。遅くは無いから罪の亡ぶるやう神に祈つて、心易く往生を遂げよ。俺も汝のために祈つて遣る。」と言ひ眞に法師が死際の人のために神の救ひを求むるやうに祈りを捧げた。毛太郎次は幾度も口の中で、「彼の友太郎が——あの暮内法師——不思議だ——恐ろしい。」など唱へて絶命した。